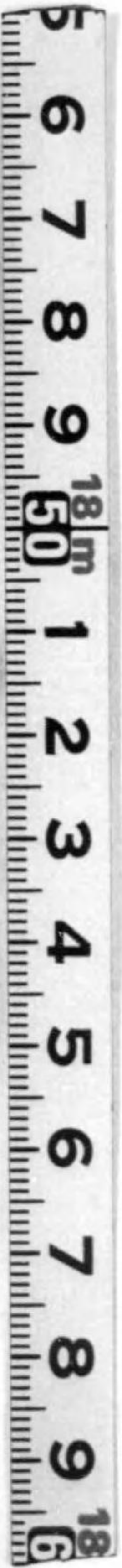


289

289-Y862ウ



1200500732698



始



调查

一、调查目的

一、调查对象

289
Y862



悦翁傳

沖野岩三郎編



近江兄弟社の三創立者(右より)村田幸一郎、吉田悦藏
一柳米來留(大正五年ガリヲヤ丸にて)

蔵悦の日き若

(作人故)歌の江近



目次

一、家	系 元仁二年より明治三十九年まで六百七十九年間	一
二、生	立 明治二十三年より明治三十六年まで	八
三、商業學校時代	代 明治三十六年より明治四十年まで	七
四、放蕩息	子 明治三十六年より明治四十年頃まで	六〇
五、涙の祈	祈 明治四十年	六四
六、再び八幡町へ	へ 明治四十一年より明治四十二年まで	一〇三
七、留守	居 明治四十三年	一〇六
八、野田傳道	道 明治四十三年	一一〇
九、第一回世界一周旅行	明治四十五年より大正三年まで	一一九
十、家督相續	大正四年	一二七
十一、結婚	大正五年	一三六
十二、愛母と愛兒	大正六年	一四四

十三、傳道團の葬式と復活	大正六年	一五
十四、重なる喜び	大正八年	一六〇
十五、二度目の世界的會合	大正九年	一六七
十六、紫苑會館	大正十年	一七四
十七、メンソレータム時代	大正十一年	一七六
十八、關東大震災	大正十二年	一八六
十九、堅田傳道	大正十三年	一九一
二十、二十年の後を見よ	大正十四年	一九六
二十一、二人の教友	大正十五年	二〇一
二十二、母ごころ	昭和二年	二〇六
二十三、團扇二十萬本	昭和三年	二〇九
二十四、働き盛り	昭和四年	二一八
二十五、利鎌は待てり	昭和五年	二三三
二十六、南船北馬	昭和六年	二三四
二十七、三度目の外遊	昭和七年	二四五

二十八、勤勞女學校と向上學園	昭和八年	二六一
二十九、近江兄弟社	昭和九年	二六九
三十、死線を越ゆ	昭和十年	二八一
三十一、創家の	昭和十一年	三〇八
三十二、祝詞奏上	昭和十二年	三三八
三十三、多事多忙	昭和十三年	三四九
三十四、教會禮拜の全國放送	昭和十四年	三五七
三十五、新體制	昭和十五年	三六五
三十六、皇恩骨身に徹す	昭和十六年	三八二
三十七、菊花に包まれて	昭和十七年	四〇三

凡例

- 一、氏名は普通敬稱を用ひず其の氏名を完全に書くを原則とす。ただし一柳米來留と吉田悦藏のみは、メレル或は米來留、悦藏と書く。
- 二、外國語を片假字にて表現する場合、その長呼符は母音の時のみーを用ひ子音の發音は、ア・イ・ウ・エの四字を長呼符となすを原則とす。ハアド・タアキイ・ルウツ・ベエジの如し。ただしメソソレータム・ヴォーリスの如く以前より用ひ慣れたる固有名詞は其のままに用ふ。
- 三、文中に「」『』等の括弧を用ひず句讀點をもつてこれに代ふ。
- 四、文中々々／＼等の畧字符を用ひざるを原則とす。
- 五、假字づかひは古典假字遣とす。
- 六、年號はことごとく皇紀又は日本年號を用ふ。
- 七、年齢はすべて數へ年を用ふ。

編者 沖野岩三郎

吉田家の祖先に浦部佐中といふ武士があつて、下野の國河内郡宇都宮に居住してゐた。皇紀千八百八十五年、後醍醐天皇の元仁二年の正月に、淨土眞宗の開祖親鸞上人は東國教化のため下野に行つて、同國芳賀郡物部郷に根本道場を開いた。道場は水田中の小高い所にあつたので、その地を高田と言つた。道場の庭に表面が圓座のやうに平坦な大きな石があり石の傍に大きな柳が聳えてゐたので、高田の別名を柳島とも言つた。翌嘉祿二年に伽藍成就の大供養があり、専修阿彌陀寺の勅額を賜つた。これが謂ふ所の高田専修寺で、親鸞は此の寺を弟子の眞佛房に譲つて京都へ歸つたが、その十世眞慧の時伊勢の國一心田に寺を移して眞系高田派の本山となり、今尚高田専修寺と呼んでゐるのである。

一、家系

元仁二年より明治三十九年まで六百七十九年間

吉田家の祖先に浦部佐中といふ武士があつて、下野の國河内郡宇都宮に居住してゐた。

皇紀千八百八十五年、後醍醐天皇の元仁二年の正月に、淨土眞宗の開祖親鸞上人は東國教化のため下野に行つて、同國芳賀郡物部郷に根本道場を開いた。

道場は水田中の小高い所にあつたので、その地を高田と言つた。道場の庭に表面が圓座のやうに平坦な大きな石があり石の傍に大きな柳が聳えてゐたので、高田の別名を柳島とも言つた。

翌嘉祿二年に伽藍成就の大供養があり、専修阿彌陀寺の勅額を賜つた。これが謂ふ所の高田専修寺で、親鸞は此の寺を弟子の眞佛房に譲つて京都へ歸つたが、その十世眞慧の時伊勢の國一心田に寺を移して眞系高田派の本山となり、今尚高田専修寺と呼んでゐるのである。

浦部佐中は宗教心のあつた人であつたと見え、親鸞が物部郷に來たと聞いて、すぐそこに駆けつけ、教を受けると共に其の道場建立に力を盡してゐるうちに、遂に親鸞の弟子となつて法名を延智と言つた。謂ふ所の二十八弟子の一人である。そして別に一寺を建て専光寺と名づけてそこに住んでゐた。佐中の子孫は武士として播磨に行き赤松圓心の臣下となつて凡そ百年間、代代赤松家に仕へてゐた。

二
が、嘉吉の變に赤松家が滅亡した時、當主は播磨の揖保郡太市村（太市）に逃れて、そこで姓名を變じ高田閑進是安と呼んだが、後には是川五兵衛是安と改名して純然たる農夫となつた。この五兵衛是安が是川家の開祖である。

五兵衛の子裕清は信教の志が厚く、新に専光寺を再興して祖先の志を繼いだのである。それから約百二十年の後一向一揆が起つた。

一向一揆とは親鸞の創めた本願寺派の第八世蓮如が、今の大阪城址である攝津の石山に本願寺別院を建て、そこを完全なる城廓として全國の信徒を集め、蓮如・實如・證如・顯如の四代にわたつて此の法城を護つた一黨のことを言ふのである。

當時足利氏は既に滅びて兵馬の權は織田信長に歸せんとしてゐた。

皇紀二千二百三十五年の天正三年、信長入朝して正親町天皇より天盃を賜り、權大納言右近衛大將に任ぜられ次いで内大臣の榮職にのぼつた。けれども天下は未だ統一せられなかつた。當時信長の最も患ふる強敵が三つあつた。一は北陸の上杉謙信、一は中國の毛利一族、他の一は大阪の石山城を本據とする一向一揆であつた。しかも一向一揆の背後には毛利一族の應援があつた。

信長は先づ畿内を平定したかつた。しかし攝津石山に一向一揆の立籠つてゐるが爲に、畿内の平定は意の如くにならなかつた。そこで信長は大兵を遣して石山城を圍ましめた。

此の報を得た専光寺の是川一族は信徒と共に馳せつけて石山城に入つた。

信長の兵數千は遮二無二石山城を攻撃したが、一向一揆は能く防ぎ能く戦つて七年の長き間沮喪の色を見せなかつた。天下の戡定を急ぎ焦立つてゐる信長は、最も要害堅固な石山城を一日も早く自己の手中に收めたかつたので、正親町天皇に奏上して、本願寺との和睦御執りなしを願ひ奉つた。そこで、天皇より宸翰を本願寺に下し給うた。

顯如は一門連枝を集めて評議したが、其の子教如は父の命に背き飽くまで信長と戦はんとしたので、顯如はこれを義絶して自分は謹んで命を奉じ紀伊和歌山の鷲の森別に退去することにしたのである。

その時播磨から出て來た専光寺の是川一族も顯如と共に和歌山に行つたが、信長の死後播磨に引きあげ百餘年間その地に住んでゐた。

是川家は後に是川・鴻坂の二家に分れた。宗家の是川は播磨の國揖保郡太市村字西脇の専光寺を守つて明治維新の際に及んだが、鴻坂一家は攝津に出て商業に従事し、後に姓を吉田と改めた。

吉田家は兵庫に出て油商を營んでゐたが、吉田金介の代になつて、攝津武庫郡西宮濱石才町の西尾武兵衛の二男を養子として金介の名を繼がしめた。それは慶應元年十一月のことで、その時養子金介は二十七歳、妻のひでは二十一歳であつた。

二代目金介は養父の業を繼いで、種油・魚油・石油など、油類の卸賣小賣を營んで、かなり手廣く商賣をしたので、家號吉金の名は遠く隣縣にまで知られてゐた。

この金介に二子があつた。長を慶藏次を金之介と呼んだ。慶藏は皇紀二千五百二十七年の慶應三年の出生で、弟金之介は皇紀二千五百四十一年の明治十四年に生れたのであるから、金之介の生れた時兄の慶藏はもう十五歳であつた。

その後慶藏は故あつて井上家の死跡相續をなし、名を久介と改めた。この井上久介とその妻りうとの間に二男一女があつた。長男を悦藏、次男を徳藏、長女をまつと呼んだ。

長男悦藏と長女まつは父と共に井上姓を名乗つて井上悦藏・井上まつと言つたが、次男徳藏には吉田姓を名のらせる爲に、祖父吉田金介の實子として届け出たので、生れた時から吉田徳藏であつた。その時金介は五十八歳、妻ひでは五十二歳であつた。

悦藏は皇紀二千五百五十年の明治二十三年三月九日生れで、徳藏は二千五百五十六年の明治二十九年三月十九日生れであるから、徳藏は悦藏よりも六歳年下の叔父といふことになつたのである。

悦藏・徳藏・まつを産んだ其の母りうは、兵庫の船問屋阪田彌右衛門の三女で、皇紀二千五百二十六年の慶應二年十月十日生れであつたから、夫井上久介よりも一歳の年長であつた。りうの父阪田彌右衛門は性質豪放で酒癖はあつたが町内の人たちから尊敬せられてゐた。彼は手廣

く商賣をやつてゐて何十艘といふ千石船を裏日本から北海道まで廻してゐたのである。蛤御門の變で敗れを取つた長州兵が引揚の時乗つて行つた船は彼の持船だつたのである。そんな關係からであらう、彼の一家は長州藩の伊藤博文の一家と可なり親密に交際してゐたらしい。

五港が開放されて神戸に外國人の居留地ができる前、彼が海岸に建てた別宅を外國人の住宅として貸せといふ命令を太政官から受けた。ところが異人と言へば身顛ひするほど西洋人排斥の彼は斷然謝絶した。しかし太政官の命令は強かつた。で、やむを得ず天照皇大神にお詫をしながら別宅を異人に貸したが、そこで牛肉を食つたり牛乳を飲んだり、土足で座敷へ上るのを見て彼は遣る瀬のない憤慨を覺えた。程なく居留地が定まり西洋館が建つて、今まで入つてゐた異人たちが彼の別宅を立去ると、彼は早速その家を取毀ち、穢の浸み込んだ敷地の土を三尺ばかりも掘り下げ、その土を海に投げ捨て、そのあとを生田神社の神職に祓つてもらひ、湊川神社の境内から砂を戴いて來て屋敷に散布した上、塩をまいて潔めた上に新宅を建てたのであつた。何故そんなにまで異人が嫌ひであつたかといふ理由の一つは、異人はみな國禁の切支丹を信じてゐるからであつた。

こんな潔癖で豪放であつた彌右衛門の娘りうは身體も健康であり、性質もしつかりしてゐた。吉田家の二代目金介は、そのしつかり者を見込んで、倅久介の嫁にしたのである。

りうは二十五歳で長男悦藏を産んだ。それから四年目の明治二十六年五月二十日に、舅金介は五十

六歳、姑ひでは四十九歳で戸籍上の隠居をして、吉田家は二男金之介に相続させたが、その時金之介はまだ十二歳の少年だったので、家業は相變らず金介が經營して、井上姓を名乗つてゐる久介・りうの若夫婦がこれを助けた。

二年の後金之介は十五歳で大阪平野町二丁目松本重太郎經營の洋反物商店へ丁稚奉公に出たが、實兄井上久介が家業を勵まないので、明治二十九年の五月に十七歳で家に歸り、家業を繼ぐことになつた。

金之介の歸る二月前の三月十九日に、久介と、りうとの間に男の子が生れた。それが戸籍上吉田金介の三男として届け出でた徳藏である。

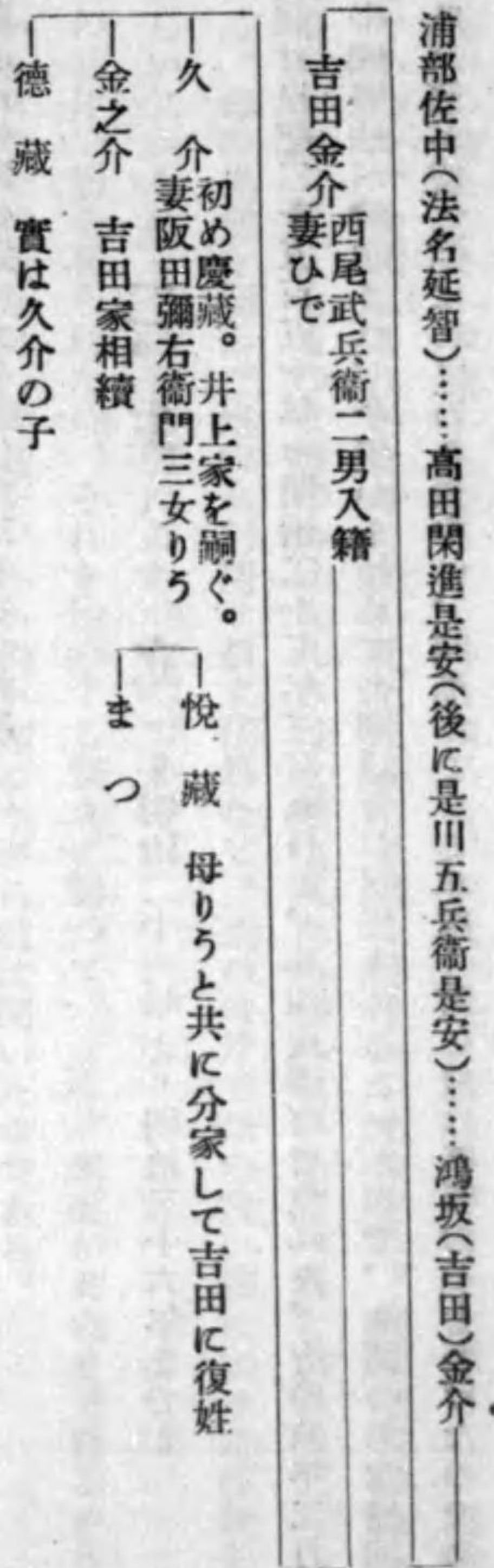
徳藏は生後直に家本吉太郎に預けられた。その時家本家には子供がなかつたので、徳藏は吉太郎夫妻を實父母のやうに慕ひながら、そこで成長したのである。

皇紀二千五百年の明治三十三年十二月十九日に吉田家の戸主金之介は、二十一歳で西田リキと結婚して獨力で家業を繼いで行くことになつた。時に金之介の父金介は六十二歳、母ひでは五十六歳であつた。リキは天津市の油商西田利七の三女で、吉田家と西田家とは營業上の知合であつたのである。翌三十四年に、金介の長子である井上久介は三十五歳で亡くなつた。久介の死後その遺兒悦藏・徳藏・まつの子は、その母りうと共に吉田金之介の保護の下にあつたが、明治三十九年七月五日に、

悦藏の妹まつは幼くして死亡した。

三箇月の後十月二十六日に、悦藏は井上家を廢家して、叔父金之介方に復籍して吉田姓を名乗り、翌日母りうと共に神戸市兵庫下澤通五丁目七番地に分家して別に一家を立てた。

以上を概括すると左の如き系譜となるのである。



鴻坂・吉田家の宗家は川家は嘉吉の變以來四百五十年間、是川姓で一貫して今に及んでゐる。皇紀二千五百二十七年の慶應三年に、是川家の一族吉田家に長男慶藏(後に久介)が生れた時、是

川家にも一男兒が生れて郁示と名けた。

郁示は後に朝鮮に渡り江原南道の鶴橋に是信寺といふ一寺を建てて、そこで半僧半農の生活をなしつつ熱心に佛教傳道に力を盡してゐるのである。

二、生

立

明治二十三年より明治三十六年まで

悦藏は皇紀二千五百五十年の明治二十三年三月九日に、兵庫永澤町で生れた。その前年二月十二日には帝國憲法が發布され、今年から始めて帝國議會が召集されるといふので、全國の津津浦浦で愉快節・欣慕節が盛に歌はれてゐる最中に、開港地である兵庫の町に彼は呱呱の聲をあげたのである。

悦藏の父井上久介は幼少の時から利口で、殊に珠算に長じてゐたから、父の金介も將來に望みを囁してゐたが、十四歳の頃から悪友に誘はれて酒を飲みはじめ、後には悪い遊びを覚え、市内各所の青樓に流連荒亡して金銭が盡くれば父の許に使を遣つて必要額だけ取り寄せる。父が怒つて金を渡さなければ、平然として附馬を牽いて歸つて来る。そして金銭を強請しても應じない時は兇器を振り舞はして亂暴するので手のつけやうがなかつた。酒が醒めると五日も十日も酒は一滴も飲まないで必死になつて家業を手傳つてゐるかと思ふと、ふいと家を出て盃を手すれば、また五日も十日も朝から晩

まで酒ばかり飲み通し亂暴の極を盡すので、両親も持てあまして京都の病院に入院せしめて置くところなく、それを脱出して今後は決して酒を飲まない約束で家に入れてもらふが、その約束は一箇月も守られないで、また病院へ送られるといふ有様であつたが、幾度か入院させた結果少しく酒亂が薄らいだので、この久介にしつかりした婦人を妻にもさせたならば、或は眞人間になるかも知れないといふので、迎へ入れたのが悦藏の母りうだつたのである。

ところが久介の酒は依然としてやまなかつた。悦藏が母に手を引かれて、二十町ばかり離れた所にある湊川の楠公さまへ參詣するやうになつた頃から、悦藏の眼に映じた父久介は恐ろしい酒飲のあばれ者であつた。悦藏はこれがために父の愛をほとんど感じ得なかつたらしい。何故ならば恐ろしい父のために、出刃庖丁をもつて追つかけられる母を幾度見たか知れないほど、母を虐める父だつたからである。母の黒髪を掴んで室内を引摺り廻す狂暴な父、盃の破片で母の白い顔に大きな怪我をさせた恐ろしい父から慈みを感じる筈はなかつたのである。

盃の破片で頬を斬られた時、それを治療する醫者に對つて、どうぞ傷痕が死ぬまで残るやうにして下さいと言つた悲痛な母の言葉を、小い胸を痛めながら彼は聞いたのである。

そんな亂暴な父ではあつたが、それでも酒を飲まない時には、やつぱり人の子の父としての愛情をもつてゐることを幼い悦藏は知つてゐた。

悦藏が六歳の舊正月、久介夫妻は悦藏を伴れて大阪へ遊びに行つた。そして呉服屋の丁稚奉公をしてゐる金之介を訪問して慰めたり、十日戎の祭禮を見に行つたりした時、少しも酒を飲まない父を見て、どうぞいつまでも、こんな父であつてほしいと、彼は心の中で手を合せて拜みながら父の顔を見たといふ事である。けれども久介の酒癖はどうしても癒らなかつた。

皇紀二千五百五十六年の明治二十九年の三月十六日に母りうは徳藏を産んだが、すぐに家本吉太郎に預けて養育を頼んだ。翌月一日に悦藏は兵庫尋常高等小學校の尋常科第一學年に入學したが身體はあまり丈夫でなかつた。けれども伶俐な質で教師に愛せられ友達にも尊敬せられた。家にゐて能く人の顔色を觀て行動した。七の宮の祭禮に行つて來て、覗眼鏡の歌を眞似て祖父母を感心せしめたり、町で見た飴賣の眞似をして祖父母を笑はせたりするので、酒さへ飲まなかつたなら、此の子は一人前になれるぞと言つて、將來に望を囑せられるやうになつた。それは彼の父が酒魔の捕虜とならない時は、普通人以上の明敏な頭で、二挺の算盤を同時に兩手で使つて帳簿の締上げをして人を驚かしたり、商機を逸せず機敏な金儲けをしたりするので、彼を彼の父から酒魔を放逐した男に仕立てたいと思つたのであらう。彼が親類の家に行くと、誰も彼も言ひ合せたやうに、悦藏酒を飲むな。親の眞似をするな。と、言ひ聞かせた。祖父金介は彼を膝もとに呼んで、わしが死んだあとで、もしもお前が酒を飲みよつたら佛壇からとび出して來て、お前の喉くびへ咬みつくぞと嚇すやうに言つたこともあ

る。そんな事を聞かされる毎に、彼は父の酒癖を心底から悲しんだものである。

彼が尋常小學一年生の時であつた。學校から歸つてみると母が居ない。どうしたのかと祖父母に聞いてみたが、二人とも眼に涙を浮べてゐて何とも言つてくれない。で、若い叔父の金之介にきくと、母は父の亂暴に堪へかねて實家へ歸つて行つたとの事であつた。

その話をきいた彼の小さい胸は張り裂けるほど苦しかつた。亂暴狼籍を極めた父が巡査に兩手を縛られて警察署へ曳かれるのを見た時の悲しさに比して幾倍の悲しさを彼は感じたのである。無論親戚の人たちが仲に入つて交渉したであらうが、頑として彼の母は歸つて來なかつた。

彼は祖父母にも叔父にも内證で一枚の郵便端書を買つて來て、それに生れて初めての手紙文を書きつけた。片假字ばかりの小さい文字で、ひたすらに歸つて來てほしいと、繰返し繰返し書いたのである。

悦藏は祖父母に、徳藏は家本家に託して置けば大した心配はない。自分があんなに夫から虐待される有様を子供に見せることは、自分が傍に居ない以上の苦み子供に與へるものだと思つた彼の母の決心は相當堅いものであつた。けれども彼女が悦藏から受取つた假字ばかりの端書を読んだ時は其の決心も根底から覆されてしまつた。

彼女は聲をあげて泣いた。それはたとへ二三日であつたにしろ、子を棄てたといふ自分のつれなかつた仕打を後悔したからである。

一二
殺されてもよい、子供の側にゐてやらう。それは彼女の再び井上家に歸つて來た決心だったのである。

第九拾八號

修業證書

兵庫縣平民

井上

悦藏

尋常小學校第一學年ノ課程ヲ修業セシコトヲ證ス
明治二十三年三月生

明治三十年三月三十日

兵庫縣神戸市立兵庫尋常小學校

厚い鳥の子紙に、こんな文句を書いた立派な修業證書をもつて、にこにこしながら小學校から歸つて來た我が子の姿を見た久介も妻のりうと共に、この修業證書を手にして喜んでに相違ない。

悦藏は十一歳の明治三十三年三月三十日に優等の成績で兵庫尋常高等小學校尋常科第四年を卒業し

て、更に高等科第一年に進んだ。この頃彼は頻りに稗史小説をあさつて武勇傳に讀み耽つた。それは自分も宮本武藏や岩見重太郎のやうな英雄になつて、時々酒亂を起して母を虐める父を取つて押へるやうな脅力を欲しいと思つたからである。けれども、まだまだ彼のか弱い腕では人並すぐれて脊の高い父の暴れ廻るのをどうする事も出来なかつた。

けれども此の年、彼の心には一つの喜びと希望が胸に浮んで來た。それは彼の叔父金之介が二十歳になつて滋賀縣大津市下堅田町の同業者西田家から、リキといふ十八歳の若い嫁を迎へて吉田家の全責任を負ふやうになつたことであつた。

金之介は悦藏に取つて叔父に當るのであるが、年は僅に九つしか上でなかつた。だからいつも兄さん兄さんと呼んで兄弟のやうにしてゐた。此の金之介は兄の酒癖を見て、ぞつこん酒といふものを恐れ遠ざけながら實直に家業を勵んだので、悦藏に取つては正に理想の人物であつた。その金之介が結婚して本家を治めるやうになつたのを見た悦藏は尋常一様ならぬ喜悅で、この若い叔父を深く信頼した。

翌明治三十四年四月一日に彼は相變らず優等の成績で高等小學校二年に進級した。その頃父の久介は色蒼ざめて病の床に臥つてゐた。久介の素行を知る限りの人達はその病源を大酒の祟りだと言つてゐたが、一家の者はこれが爲に酒を止めてくれるならばといふ淡い希望のうちに、その看護を怠らな

つたが、五月二十四日のこと彼は朝早く起きてひとり近所の散髪屋へ出かけた。

その日の午後悦藏が學校から歸つて来てみると、久介は髪をきれいに剃つてゐた。

夕食後久介は寢室から、悦藏ちよつとここへおいで、お松もおいで。と、呼んだ。二人は何事だらうと思ひながら恐る恐る父の寢室へ入つてみると、青坊主になつた久介は、きちんと寢床の上に坐つてゐた。眼には涙が一杯浮んでゐる。幼少な二人はどうした事かと思議に思つて其の顔を見詰めてゐると、病み衰へた久介は兩手をついて頭を疊に摺りつけるやうにして言つた。二人とも今日はよく聞いてくれ。お父さんは今まで悪かつた。年は行かないでも二人はお父さんのした事が悪かつたと思つてゐるだらう。わしは今この通り頭を下げてあやまるから、何にも言はずに宥しておくれ。病氣がなほつたなら、すつかり生れ變るから……言ひ終つてとめどなく涙を流した。二人はその言葉を聞いて聲をあげて泣いた。それは手のつけやうも無かつた父の改心が此上もなく嬉しかつたからである。次の室にゐた母のりうも涙に暮れてゐた。

それから三日の後、明治三十四年五月二十六日に久介はまだ三十五歳の若さで此世を去つたのである。酒癖のために狂暴の限りを盡した父ではあつたが、發心したやうに髪を剃つて、親として吾が子の前に兩手をついて謝罪した事を思ふと、まだ三十年五十年生きてゐてほしいやうに感じたのは、悦藏一人では無かつたらう。

葬式萬端を終へたあとで、りうはまつ子をつれて兵庫皿池の附近にある金之介が經營してゐる油工場の監督の住んでゐた家に引移つたが、悦藏だけは祖父母と叔父との家にゐてそこから小學校に通つてゐた。その時祖父金介は六十三歳、祖母ひでは五十七歳、叔父金之介は二十一歳、母りうは三十六歳であつた。

翌明治三十五年に彼は十三歳の春を迎へた。此の年彼が祖父母と若き叔父とに見せて喜んでもらつたであらう二通の立派な辭令が今に残つてゐる。

高等科第二學年

井上悦藏

第十三學級副級長ヲ命ズ

兵庫高等常小學校

明治三十五年一月二十日

高等科第三學年

井上悦藏

第五學級級長ヲ命ズ

兵庫高等常小學校

明治三十五年四月二十三日

二通の辭令には兵庫縣神戸市立高等小學校といふ大きな角印が捺されてある。これまでに何回か級長に推されたであらうが、その辭令は残つてゐない。

明治三十六年三月三十日に彼は兵庫尋常高等小學校の高等科第三學年を優等の成績で卒業した上精勤賞まで授けられた。當時の小學校令では高等小學四年制であつたから、まだ卒業まで一年を餘してゐた。けれども彼の母は一日も早く彼を兵庫の地から離れしめたかつた。此の子も親の子であるから兵庫の地に置くと、またとんでもない放蕩者になるかも知れないので、早く立派な學校に入れて厳格な教育を施したいといふのは、母一人だけの希望ではなかつた。

當時、近江八幡の滋賀縣立商業學校は全國的に有名であつた。近江商人の本場にある商業學校だから、そこを卒業させるなら理想的な商人になれるといふのが一般の風評で、商家の子弟が全國から集つて來た。北海道の大實業家古屋某の如きも特に此の學校を選んでその子弟を入学せしめたといふ程有名であつた。だからその學校へ悅藏を送りたいといふのが母りうの主張であつた。で、戸主の金之介から大津市下堅田町の妻の父西田利七に相談の手紙を出すと、利七は大賛成で自家の取引先である八幡町の田中といふ油屋に下宿する世話までしてくれと言つて來た。

そこで、彼は三月の末に母と二人で近江八幡に來て滋賀縣立商業學校に入学試験を受けた。多くの受験者は高等小學四年修業者である。その修業者すら豫科生として入学許可を得る者が多い中で、彼

は高等小學校三年修業で本科一年に編入されたのである。當時滋賀縣で唯一校しかない縣立商業學校へ彼は最年少者として入学することが出來たのである。これは彼自身の希望が叶つたといふよりも寧ろ母りうの本願が成就したといふべきであつた。

かうして彼は滿十三年一箇月で商業學校の制服を身に纏ふことになつたのである。

三、商業學校時代

明治三十六年より四十年まで

父久介が悪友に誘はれて不良少年の仲間に入つたといふ同じ十四歳の春、悅藏は幸福にも全國有数の商業學校に入学したのである。

母に伴れられて初めて來て見た近江八幡の町は唯寂しい靜かな田舎町として彼の眼に映じただけであつたが、街が碁盤目になつてゐることと其の道路が蒲鉾道で下水が綺麗に流れてゐることが彼の八幡町に對する第一印象であつた。

學校は八幡町の南の隅にあつて、木造の粗末な二階建二棟と、平屋の講堂と寄宿舎各一棟がその總てである。學生は總數三百名、教職員は二十餘名で校長は從七位安場禎次郎であつた。

近江八幡の町は近江商人の根據地である。織田信長が安土に天主閣を築いて武威を天下に誇示した

頃、その城下にゐた商人達が、織田氏滅亡の後悉く此所に移住したのだといふ話も、近江源氏佐佐木氏が衰亡した後其の家来たちが腰の大小を肩の天秤棒に變へて旅商人になり、高綱が宇治川を渡る時景季をうまく賺して天晴れ先登第一の功名を得た機轉で、みんな金持になつたのだといふやうな話も、悦藏は此の商業學校に入學して始めて聞いたのであつた。

母は彼を父のやうな放蕩者にさせまいといふ一念から此の學校へつれて来て、近江商人の眞中に手放したのである。けれども彼は別に何等の疑問をも懐かないで毎日楽しく學校に通つた。商人と屏風は曲らねば立たぬといふ俚諺の意味も、商人のよき衣、着たるやうといふ古今集の序文にある言葉の意義をも知らないで過してゐた。しかし、三箇月五箇月と經つうちに校内の事情がだいぶんわかつて来た。

此の學校は縣立ではあるが、今まで彼の見て来た兵庫縣の縣立學校とはちがつて、制服制帽は影が薄く、前垂掛で腰に煙草容をぶらさげてゐる學生があつたり、インペネスを着込んで鼻下に八字鬚を生やしてゐる二年生の生徒があつたり、未成年禁煙法があつても此の學校の校庭では、まだ子供供した生徒の口から盛に紫煙が流れたりしてゐた。

學校卒業後實社會に出た時、煙草も喫へず酒も飲めないやうでは商業界の大立物には成り得ない。大きな商賣は大抵宴會の席上で出来るものだといふ思想が全校を風靡してゐた。彼はそんな空氣の中

で寂しい氣持で其の日其の日を送つてゐたが、好きな散歩と遠足とがいつしか八幡町を彼の愛する町にしてしまつた。

彼がまだ尋常小學に通つてゐる頃であつた。或日のこと學校で仲よくしてゐる友達五六人と散歩に出たまま晝食にも夕食にも歸つて來なかつた。町内の心當りを片つばしから尋ねたがどこにもゐない。親類たちがみんな心配してゐると、午後九時すぎに彼は一隊を率ゐて歸つて來た。みんな空腹で半死の状態であつた。聞いてみると彼等は四里の山路を越えて有馬温泉まで遠足を試みたのである。みんなの所持金を合せると平均十錢づつになるので、その半分五錢で温泉に入浴し、残りの五錢で燒詣を買つて食べただけで、空腹のまま歸途に就いたが、山の中で途に迷ひ眞暗闇の山路を這ひながらやつとの事で兵庫の町に歸つて來たのであつた。こんな小冒険は祖父母や母から誠められてもなかなか止められなかつたらしい。

彼はその散歩や遠足を無意味にしないで、山の名・瀧の名・宮の名寺の名など大人も驚くほど覚えてゐた。

八幡へ來た彼は早くも郊外に散歩したり近くの山に登つたりした。地圖の上では琵琶湖のすぐ近くにある筈の八幡町ではあるが、さて町のどこからも湖水は見えない。で、彼は町はづれにある八幡山に登つてみた。そして、此の山が八幡の町と琵琶湖とを絶縁してゐるのだと知つた。

彼は山の上から美しい湖水を見た。そこから瞰下した町内に、黄色な土塀に白線の入った本願寺別院の大寺院が二つもあることを知り、寺院が十八棟も散在してゐるのを見て、佛教の盛な土地であることを知った。

彼が此の町に来て一番不思議に思つたのは町家の大部分が夜通し戸締りをしないことであつた。生馬の眼を抜くやうな商人ばかりの町だと思つてゐた八幡町が、夜の戸締りをしないで安眠できるほど安逸な所であると知つた彼は、だんだん此の町が好きになるのを自覺した。

入學式がすんで二週間後の四月十四日に、彼は八幡神社の境内で行ふ火祭りを見て驚いた。農村の若い氏子達が紺の筒袖・脚絆・手甲姿で、藁と藁とで造つた高さ數十尺もある大圓柱状のたいまつを擔ぎ、直徑八尺もある大太鼓を重砲兵の大砲を音楽に使つたやうな大音響で打鳴らしながら過ぎ行く行列を見た彼は、人生觀が變つたやうに思つた。程なく若者達は杜のそばに大圓柱數十本を立てて、一時に火をつけた。今まで三味線や明笛のやさしい音色を耳にし、線香花火の閃きを美しいと見てゐた彼に取つて、此の火祭りは實に意外なものであつた。彼は此の火祭りによつて、近江商人の太い神經がわかるやうに思つた。

夏期休暇を兵庫で過した彼は、秋の初に八幡町に戻つて来て、暇があれば近郊を散歩したり彦根から安土まで歩きまはつた。

秋が去つて冬になると、彼は始めて雪の近江の美しさを知つた。比良の暮雪に薄桃色の日光が輝いてゐる景色、蒼空の下に純白な雪の冠を戴いて立つ伊吹山、静寂そのもののやうな風無き日の琵琶湖。そんな美しい景色を見るたびに自分が近江の地に来てゐることを此上もない幸福だと思ふこともあつた。

冬が過ぎて明治三十七年の春が来た。十五歳の彼が商業學校二年生になる年である。その年の二月八日に日露兩國の國交は斷絶した。其の日海軍少將瓜生外吉の率ゐる分遣艦隊は我が陸兵を仁川港に無事上陸せしめ、同港外に碇泊中の敵艦コレーツ、ワリヤークの二艦は撃沈された。翌九日海軍中將東郷平八郎の率ゐる主力艦隊は旅順港を奇襲した。町内には戸毎に日章旗が翻り、捷報のある毎に萬歳の聲が街衢に充ちた。

三月十五日はまだ残んの雪がちらほら見えてゐた。その日八幡名物の大仕掛の左義長が八幡神社の馬場で行はれると聞いた彼は、試験勉強の最中ではあつたが、二三の友人と一緒にそれを見に行つた。行つて見ると、兵庫あたりで行はれる、どんど、といふ左義長とは似ても似つかぬもので、これは竹の骨組に藁と藁とをあしらつて造つた大きな山車である。それが三十臺も町の彼方此方から繰出して来る。若い衆が二三十人づつ一團になつて、女の長襦袢を着、顔に白粉をつけ、編笠を被つて拍子木をたたきながら踊つてゐる。まるで亂舞の町である。

山車は最後に八幡神社の境内に集つて火をかけて焼かれる。その火焰が天を焦す下で、若い衆は熱狂的に踊る。彼はここでも近江商人の異なつた魂を見たやうに思つた。

此の壯快な左義長を見てから程なく彼は二年生になつたのである。

新學期が初まつて間もなく旅順港外で敵の旗艦ベトロバヴロスクは轟沈して司令長官マカロフ中將は戦死した。これが爲に敵艦は深く港内に逃れて出て來なかつた。そこで我が海軍の旅順港口閉塞の企畫が行はれた。毎日の新聞に注視を怠らなかつた彼は、閉塞隊の活動と軍神廣瀬中佐の戦死の状況も、陸の第一軍が黒木大將であり、第二軍が奥大將であり、第三軍が乃木大將である事も知つてゐた。

皇紀二千五百六十五年の明治三十八年一月一日、彼が十六歳の春を迎へたその日の夜、旅順要塞の守將ステツセルは、乃木大將に對つて降伏開城の申入をしたのであつた。それから滿一ヶ月の後、二月二日に當時の井上悦藏、後の吉田悦藏の一身に取つて、異常な影響を與ふる一事件が起つたのである。事件とは何であつたか。それは後の東京帝國大學・京都帝國大學講師一柳米來留（かきま）、當時のウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories）が悦藏の學んでゐる滋賀縣立商業學校の英語教師として赴任したことである。

メレル・ヴォーリズの祖父はミゾリイ州大審院の判事であつたが、父は實業學校を出て田園生活をしたり、裁判所の書記官になつたり銀行員になつたりしてゐたが、宗教に熱心で青年時代には日曜學

校書記として奉仕をなし、中年以後は長老に選ばれたりなどした。

メレルは父の遺傳以外に、幼少の時から音楽が好きであり繪が上手であつた。非常に記憶力が強く時時兩親を驚かした。四歳の時兩親に伴れられて教會に行つたが、牧師の説教は何の事やらさつぱりわからなかつたが、毎日曜毎に見詰める正面の教壇の壁に、*The Lord is in His holy temple* といふ書いてある聖書の文句を、その讀方と共に文字の形まですつかり覚えてしまつたのであつた。その頃から彼はもう動物や植物の寫生をはじめ、十四五歳の頃はもう立派な油繪を描いた。小學校を卒業してハイスクールに入つた頃から教會の日曜學校で教鞭を執つたが、夏期休業には菓子屋の賣子になつたり自轉車屋の丁稚になつたりして働いた。大學へ入つた時は未來の大建築家を夢みて工學部の建築科に籍を置いた。一年生の時は學資を十分に送つてくれたので一人の苦學生を助けて二人で共同生活をして自炊してゐたが、一年生になつた時、家から十分の學資が送られなくなつたので、學校の附屬禮拜堂のオルガン演奏を引き受けたり、食堂の給仕人になつたり、家庭教師をしたりしながら勉強を續けてゐるうちに、トロント市で學生大會があつて全國から二千五百の代員が集つた。メレルも其の一人となつて出席したが、當時學生間に人望の高かつた、ジョン・アール・モットの講演をきいた彼は非常に感激した。その時モットは學生達に對つて、君達は眞劍なる信仰をもつて、先づ其の周圍を潔めよ、而して神の前に恥ぢざる純潔なる團體を作れと激烈なる奨勵を與へたのであつた。

この奨励、感激したメレルは學校に歸ると直ぐに學籍を文科に轉じた。そして先づ手近から實行に着手しようと決心した。

メレルに一人の大學時代の友達があつた。名をハアバート・アンドルウス (Herbert Andrews) と、言つた。學問はよく出来るが無神論者である。一切の宗教を否定して科學萬能論を唱へる。會合のあるたびに無神論の議論をして友人たちをてこずらせる。

メレルは思つた。此の男を有神論者に轉向させてみよう。それが出来ないやうでは、どんな理想をゑがいてみた所で空想に終る。

そこでメレルは此のアンドルウスを感化すべく特に親しく交際しはじめた。アンドルウスは單なる氣紛れから無神論を唱へるのでない。その因つて来る所は可なり深かつた。随つて此の男を説き伏せるには、此の男の讀んだ書物をこちらも讀まなければならぬ。此の男の體驗以上の宗教的體驗を経なければならぬ。

メレルは此のアンドルウスのために、絶えず祈りながら交際した。その交際中議論もした、激論もした。けれども人が人を感化するには、これを愛するといふ心情が根本でなければ、智識も學問も辯論も何の役に立たないといふことを彼は痛感したので、爾來一切の議論を避けて唯アンドルウスを愛しながら靜に導いたのであつた。さうして彼が大學を卒業する日まで三年間の祈の交際は遂にアンド

ルウスを無神論から有神論に轉向せしめた。

そこへ基督教青年會本部から、東洋の日本國から英語の教師を傭ひたいと申込んで來たが、行つてみないかとの相談を受けた。メレルは一言の下に行きたいと言つた。幼少の時から弱體であつたメレルの健康を氣遣ふ兩親には難色が見えた。それも其の筈で、まだ二歳の時に腸結核といふ恐ろしい宣告を受けてから、半時間毎に肝油をのませて、やつと生命拾ひをしたと思ふと、また大病に罹つて七歳までは生きられないと醫者から宣告されたのを、とうとう十四歳まで生き延びさせて、そこでまた死の難關をくぐり、二十一歳の時にも棺桶へ片足踏み込みかけたほど病氣と仲好しのメレルである。兩親が心配するのも無理はない。けれどもメレルはそれを説きふせて早速出發の用意をしてしまつたのである。

大學を卒業したばかりの當年滿二十四歳の血氣熾んな文學士である。日本人全體がアンドルウスの思想であつても、愛の心をもつて親しく交つて行かうと決心した彼の心には熾烈な希望の火が燃えてゐた。

時は皇紀二千五百六十五年一月二十九日の夕方、青年メレルは乗船チャイナ號の上から微薔色の空を背にして立つ富士の雄姿を見て美の極致だと思つた。そして、その夜彼は横濱港に憧れの日本の土地を初めて踏んだのである。

その夜は教會關係の宣教師の家に泊めてもらひ、三十日の朝九時十五分發の汽車で日本の首府東京に行き、新橋驛から人力車に乗つて神田美土代町の基督教青年會に落着いたのである。

青年會館には以前近江八幡の商業學校で英語を教へてゐたルウトがゐて、翌三十一日には東京市内を、あちこちと見學させてくれた。その時ルウトの忠告で銀座教文館の隣にあつた新川といふ洋服屋へ行つて、フロックコウト一着を注文した。その代價は四十圓であつた。つい近頃まで學生服ばかり着てゐた自分が、いつのまにかフロックコウトを着る身になつたのかと思ふと苦笑せざるを得なかつた。

それから翌一日は前日に見残した市内見物をしたり、米國大使館に行つたり、九段の靖國神社にまゐつたり、その境内にある戦争博物館（遊就館）を見たりして、午後十時に彼はルウトに見送られて新橋驛から一路八幡に向つたのである。

大學で工學をも學んだ彼は日本の汽車が狭軌式であることと、左側通行であることに、先づ氣がついた。二月一日といふ冬の最中^{なか}でも此の汽車には暖房設備がない。天井から石油ランプがぶら下つてゐる。彼は好奇の瞳を輝かしながら室の内外を注視した。車内のほとんど總ての男は煙草を喫つてゐる。日本服と洋服とが半半である。女の或者は大きな乳房を出して人前で平氣で赤ん坊に乳を飲ませてる。或女は布片か大きな蒲團のやうな上衣に赤ん坊を包んで、母と子が一本の細帯で一つに括り

合せられてゐる、髪を正確な形に結んだ特異な女がゐる。油で堅めて、結んだり丸めたり、ピンで挿んだりしてゐる。後頭部に船の舵のやうなものが突出してゐたり、上部に不思議な髷が載つてゐたりする様は何と見ても奇怪な建築である。こんな特異な髪をもつ女は總て他人の批評など眼中にないやうな恰好で坐つてゐる。

夜が明けた時最初に目についたのは、鐵板の上で焼いた菓子のワツフルに似た田と畑とであつた。遠くに見える山山は美しく雪を戴いてゐる。到る所に見たことの無い木が茂つてゐる。それが竹藪であらうとは、竹の無い國で生れた彼に知られよう筈はない。ましてや其の竹の子供が旨しい食料品だなどとは夢にも知らないのであつた。

少し繁つた森があると思へば必ず鳥居がある。富士山と鳥居とを日本の象徴だと思つてゐた彼は、その鳥居を見るたびに微笑せずにはゐられなかつた。鳥居のない神社それが佛教の寺院であると彼は早くも觀察したのであつた。

車内で朝の辨當を買つたが箸が使へないので匙を使つて食べた。晝飯も同じく匙で食べたが誰も笑ひはしなかつた。

三時ごろ目的地の近江八幡に着いた。僅な旅客が降り降りした。その下車客の中に、濃紺色・格子縞の外套を着て山高帽をかむり、肩から斜に寫眞器を掛けた美青年の西洋人がたつた一人ゐた。汽車

を降りるには降りたが、さつぱり方角がわからない。おまけに其の日は北風の吹くいやな日であつた。太陽は比良の山頂に雲がくれをしてゐる。どんよりした空である。そこへ安土と奥島半島との間から間断なく吹きつけて来る風は特別に冷たい。琵琶湖といふ風光絶佳な湖水の傍にある町だと聞かされてゐたが、どちら向いても湖水らしいものは見當らない。おまけに町らしいものも、そこらあたりに見つからない。誰に何を聞かうにも五日前に日本へ来て、やつとオハヨ、サヨナラの二つしか日本語は覚えてゐない。

そこへ一人の紳士が来て英語で挨拶をしてくれた。それは自分が赴任する商業学校の英語主任教諭の雨田仲左衛門であつた。

その時の商業学校の外人英語教師はウオウルドといふ人で、四月までの契約であつたが、メレルが来た爲に二ヶ月早く切り上げて八幡を去ることになり、今までの住宅をメレルの住宅に引きついでくれた。

家は八幡町の魚屋町にあつた。十二疊・四疊・六疊・四疊半二室に、中二階が八疊・七疊半で、料理番の室が八疊・四疊半で、その外に臺所があり風呂場があつて、家賃は三圓であつた。

隣家は明治維新の際長藩の伊藤俊介等と共に國事に奔走した勤皇家西川吉輔の學問所跡であり、メレルの入つた家はその住宅だつたので、當時勤皇家をかくまつてゐるといふ疑で、彦根藩士數十人に

拔身の槍と白刃で踏み込まれ、散散暴れ廻られた家である。メレルは其の槍や刀の痕の残つてゐる十二疊の室を書齋兼食堂・寢室・應接室にして、古い寢臺・机・椅子・緞通・ランプ・燧爐・バケツなどの家財を金六十圓で買ひ取つたので、東京へフロックコウト代四十圓を送金する餘裕がなくなつたのである。けれども料理人の月給十四圓は月末までには非渡してやらなければならぬ。などと考へながら寝てゐると、夜中にどすんといふ物凄い音がして寢臺がひどく揺れた。生れて始めて地震といふものの恐ろしさを身に感じたのであつた。

翌三日の朝から料理人を相手に室を片づけたり掃除をしたりしてゐる所へ、商業学校の助教諭である宮本文次郎が訪ねて来た。年は若いが昨日停車場まで迎へに来てくれた英語の主任教諭よりもずつと英語が上手である。

メレルは非常に喜んで宮本文次郎を迎へた。文次郎は和歌山の人で少年の頃大阪の書籍店で丁稚奉公をしてゐたが、近江八幡の商業学校が有名なので、そこを卒業して一廉の商賣人にならうといふ野心を起して入學したのであつたが、勉強中外人教師アボットの感化を受けてキリスト教信者となつて町内の組合教會に屬してゐたのである。校内の教師・生徒中の唯一人のキリスト信者で机上には聖書・内村鑑三著求安録・同人著基督信徒のなぐさめ・木下尚江著火の柱・其の他聖書の研究・組合教會の機關誌などが載せられてゐる程の新人ではあつたが、非常な勤勉家だつたので、四年の課程を了

へると同時に助教諭として採用されたのである。

文次郎が訪問したのは午後四時すぎであつたが、一時間ばかりも會話して別れたあとで、夕食後メレルは緞通の上に跪き椅子に凭れて祈つた。遠き故郷の両親や一人の弟の安全を繰返し繰返し祈つてゐるうちに、いつの間にかそのまま眠つてしまつたと見え、眼を覺してみるともう四日の朝の太陽が東の窓を赤赤と照してゐるのであつた。

二月四日、その日は土曜であつた。商業學校では今度新しく赴任して來た英語教師が、少年とも青年ともわからない若者であることや、身の丈が日本人とあまり違はない小柄であることなどを口口に話し合つて、その若い教師の教場に現はれるのを待つてゐた。

悦藏は二年生であつた。早く英語の時間になればよいがと思つてゐるうちに、二時間目の英語の時間になつた。

二年甲組と書いた札の掛つてゐる教室の外に靴音が響いて、若い教師のメレルは校長と教頭とに案内されて室内に入つて來た。そして教頭の紹介で教壇に立つたメレルを見ると、純白なカラア・派手なネクタイ・身に適つた背廣服の美青年で、温顔に微笑を湛へてゐた。

皆さん私は諸君を教へることを無上の光榮とする。英語の研究は發音が第一、會話が第二、讀書が第三、文典が第四である。殊に商業學校の生徒は、正しい發音で自由に會話することを怠つてはな

らない。私はその發音と會話とを遠い所からわざわざ諸君に教へるために海を渡つて來たのである。

メレルは一語一語句切りながら話したあとで、其の話に用ひた單語を黒板に書いて生徒に讀ませた。その時彼ははじめて日本人の名を呼ぶのであつた。發音第一主義の彼は出席簿に書いてあるロウマ字綴りの名前の發音がさつぱりわからない。高橋をテケヘシ、塚本をツケマト、吉田をヨシヤイダなどと呼んだ。げに發音は大切であると悦藏は苦笑した。

授業が終つた時、メレルは白墨の小箱に容れながら、私はさみしい・放課後・みなさんは・私の宅に・遊びに來て下さい。と、言つて靜に教場を出た。生徒たちは嚴めしい教師を迎へたのではなく、やさしい友達を迎へたやうだ、などと話し合つた。

この I am lonely. Can you see me after school. の一語が、メレルの一生を司る強い言葉となつたのである。

さみしいから遊びに來てくれといふ一語に引かされて、その日の午後五時すぎに悦藏ら四人の生徒が魚屋町のメレルの家を訪問した其の發頭人が悦藏だつたのである。その時メレルは食事中であつたが、喜んでその四人を迎へ入れた。しばらくして助教諭の宮本文次郎は七人の生徒をつれて入つて來た。そして十二人の生徒たちはメレルを中心に面白く遊んだ。遊んでゐるうちに、メレルは日本の學

生が無邪氣なうちに俊敏な或物を持つてゐることを直観して、すっかり日本人が好きになつた。動もすれば懷郷病に罹りかけてゐたメレルの憂鬱はすっかり消えてしまつたのであつた。

翌五日は日曜である。メレルが日本の地に上陸して最初の安息日をどうして暮さうかと思つてゐる所へ宮本文次郎が入つて来て、小幡町に小いキリスト教會のあることを告げたので一緒につれて行つてもらつた。その教會には深尾といふ婦人傳道師がゐるだけで専任の傳道師も牧師もゐなかつた。

二人が入つて行つたのは十時前であつたが、來會者は四五名しか居なかつた。文次郎はその人たちにメレルを紹介し、來會者を一人一人メレルに紹介した。

十時十分ごろになると、深尾傳道婦はメレルに對つて、もう時間が來ましたから、どうぞお説教を願ひますと言つた。西洋人と見れば悉く宣教師だと思つてゐる此の傳道婦の一言にメレルはびつくりした。大學を出たばかりの一青年である。しかも天涯の孤客である彼が、上陸後滿五日目に日本の土地で説教をするなどとは思ひも寄らぬことであつた。彼は文學士である。文學士の稱號を得てから更に三年間神學校に入つて神學士の稱號をとり、その上教師試験を経て按手禮といふ儀式を受けなければ説教は出來ないのだといふ常識をもつてゐる彼には、高知藩士の娘である深尾りくといふ傳道婦の言葉が信じられなかつたのである。だから辭退してみたが、傳道婦ばかりか信者たちもみな是非説教してほしいと言つた。切羽つまつた彼は説教の言葉が與へられるやう頭を垂れて祈つてゐるうちに、偶

と思ひ出したのは、横濱へ上陸する前日、船の中できいた牧師の説教であつた。それは日本三景の中に天の橋立といふ所がある。それは大昔に神様が天へ登るための橋として造つたのであるが、工事半にして中止され今にそのままになつてゐる。將來の日本人は此の橋を天まで架け渡すだけの努力をしなければならぬといふ意味であつた。

それを想ひ出したメレルは、宮本文次郎の通譯で天の橋立の話と靈峯富士の話をして説教に代へたが會衆の感激は非常なものであつた。

説教のあとで小さい歓迎會が同かれて共に祈つた。その時千貫久次郎夫妻、藤居俊藏夫妻の名を知つていろいろの物語をした。言葉が通じないので一一通譯つきではあつたが、心と心とは少しの隔てもなく相通じた。彼は魚屋町の家に戻るとすぐ兩親に宛てた手紙を書いて、日本人が自分を愛してくれた親切さを精しく知らせた。

その日の午後六人の學生が訪ねて來たのでこれで通計十八人の訪問者だと彼は日記帳に書きしるした。

六日の月曜はメレルが教壇に立つ二日目である。授業が終つてから生徒たちに誘はれて八幡神社前の廣場に行つてテニスをしたが、みんなに別れる時、自宅で聖書の研究會をする豫告をして置くと、七日（火曜）の夜、十五人の生徒たちが訪ねて來たので、その夜は面白く遊んだ。すると、翌日八日

には四十五名集つて来たが、その日メルは聖書研究に就いての注意を語り、研究会の組織を作らしめ、會長、副會長及書記を互選させた。そして、四五年生が一组、三年以下が一组になり、その次の週から、上の組は毎水曜日、下の組は毎火曜日文次郎の通譯で馬太傳五章から講義が始められた。

此の時メルは始めて簡単に襖を外して俄に室を廣くするといふ日本の昔の建築家の智慧を感じしたのであつた。

それから、毎晩いろいろな生徒がつきからつきへと遊びに来るやうになつた。その度毎にメルは聖書研究会に出席するやうに勧めた。十日の夕、彦根中學の授業が終つてから、初めて京都へ行つて、名高い新島襄の居宅を訪ねた。故郷に居る時、日本に就いて知つてゐたのは、同志社といふ學校の名と、新島襄といふ名前だけであつたメルは、此の日、日本の古都京都に行つていろいろな珍しいものを見、珍しい事を聞いたのであつた。

十二日の聖日は同志社で午前は禮拜に出席し、午後は學生の祈禱會に出席して、請はれるままに一教師の通譯にて一場の感話を述べた。

十三日の月曜に集つて来た生徒の數は、土曜に集つた學生の二倍に達した。そこで十四日の火曜の夜、聖書研究のあとで、未だ組織の出来てゐなかつた下級生三十五名から、委員三人を選擧することにした。その時下級組の書記に選ばれた少年の一人が井上悦藏であることをメルは確實に記憶した。



何といつても外國人である。一番覺えにくいのは人の姓名であつた。だからメルは、井上悦藏と呼ぶかほりにベビイサンと呼んだ。それはここに集つて来る生徒たちの中で、彼が一番年少者であつたからである。

十六日は木曜日でメルが膳所中學へ始めて英語を教へに行く日であつた。何の用意もなしに出かけてみると、授業のすんだあとで聖書の研究をしてほしいと申し出た學生が三十三人あつた。

十七日の金曜に彦根中學へ始めて行つた。メルは教ふる所は八幡の商業學校と膳所中學と彦根中學との三箇所であつた。彦根中學でも學校の職員達から時間外に聖書研究会を開いてくれと頼まれたので承諾した。

十九日といふ三回目の安息日が巡つて来た。前の安息日は京都で過したが、今日はまた小幡町の見すばらしい教會へ行くのである。朝から待つてゐた宮本文次郎の顔が見えないので、一人で行つてみると、五人の生徒が来て坐つてゐた。その中の一人がベビイサンの井上悦藏であつた。

深尾傳道婦は前の日曜と同じやうに、時間が来ましたからお説教を願ひますとメルに言つた。まさかと思つてゐたのであつたが、無牧の教會であるといふ氣の毒さから、勇氣を出して説教する決心はしたが、通譯してくれる宮本文次郎が来てゐない。そこで其の場に來てゐる生徒の小山吉三郎に通譯を頼むと小山吉三郎はすぐ引受けて起ち上つた。その時彼はまだ商業學校の二年生だつたのであ

る。これを見た悦藏は舌を捲いて其の勇氣に感心したのであつた。これから悦藏と吉三郎の二人は日曜の朝は必ず誘ひ合せて教會へ行くやうになつたのである。

二十六日の日曜の朝、悦藏は小山吉三郎と二人で教會に行つてみると、十一人の學生が來てゐた。ところが今日はメレルの英語説教ではなく、彦根教會の牧師森山寅之助の説教であつた。森山牧師は熱心に青年の保つべきは純潔であることを説いた。聽いてゐた悦藏は何度も何度も涙を拭つた。物心づいてから十二の年まで酒といふものの爲に言ふに言はれぬ苦しさ悲しさを嘗めて來た彼である。此の世に酒といふものが無かつたならば、あの母の苦みもなくてすんだらう、父の生命も今尙ほ保たれてゐられるだらうに。と、思つたからである。けれども彼の家は先祖代代堅い佛教信者である。その祖先は親鸞上人の直弟子であり一箇寺の開山であり、今も宗家の主人は一箇寺を守つてゐるのである。彼はそんな關係を絶ち切つて基督信者となるには餘りに少年すぎた。

その日の午後彼は淡い憂愁に閉されながらメレルを訪ねると、小山吉三郎が來合せてゐて、一緒に八幡山へ登ることになつた。

山の上から見た琵琶湖は實に美しかつた。悦藏と小山吉三郎は此の八幡山が鶴翼山といふ名であるが、五里も離れた所から瞰下さなければ鶴の形に見えないことや、昔豊臣秀吉といふ英雄があつて、その養子の秀次がここに城を築いたといふ傳説のあることなど、こもこもに説明した。メレルはその

話を非常に面白がつて、日本にゐる以上日本の歴史を知らなければその人情もわからないから、これから日本語と共に日本の文字をも習ひたいと言つて、其の翌晩から早速片假字を習ひはじめたのである。後には堂堂たる風韻のある大文字の掛軸や額面を書くやうになつたメレルが、始めてアイウエオを書き習つたのは、實に明治三十八年二月二十七日であつた。

この時我が滿洲軍は陸軍大將川村景明の率ゐる鴨綠江軍を最右翼に、旅順包圍の偉勳建をた乃木大將の第三軍を最左翼として敵の大軍と奉天附近に會戦し、彼我百萬の大軍が戦線五十里の間に展開して激戦に激戦を重ねつた。學校の校庭でも魚尾町の聖書研究會でも寄ると觸ると戦争の話に花を咲かせた。メレルも日本軍の強いのに感心しながらその話を聞いた。

その頃若き助教諭宮本文次郎は非常な人氣であつた。先に商業學校で教鞭を執つてゐたルウトから彼に上京を勧告して來た。それは東京に來て更に高等商業學校に入學すれば、その學資は自分で負擔するといふのであつた。

熱心なキリスト信者である宮本文次郎は、これまで學生たちの爲に祈り通して來たのであつた。多くの教へ子が酒の爲に性慾のために身を惡魔の誘惑に委ねつつあるのを悲んで、何とかしてこれを救はうと願つてゐたのであつたが、衆寡敵せず、力の及ばないのを嘆いてゐたのである。そこへメレルが來てから俄に聖書研究會が盛大になり、今は二百五十人の生徒中百十一名が参加するやうになり、

全生徒の四十パーセント以上が、純潔を慕ふやうになつた有様を見た彼は、斷然ルウトの好意を辭してこのまま近江八幡に踏みとどまる決心をしたばかりか、メレルが八幡町に来てから滿一箇月後の三月二日に、彼は手荷物や夜具全部を手車に載せて魚屋町のメレルの家に移つたのである。この事はメレルが宮本文次郎を自分の家に引きつけたのであると共に、メレルを日本に永住せしめる動機ともなつたのである。

三月七日の夜であつた。百十一名の聖書研究生が魚屋町の家一杯になつて集つてゐると、メレルは今日大阪から到着したのだといふ大きな日の丸の國旗を壁に掛けて言つた。この國旗の周圍の純白は純真であり中央の眞紅は世界を照す光明である。凡そ全世界いづこに斯る高潔な國旗があらうか。ギリシャ人もロウマ人もみな自國の國旗を穢して衰亡した。諸君は此の高潔な國旗を穢してはならない。悉く純潔な士となつてこれを護れ。聖書研究の終局の目的はそこにあるのだ。

メレルの聲は顫へてゐた。通譯した宮本文次郎の眼にも涙が光つてゐた。

三月九日からメレルは教へてゐる三學校の試験答案の採點をはじめ、悦藏と小山吉三郎を助手に頼んだ。

三月十二日は日曜であつた。メレルはいつものやうに小幡町の教會で宮本文次郎の通譯で説教した。そして午後は、悦藏・小山吉三郎・宮本文次郎の三人をつれて安土に散歩した。織田信長の築いた天主閣の話、當時の神學校の話など詳しく宮本文次郎から聞いて、その址をがつしり踏みしめながら歩いてみたのであつた。

その晩また強い地震を感じた。けれども翌日悦藏が来て、昨夜の震動は地震ではなく此の近くに隕石があつたのだと言つた。

三月十六日から春休みになつたので、その日メレルは悦藏をつれて京都に行き、秀吉の墓を見た。鶴翼山の上で聞いた秀次の話の思ひ合せて、果敢なき英雄の夢を偲んだ。

三月十九日に悦藏はメレルを誘うて長命寺に散歩したが、歸つてみると、膳所中學校の生徒山本一清が訪ねて来てゐた。これが悦藏と後の理學博士山本一清との初對面の日である。

三月二十二日の朝、悦藏の所へメレルから使が来た。小山吉三郎を誘つてすぐ来てくれと言ふのである。四五日前に小山吉三郎がメレルに同居を申しこむと、悦藏と二人で一緒に來いと言つたので、多分その一件であらうと思ひながら行つてみると、メレルは十二圓五十錢で作らせたといふ新しい階段を見せた。悦藏は小山吉三郎と二人でその階段を登つて二階へ行つてみると、そこは中二階で、街道に面した所へ硝子戸二枚をはめて光線を十分に取入れてあつた。

やがてメレルは西洋皿に姫糊を一杯盛つて、大きな刷毛を二つ添へて持つて來た。そして昨晚始めて箸を使つて食事をした話をしながら、壁を貼りはじめた。悦藏も小山吉三郎も手傳つた。そして、

そこが悦藏と小山吉三郎との宿舍にあてられる事になつたのである。二階とは言ふものの此の地方でいふツシであり北越で言ふ所のアマである。

三月廿四日は膳所中學校の卒業式だつたので、メレルと悦藏は一緒に八幡驛に行つた。メレルは膳所中學校へ、悦藏は兵庫の家に歸るのである。その頃悦藏の母りうは兵庫の魚油再製工場の留守番をしながら、まつ子と二人で寂しく暮してゐたのである。

汽車の中でメレルに別れた悦藏は兵庫の宅に歸つて久しぶりに南總里見八犬傳を手にして讀み耽つた。そして犬塚信乃と犬飼現八が芳流閣の屋根で組討するあたりを夢中になつて讀んでゐる所へ、電報が配達された。披いてみるとメレルから、一緒に安藝の宮島を見物したいから、すぐ商船大井川丸に乗れと書いてあつた。

行きたくて行きたくてたまらないので、母に相談すると、兄さんに相談してみよと言ふ。兄さんとは叔父金之介のことである。で、金之介に相談すると、奉加帳を作つて廻せといふので、早速半紙を綴ぢて宮島旅行の爲の奉加帳を廻すと、祖父・祖母・叔父・叔母・母から二圓三圓づつ記入してくれたので、早速商船大井川丸の一等切符を買つて乗りこみ、翌日の午後宇品港に着いたのである。

時は恰も奉天の大會戦に我軍は大捷利を得、敵の死傷十四萬、捕虜四萬と報ぜられた直後であり、宇品の港内には軍用船がぎつちり碇泊してゐ、多種多様の船が右往左往してゐる有様が、あまりに珍

しいので二人は海岸の石垣の上を、どこまでといふあてどもなく歩いてゐると、背後から止れ……といふ大きな聲が聞えて來た。驚いて振り返ると、そこには兵士が銃剣を擬してこちらを睨んでゐる。氣づいてみると、すぐ前に陸軍省倉庫があり、二人はその構内に來てゐるのであつた。

ここを何所だと思ふか。司令部までつれて行くから眞直ぐ歩け。逃走を企てたなら銃殺だぞ。といふ思ひがけない聲が続いて響いて來た。メレルには言葉の意味はわからないが、來るべからざる所へ來たのだといふことはわかつたらしく、おとなしく悦藏の後に歩いて歩いた。そして詰所につれて行かれて、若い中尉の訊問を受ける事になつた。

悦藏はたつた今兵庫から此の宇品に來たこと。あまり海岸の景色が賑かなので、見物しながら歩いてゐるうちに、知らず知らず倉庫の構内へ入つたことなど、恐縮しながら陳述すると、中尉はメレルに訊問をはじめた。しかしメレルは日本語に啞である。やつと商業學校二年生の試験を終つたばかりの悦藏が、その通譯をしなければならぬ。

三十分間ほど調べられたがメレルは幸にもまだどこでも寫眞を撮つてゐなかつたので、そのままではすんだが、それでも一人の曹長から、眞直ぐに歩くのだ。目標は向ふに見える門の上だ。歩くうちに若しも左右を見たなら銃殺だぞ。と、言はれた時、悦藏は身の毛の彌立つを覺えたのであつた。それ以來メレルは啞の一人旅行を慎んで、どこへ行つても悦藏か宮本文次郎か小山吉三郎かを伴れて

行くことにした。

新學期が始まった。悦藏は十六歳で三年生になつたのである。その四月の八日に悦藏と小山吉三郎とは、下宿にあつた荷物を引纏めて魚屋町のメレルの所に移轉した。その居室は屋根裏の俗にいふ「つし」で先月末に二人で壁紙を貼りつけた所である。やつと三年生になつたばかりではあるが、小山は象といふ綽名を以つて呼ばれる程の大男で體量十九貫、機械體操の時金棒が彎曲するので有名な男、悦藏は竹棹のやうに細長い少年である。此の不思議な對照の二人が、これからずつと起臥を共にしようとする室は、いつも屋根裏と柱とに注意しなければ頭に瘡の出来る所であつた。

二人が轉宅した夜から、家庭禮拜が始まつたので、悦藏も其の一員とはなつたが、まだ祈りといふ事 of 精神がわからなかつた。

或日のことメレルは悦藏ら三人と茶を飲みながら、膳所中學校の卒業式に行くと、穂積といふ生徒が、江田島の海軍兵學校に入學を許可せられたから近日出發する。自分が軍艦の艦長になつたならば非艦内へ訪ねて来てくれと眞面目に言つたとか、三月廿五日に彦根中學の卒業式に行くと一場の演説を頼まれたので二年生の小山吉三郎に通譯させたところ、あまりによく出来るので、彦根中學校の教諭たちが驚いたとか、四月一日に彦根で伊井掃部守の祭禮があるといふのでわざわざ行つてみたが、折柄の大雨で祭禮が見られなかつたのを四月馬鹿ではなかつたかと眞面目に思つたとか、四月三日に

初めて外國郵便が着いて二箇月分の新聞が配達されたので、料理人が二度までお茶を沸かし直して持つて來たのも知らないで讀み耽つたとか、四月四日に京都で村井といふ生徒の宅で始めて茶の湯の饗應を受けたとか、四月五日・六日・七日の三日、大阪神戸を見物して、大阪で五錢の巡航船に乗つたとか、そんな話を、さも面白可笑しく話したのであつた。宇品で銃殺の百歩ほど手前を歩いてゐたメレルとしては暢氣な話であつた。

四月十日にメレルの註文してあつたペイオルガンが到着した。パイオルガンは言ふまでもなく、ピアノさへ其の姿すら見ることに出来ない此の町で、ペイオルガンを手に入れたメレルの喜びは一通りでなかつた。

メレルの兩手の指は素晴らしく自由にオルガンの上を這うた。悦藏はじめ他の面々はそれを不思議に思つた。何故ならば彼等はまだ複音の音楽を知らなかつたからである。

此の日の晩方商業學校の新入生三十五人が聖書研究會員となることを申込んで來た。その時メレルの聖書研究會員は膳所中學校に四十九人、彦根中學校に九十九人、八幡に百六十人といふ有様で、總計三百人を超過してしまつた。

四月二十日は木曜であつた。メレルが膳所中學校へ英語を教へに行つて、授業がすんだあとで校庭に立つてゐる一人の、でつぶり太つた生徒を見つけて聖書研究會に入つてゐるか聞いてみると、入

つてゐないと言つたので、では、これから直ぐに入會するがよい。私がつれて行つて上げると言つて捉へるやうにして、教場へつれて行きながら名前をきくと、清水安三だと答へた。その時のメレルの通譯は後の理學博士山本一清で、當時は膳所中學校の三年生であつた、清水安三とメレルとの關係はこの時から始まつたのである。

四月二十四日に膳所中學校長は職員四人と共に魚屋町の聖書研究會に出席して、その盛會に驚いた。それは別に意味のある訪問ではなかつたが、五月一日に一人の佛教僧侶が商業學校に宮本文次郎を訪問して、學校教師でありながら宗教に關係することは不都合でないかと詰問した。これはやがて起らんとするキリスト教壓迫の第一歩だつたのである。けれども聖書研究會中の古長清丸は四月二十三日に八幡教會で洗禮を受け、六月四日の日曜に小山吉三郎がまた洗禮を受けた。小山吉三郎は四月一日にメレル等と共に彦根教會に行き森山牧師の宅に泊つた時、既に決心を告白して洗禮を受けることになつてゐたが、両親が承諾してくれなかつたので今まで延び延びになつてゐたのである。同室の小山吉三郎がキリスト教徒になつてしまつたので、悦藏の心も頻りに動いたが、母の事を思ふと決心が鈍る。その頃母のりうは神戸藤の寺の高僧望月有信に師事して熱心に念佛修業をしながら尼講の世話をしてゐるのであつた。けれども悦藏の心にはもう薪が積まれてゐた。彼は自分の親友たちが禁酒・禁煙を誓ひ、純潔な世界の現出に努力するのを見るたびに、十四歳の時から遊蕩の巷に足を向け

た亡き父の事を思ひ出す。毎日毎日酒に浸つてゐた父から、嗚鳴られ足蹴にせられ殴られ傷けられた母の事を思ひ出す。もしも父が今の自分の年に、禁酒・禁煙・禁慾の教を受けて居たならば、あの母の苦みも無くてすみ、父の生命も失はないで済んだであらうと思ふ時、如何なる反對があつてもよいから自分はこの團體に入つて一生純潔な生涯を送らうといふ決心がむらむらと湧く。

そこで悦藏は思ひ切つて母に手紙を書いてキリスト信者になりたいと言ひ遣つた。果して反對の意見を手紙で言つて來た。彼は折返して、お母あさんは佛教を一生懸命でやりなさい。私はキリスト教を一生懸命にやつてみます。そして五六年たつたあとで、ごたがひに話し合ひませう。と、いふ意味の手紙を書いて送ると、母からも折返し、それならば信仰してみてもよいといふ返事が來たので、彼はいよいよ、宮本文次郎、古長清丸、小山吉三郎のやうに、キリスト信者の旗を掲げて純潔運動に活躍することを強く決心したのであつた。

時に我が聯合艦隊司令長官東郷大將が敵の精銳バルチック艦隊三十八隻を對島東水道に邀へ討つて世界海戦史上空前の大勝利を博したので、全國民の血は戦捷に沸き返り煮えたぎつてゐる時であつた。悦藏は學校の内外で熱狂的に禁酒禁煙を説いた。友人の下宿屋に行つて膝詰談判をした。戦争に勝つても國民が酒色に溺れて健康を害しては戦勝國の名譽は保てない。先づ我等學生から身を純潔に保たうではないかといふ論法には、誰ひとり反對し得る者がなければかりか、煙管を折り猥本を焼く者

が續出した。悦藏は子供の時講談本を讀んで亂暴する父を取つて押へようとした其の意氣を轉じて、今日まで父が生きてゐてくれたならば、蹴られようと毆られようと斬られようと、必ず禁酒させてみせるといふ信念が血管の中を逆流してゐるのを覺えた。

明治三十八年七月六日の夜であつた。同宿の宮本文次郎や小山吉三郎等と夕の禮拜を守つた時、彼は大聲をあげて泣きながら祈つた。これは彼が生れて始めて聲を出して祈つた最初の祈だつたのである。かうして十六歳の秋の初から祈り初めた彼の祈は其の後三十七年の永き生涯にわたつて絶えなかつたのである。メレルも宮本文次郎も、小山吉三郎も、いつもみな涙ながらに彼と共に祈つたのであつた。

翌日メレルは彦根中學に行つて聖書研究會で、悦藏の近頃の活動について語つた。宮本文次郎の通譯であつたが、その話を聞いた學生の中から六人が起立して禁酒禁煙を誓ひ、その場で煙草容をやぶりパイプをたたき割つて、みんなで萬歳を三唱した。それは大日本帝國國民全體の純潔の爲であつた。その後間もなく長野縣の布引の寺院で全國に散在する外國人の英語教師が三十何人集つた時、受持生徒に聖書を教へてゐるかといふ質問が出た時、その多くは單なる英語研究のために教へてゐるといふ答が多かつた。しかも一組十人以上を教ふる教師はなかつた。然るにメレルは八幡・彦根・膳所の三校で三百二十二名に毎週聖書研究をしてゐる報告をすると、みんな信じられないやうな顔をしてゐ

た。その話をきいた悦藏らは手を拍つて喜んだものである。

七月十四日から悦藏・小山吉三郎らの三學年の夏休みが始まつた。みんな此の休暇中に墮落しないやう、飽まで純潔を守り通すやうにと祈つて別れた。悦藏は兵庫の家に戻つたが、八月六日にメレルから電報が來た。讀んでみると、八日の午後四時四十七分に御殿場へ着くやうに來いと書いてある。御殿場といへば富士の裾野であるから、多分一緒に富士登山をするのだらうと思つて、その用意をして出かけて行つたが、汽車に乗り後れて午後八時半にやつと御殿場に着いてみると、メレルは宿も取らないで四時間以上改札口のそばに立ちつくしてゐたのだといつた。一時間ほど前から大雨大風でお山は大荒であつた。

とにかく驛の右側にある富士ホテルといふのに入つた。宿料をきくと、宿泊料一人前八十五錢で、晝食は二十五錢である。けれどもメレルは西洋人だからその倍額一圓七十錢と五十錢申し受けるといつた。では西洋人には別の料理を出すのかと問ふと、それは同じ物だと答へた。その時メレルは言つた。同じ物を食べて同じ室に泊るのに、西洋人には二倍とるといふのは理窟に合はない。此の子供の宿料も私といつしよに一圓七十錢、晝飯も私といつしよに五十錢にして下さい。と、言つたので、主人は苦笑しながら、では日本人並でよろしいと言つて、二人を二階の一室に案内した。その時悦藏はメレルの圭角のない言葉に感心したのであつた。

翌日も雨はやまなかつた。山上で風雨のために死人があつたといふ噂を聞いた。

十日の朝四時半に眼を覺してみると、空は拭つたやうにからりと霽れてゐた。二人は六足の草鞋を用意して騎馬で出發した。二合目までの賃錢は一人七十錢であつた。朝の六時に宿を出て夕方の六時に石室まで着くと、ちやうど美しい夕陽が西の果に沈むところであつた。

二人は息詰るやうな思ひで黙つて夕焼雲の中に沈んで行く眞紅な太陽を眺めた。悦藏の心は神秘の帳を排して其の奥を覗いたやうな驚喜に震へた。

石室には頑丈な寢臺があり床には蔦蔦が敷いてあつた。ありつたけの物を身に纏うて眠つた二人が眼を醒した時は、一尺四方の一枚硝子の外から、仄かな明りが射し込んでゐた。仕度をして外に出ると石室の主人は、三年ぶりの好い天氣だと言つた。

立つて東の果を見つめてゐると、海面の浪の下から少しづつ茜色の光線が放射しはじめた。水天彷彿の間から、ちらちらと揺めくやうに、莊嚴無比の太陽が姿を見せた時、悦藏は始めて全能の神の姿をそこに見た。彼はその刹那萬難を排して純潔運動の爲に身を捧げる決心をしたのであつた。

陽の光が地上一面を照して、英傑の膝下に俯伏する群臣のやうに山山峯峯が、くつきりと隈を描きながら並んでゐる姿を眺めてゐた二人は左の方に向き直つて、淺間をさがしたが、その時はどうしても見附からなかつた。處が突然眞直に北の方を見ると、灰色の煙が地上から噴き出して來た。高く雲

に届いたと思ふ程の長い、しかも大きな煙の柱であつた。それは淺間山の爆發であつた。こんな所から淺間山の爆發の姿を見ようとは想像もしなかつた二人は、何といふ奇異な巡り合せだらうと言ひながら山を降つた。

中腹からしよぼしよぼ雨が降り出したが、宿に着いた時は、すっかり晴れてゐた。

翌十三日にメルルは輕井澤に、悦藏は神戸に西と東とに分れたが、輕井澤へ行つたメルルを迎へに來た一人の友人は、もう二日早く來れば淺間山の爆發が見られたものを。と、言つた。メルルは言下に、いや、それは特等席から見ると答へた。

八月の暑中休暇もすんで、九月一日に新學期が始まつた。悦藏は受難者ヨブの研究を初めて、暇さへあればヨブ記を読んでゐた。そして彼は絶えず友人たちに禁酒禁煙と純潔とを説いた。ために鈴木といふ學生は自己の過去を告白して一時間も泣いて泣いて泣き通して改心を誓つた。上級生の宮部も禁酒を彼に約束した。彼は寄宿舎に行つて猛烈に禁酒禁煙の演説をして、すっかり聲を哽らしてしまつた事すらある。蒼白いひよろひよろした彼の體内に、こんな熱烈さが蓄へられてゐようとは、今まで誰も知らなかつたのである。

皇紀二千五百五十五年の明治三十八年九月二十六日は火曜であつた。その日の夕刻から小幡町の教會で傳道説教會があるので、後の同志社大學總長牧野虎次が講師として招かれて來た。

いよいよ今夜は悦藏が洗禮を受けるのだといふので、メレルは非常に喜んで大橋五男・牧野虎次の二人を主賓として、みんな一緒に夕食をしたためた。それから教會に行つてみると會衆は七十人以上で、その半数は商業學校の生徒であつた。

やがて大橋五男が開會を宣言した。そして、説教の始まる前に洗禮式を行ふことを報告して、井上悦藏の名を呼んだ。聲につれて起ち上つた悦藏は制服を着てゐた。三十餘名の生徒たちは一齊に彼を見た。

牧野虎次は型の如く悦藏に洗禮を施した上、此の春秋に富める少年が一生を通じて自己の純潔を守ると同時に、社會の爲に國家の爲に粉骨碎身して努力するやうに。と、短い獎勵をした上、彼の爲に莊重なる言葉で祈つた。

感激と決意に満ちた悦藏の態度を見た生徒たちは大きな無言の説教を聞いたやうに感じた見え、その翌日校中の俊才と目せられる野崎貞次郎・藤谷光之助の兩人が聖書研究會に来て、純潔の決心を告白したのであつた。

十月一日に魚屋町組の手で滋賀縣立商業學校基督教青年會が組織され、四日に二十六名の同校生徒が各自に會員名簿に署名して堅く禁酒禁煙することを誓つた。それから二日の後十月六日に商業學校内で青年會の第一回講演會を開いて、京都基督教青年會主事吉崎彦一の講演があり、第三高等學校基

基督教青年會・同志社基督教青年會からも各代表者を派遣して祝意を表した。悦藏は主として此の會合の世話をした。來會者は五十人であつた。

その翌日の七日であつた。悦藏は魚屋町の家でメレルが精密な設計圖を引いてゐるのを見た。メレルが大學の半分を工科の建築科で過したことを知らなかつた悦藏は、何の圖ですかと驚きながら訊いた。するとメレルは大學生時代に、無神論を唱へて一家の者に心配をかけ、友人たちを手古摺らせたハアバート・アンドルウスを三年半かかつて改心させた話をした上、そのアンドルウスは死んだのだ。たつた今手紙が來た。アンドルウスのお母さんは、その手紙にかう書いてある。あの子が神を信するやうになり、教會のために盡力するやうになつたのは、三年半といふ永い月日を倦まず撓まず愛の心で導いて下さつたあなたのお蔭である。あの子が平和な心を懷いて天國へ行くことのできたのは全くあなたのお蔭である。これは僅かであるが、あなたが企ててゐる事業の爲に遣つて下さい。私此の送金をするので、あなたの若い友達二人、十五ドルづつ出し合つて、それを一緒に送つて下さいといつたので、合計五百三十ドル送りますから遠慮なくお受取下さい。と、言つて來た話をした。

メレルは、ぼつりぼつりと言葉をきりながら言つたので、悦藏にもその意味がよくわかつた。

不思議にも昨日青年會の第一回講演會を開いた今日である。自分は此の金を土臺にして自分の貯金

で青年會館を建てようと思つて、今その設計圖を引いてゐる所だ。と、メレルは言つた。それからメレルは、凡ての事われに益ありといふ句を引いて、自分が大學の半分を工科の教室で過した事が、今役に立つ時が來たのだといつたので、悅藏は初めて文學士のメレルが半分の工學士であることを知つたのである。

十月十日の午後メレルは宮本文次郎を通譯につれて京都へ行つて西幸次郎を訪問した。

西幸次郎は安土村香の庄の生れである。明治十年に陸軍歩兵伍長として西南の役に従軍したが、戦後勳章と共に一時金參拾圓を下賜せられた。彼はその參拾圓で一生の生活方針を立てなければならなかつたので、筆墨の行商人となつて北海道に行き桃花流水だの國色天香だのを賣つてゐたが、中途で脚氣病に罹つた。醫者にみてもらふと故郷の土を踏めといふので、やむを得ず近江に歸つて來て、八幡町の郊外淨樂寺村に住んでゐたが、八日市町に牧場が出來て牛乳を賣り出したときいて、彼はその受賣をすることになつた。けれども當時は八幡町内で牛乳を飲む家は十二三戸しかなかつた。だから一日の賣高はせいぜい六合か七合である。

その頃京都の森田といふ畫家が八幡に來て住んでゐた。その森田家から毎日五匁づつの牛乳配達を西幸次郎に申込んで來た。で、その配達をしてゐるうちに、或日のこと森田は西幸次郎に對つて、商賣は正直が第一の資本だといふ話をした。商人の空誓文とか、商人のそら値とか、偽の頭に宿る神あ

りとかいふ俚諺を商人の格言のやうに心得てゐた彼にはその言葉が不思議に思はれたので、いろいろ話してみると、その森田夫婦が基督教信者であるといふことが知れた。

そこで西幸次郎は毎日此の植田家を最後の配達所として、五匁の牛乳を持つて來て、其の家で畫家の夫婦からキリスト教の話の話を聞いたのである。さうしてゐるうちに、八幡町の劇場共同座で基督教大演説會があつたので、それを聞きに行つて、遂に決心して洗禮を受けることになり、森田の紹介で京都へ行き平安教會で受洗したのは明治二十三年五月十六日のことであつた。

信者になつた西幸次郎は屋財家財すべてを賣りはらひ、金十七圓五十錢を得たので、それで和牛一頭を買つて、その乳を自分で搾つて自分で配達することにしたのである。

そのうちに明治二十七八年の日清戦争が始つて、廣島に大本營を置かれたので、彼は昔の鎮臺さんである縁故から手蔓を求めて大本營に牛乳を納めるやうになり、廣島へ出張して戦争が終るまでそこに居たのである。

彼は廣島を引揚げると同時に、京都花園村の妙心寺裏の北門前に西牧場を設け、八幡町の牧場は弟の千貫久次郎に經營させ、自分は京都と八幡町との兩方にゐて、八幡町教會の爲には執事として會計主任として財産管理人として専心力を盡してゐたのであつた。

メレルが初めて八幡町へ來た時の八幡教會の中心人物は、この西幸次郎・その弟千貫久次郎・藤居

俊藏らの三家族であつた。

メレルが通譯として宮本文次郎と悦藏とを伴れて西幸次郎を京都に訪問したのは、青年會館を建てたいが、その地所がないので、西の智慧を借りに行つたのである。

西幸次郎はアンドルウスの遺族がメレルに送金して來た話をきいて感激しながら言つた。
青年會館を建築する敷地は私が寄附ませう。いつからでも建てなさい。

メレルは驚いた。こんなに容易に敷地が得られるとは思はなかつたからである。で、事情を聞くと斯うであつた。

西幸次郎は自分が始めてキリスト教の話聞いた八幡町へ何とかして教會堂を建てたいものだと思つたが、第一教會堂を建てるなどと言つては一坪の地所だつて賣つてくれない。のみならず其の資金を出す力が、教會員には全然無いのである。で、彼は先づ會堂敷地購入の爲に竊に貯金をはじめ、牛を一匹賣買する度に金一圓を郵便貯金にした。それが十箇年間に三百餘圓になつた時、八幡町の中心ともいふべき爲心町に三百坪ばかりの賣地があるときいたので、早速貯金にいくらかを加へて、それを買つたことは買つたが、會堂建築にはまだ前途程遠い。で、その地所の片隅には小さい人力車の丁場があるだけで、全體は草蓬蓬と生え茂つたままにしてゐたのである。

西幸次郎はその時、京都花園村で優秀なホルスタイン種の牝牛三十二匹を飼つてゐる程の資産をも

つてゐたので、もう胸中には教會堂の建築設計が出来上つてゐたに相違ない。そこへメレルが青年會館を建てるといふので先づ第一着手としてその三百坪の中の東の半分を無代で貸すことにしたのである。残る西の半分には教會堂を建てるつもりなのである。

西幸次郎の話をきいた三人は非常な感激をもつて、すぐ其の場で感謝會を開き、この計畫が成就するやう、心からのあつき祈りを捧げたのであつた。

次の日曜十月十五日に、悦藏が教會に行つてみると、そこには上級生の村田幸一郎が來てゐた。村田幸一郎は八幡町内の劍客の子で十二三歳の時にはもう一廉の擊劍家であつた。悦藏が商業學校へ入學して間もなく、學校の廊下に立つてゐると、二年生の教室の前から兩脚を空中にひろげて、それを可笑しく動かしながら兩手で歩いて來る生徒を見た。それが村田幸一郎であつた。村田幸一郎は或時ブランコの釣臺の頂邊から十五六尺もある所を平氣で飛び降りたりした。そんな無鐵砲な事をする彼は無邪氣で負嫌ひであつた。彼は五日前の水曜日に魚屋町の聖書研究會に出席した時、酒を飲んで顔を火照らせてゐるのを悦藏は見たのであつた。

珍客だ。さあお入り。と、言つた悦藏は彼を室内に誘ひ入れたが、メレルは氣を利かせて彼を室の後の方の薄暗い所に坐らせた。それは彼が酒を飲んでゐることを知つたからであつた。その村田は何を感じたか、始めて教會へ顔を見せたのである。此の村田幸一郎が後の近江兄弟社の理事長兼社長に

ならうとは、神ならぬ身のメレルにも悦藏にも豫知する力はなかつたのである。

その頃の八幡教會には深尾婦人傳道師も辭職し、専任傳道者がゐなかつたので、彦根教會の傳道者大橋五男ごおとこが毎月二回出張傳道をすることになつてゐた。商業學校の生徒たちは、これまで魚屋町の聖書研究會へは出席したが、教會へはあまり出席しなかつたものである。で、信者の間では魚屋町組・小幡町組と區別して呼んでゐた。魚屋町組の多くは聖書研究會員でまだ洗禮を受けてゐない連中であつた。ところが大橋五男が説教するやうになつて魚屋町組が小幡町の教會へだんだん出席するやうになつた。今まで魚屋町組のきいてゐたキリスト教は、メレルを通じてのキリスト教であつたから、その例話も教訓もみな外國の話ばかりだつた。ところが大橋五男の説教には大鹽平八郎・山崎齋齋・平田篤胤・吉田松蔭・佐久間象山・横井小楠・梅田雲濱などの例話が出、徳川初代の殉教者の實例などを語るので、青年達は此の悲壯・痛烈・熱血の説教によつて新しく日本のキリスト教魂を知つて、信仰の炎を燃やしたのである。

悦藏が洗禮を受けて間もない或日のこと、彼は魚屋町の家から教會を訪問してみると、傳道師の大橋五男ごおとこが、ぼつねんとして坐つてゐた。教會といふものの平家の日本建で、八疊と六疊との二室きりである。その時悦藏は金鈕のついた羅紗の制服を着て、鈕の横に金色のメダルをさげてゐた。他の生徒は小倉服であるが悦藏はいつも羅紗服を着てゐたのである。

二人が對ひ會つて話してゐる時、大橋五男は説教臺が一つほしいと言つた。此の教會には脚のぐらつく古いテェブルを今まで説教臺に使つてゐたのである。

説教臺はどれだけの金があれば出来るかと悦藏がきくと、十五圓あれば立派なものが出るだらうと大橋五男は答へた。十五圓といへば叔父金之介から月月送つてもらふ悦藏の一箇月分の學資の全額である。そんな大金を寄附する力は悦藏になかつた。すると突然大橋五男は言つた。君のそのメダルは外國の金貨らしいが、それを寄附してくれないか。

悦藏は考へた。これは兄さん（金之介）が買うてくれたスイスの二十フランの金貨である。今まで大事にもつてゐたのであるが、洗禮を受けた記念にこれを寄附するといふことは意義のあることだし、これをくれた兄さんに黙つて寄附することはいけない。

そこで次の土曜の午後兵庫に歸つて、叔父の金之介にその話をすると、その金貨は今の日本金に換算すると八圓六拾錢に相當する。だからそのメダルを寄附したところで説教臺は出来ない。で、そのメダルは、わしが十五圓に買つてやるから、その現金十五圓を教會へ寄附するがよい。と、言つて、金之介は金十五圓を悦藏に渡した。

月曜の午後、悦藏は教會に行つてその現金十五圓を大橋五男に渡した。大橋は非常に喜んですぐ京都の清水洋家具店へ行つた。その主人は四條教會の會員で清水三作といふ大橋の知人であつた。

説教臺を一つ作つてほしい。金は十五圓出す。しかし註文がある。京都教會の説教臺は飾りが多すぎる。室町教會のは淡泊すぎる。その中間を取つたものをほしい。

大橋五男はさう言ひ置いて歸つて來た。が、しばらくすると清水三作から設計圖を送つて來た。設計する前に京都教會と室町教會との説教臺を見くらべて考へたらしい。なるほどこれならば自分の思ふ通り、飾りすぎず淡泊すぎない説教臺だと思つたので、十分念を入れていいいに作つてくれるやうに手紙で頼んで置いたのであつた。

十一月一日に、悅藏・宮本文次郎らはメレルと疏水陸道から舟で京都に出て同志社に宿つた。それは三日に開く特別集會に列席する爲であつた。

三日の會合を終へて、四日の朝早く八幡町に歸つたが、その日は日露戦争終結の平和祝賀會で樂隊・花火・提灯行列といふ賑やかさであつた。

十一月十九日に、商業學校生徒の蘆田隆三（後の吉田三右衛門）・藤谷光之助および山本治三郎等の三名が洗禮を受けた。その中の山本治三郎は丹後舞鶴港の酒造家の子であつたが、魚屋町組の一人になつて聖書研究をするうちに、酒の害をつくづく悟り、夏期休暇中郷里に歸つて両親に禁酒を説いたばかりか酒屋廢業説まで説いたので非常な怒に觸れ、その窮狀を輕井澤にゐるメレルに訴へたい

が、手紙を書く場所も與へられないので、酒庫の中に入つて大きな樽の中に匿れてメレルへ祈りを求むる英文の手紙を書いた青年である。

魚屋町の聖書研究會に集る連中は、何といつても親しく外國人に接して會話の勉強をするといふ氣分が濃厚であつた。けれどもその連中は三箇月五箇月と聖書の研究をしてゐるうちに、英語の會話といふことよりも、もつと人生に深く食ひ入るべき或る倫理的なものを感じるやうになり、禁酒禁煙から更に進んで靈魂上の問題を感じるやうになり、さては公然と洗禮を受けて基督教徒であることを公表するやうになつたのである。

近江商人の根據地であり、佛教の最も深く根を張つてゐる八年町ではあるが、明治十四年以來二十四年間、宮川經輝・原田助・小崎弘道・海老名彈正・丹羽清次郎らの大家達が度度來て獅子吼した土地である。もう十七年間、宮川友之助・新野稔・村田平三郎・岩村加四郎・濱田乙磨・大橋五男と六代の傳道者が兎に角傳道を續けて來たのである。小幡町中筋・京街道筋池田町・仲屋町・そして小幡町上筋二十二番地と四回の移轉はしたが、たつた二人でも三人でも、とにかく禮拜と祈禱會とは休會せず續けて來たのである。わづか十二圓の月給で傭はれた牧師は八幡町を中心に八日市・市の邊・大森・武佐の各所を經巡つて集會を續けたのである。教會の家賃も一圓から一圓二十錢、それから二圓二十錢まで高くなつて來たが滞納したこともなく、今、傳道師に月額二十圓を謝禮とすることが出

来るやうになつてゐる。疾くの昔の跡かたもなく消えて無くなつてゐるやうな教會が、どうしても潰れないでゐるのは、八幡町民にとつて不思議な事實であると共に不氣味な存在でもあつたらう。その教會へ近頃縣立商業學校の生徒が出入するばかりか洗禮を受けるものさへ出て來た。嘗て大津にある滋賀縣立尋常師範校生徒米澤尙三（後の神戸教會牧師）が此の教會で洗禮を受けたがために退校處分を受けた事を町民はよく知つてゐる筈である。然るに今の商業學校では校庭の各所で公然讚美歌の練習をしてゐる。ポケットに赤金縁革表紙の聖書と讚美歌を入れた生徒の登校姿が町の人たちの眼を惹くのである。しかも調査するまでもなく級中の優等生がほとんどみな聖書研究會員である。會員である西村貞子が病氣になつた時、魚屋町の聖書研究會員は毎朝登校前に其のために祈禱會を開いたり、わざわざ病床へ見舞ひに行つて患者を慰めたりした。のみならず、其の葬式の日には會員や基督教青年會員は、授業を休んで制服制帽のまま葬式に参列したのである。そして旗をもち花環を提げ西山の火葬場まで列を組んで送つて行つた。助教諭の宮本文次郎が駆けつけて、あとで問題になるかも知れないから早く解散して學校へ行くやう忠告したが、誰ひとり葬列を離れなかつた。

果して學校内にはその事が問題になつた。葬式の棺を運んだり旗や花束を持つのは卑しい白丁のする事であつて、學校生徒が制服のままそんな事をすべきではないといふのである。

日露戦争が終つた後、ロシア文學が日本國に氾濫し、自然主義の風潮が青年の心を席卷しさうになつた。と、同時に國粹主義・日本主義が學生間に鼓吹された。そんな影響で八幡町の商業學校内にも基督教征伐の空氣が漂ひ初め、魚屋町組の或者は橋の上から濠へ投げこまれた。或者は校庭で野球の棍棒で頭をしたたか殴られて昏倒した。悅藏も何回か小突き廻された。メレルを殺すのだといつて、懐に白鞘の短刀を呑んでゐる生徒もあつた。

けれども生徒の中誰ひとりとして教會へも聖書研究會へも出席を躊躇する者もなく、却つて信仰を燃やすばかりであつた。メレルも迫害の刃に横腹をえぐられようなどとは夢にも思はず、毎日にここに微笑みながら通勤してゐた。

やがて明治三十八年のクリスマスが來た。今までにない盛大な祝會が出來たばかりか、商業學校の校庭で魚屋町組の北榮太郎を野球の棍棒で殴打して昏倒せしめた飯田健も、短刀を懐に呑んでゐてメレルを殺すのだと言つていきまいてゐた渡邊就一も、三月前の十月五日に初めて教會へ顔を見せた村田幸一郎も、後の北川與平當時の北川龜太郎も、野崎貞次郎も、後の菱田峰太郎當時の富田峰太郎もみんな打揃つて洗禮を受けたのであつた。

一時教會が潰れさうになつた時、二三人の信者で教會を守り抜いて來た藤居俊藏夫妻や、千貫久次郎の兄の西幸次郎が八幡町に完全な基督教の會堂を建てようとして待機してゐるのを知つて、涙と共に

に其の日の来るのを祈つてゐた千貫久次郎の如きも、まだ年若い青年たちが、いさぎよく禁酒禁煙を決心して教會へかけ込んで来る其の勇氣を、どんなに深い感激をもつて迎へたことであらう。

二十六年前の明治十二年六月五日に、廣瀬又治といふ平信徒が八幡町に来て友人野間憲吉に傳道し始めてから永い間萎靡として振はなかつた八幡教會にも、此の時聖靈の火が燃えはじめたのである。

かくて明治三十八年は暮れて、悦藏が十七歳の明治三十九年の春は巡つて來たのである。

悦藏の通つてゐる商業學校生徒のうちで、洗禮を受けて教會員となつたものは、一年生に川崎虎太郎一名。二年生に辻野長太郎・都甲直巳・奥田左門の三名。三年生に吉田悦藏一名。四年生に蘆田隆三・村田幸一郎・古長清丸・丸井佐太郎・北榮太郎・辻眞・渡邊就一・飯田健・富田峰太郎・山本治三郎・野崎貞次郎・藤谷光之助・北川龜三郎・前野佐吉の十四名であつて、合計十九名の生徒が堂堂と教會員として教會に出入するやうになつたのである。これは當時の八幡町としては實に容易ならぬ大きな出來事であつたに相違ない。そこへ突如として商業學校内に一つの暴行事件が起つたのである。

明治三十九年一月十九日の午後商業學校三年級のキリスト教嫌ひの連中が教室に集つて、我我はもうあと三箇月で最上級生になるのに、まだ眼覺しいこともしないのは残念だといふ理由で、下級の生徒に鐵拳制裁を加へる相談をしたのである。

放課後外に出ようとした悦藏は、同級生の大勢に教室内へ呼びこまれ將に鐵拳の雨を浴せられようとしたが、瞑目して黙禱してゐるうちに何を思つたか一同は彼一人を教場内に残し置いてどやどやと外に出て行つた。同級生を殴るのは恥だとも思つたのであらう。

翌二十日の放課後三年級の嵯峨根民次郎・木谷豊太郎の兩人が主謀者となつて下級生十數名を雨天體操場につれこみ、中から鍵をかけて置いて亂暴の極をつくした。

翌二十一日の晩であつた。悦藏は魚屋町の家でアブラハム・リンコン傳を読んでゐた。彼はその前日までに英文の天路歷程を読み終つたのであつた。生れてから始めて英文の四百ペエジもある厚い本を一冊読み終つたうれしさに、更に第二の原書を読みかけたのである。そこへ一人の生徒が來て、三年生の山田の下宿までちよつと來てくれないかと言つた。

悦藏はすぐ其の生徒と二人で、三町ほど離れた所にある山田の下宿に行つてみると、三日前に恐ろしい權幕で自分に制裁を加へようとした連中が神妙な顔をして坐つてゐた。

彼らが悦藏を呼びに來た理由は、昨日の下級生制裁が少し亂暴すぎたので、事件はこのままにをさまらないと思ふから、悦藏からメレルにメレルから校長に事を隠便にすますやう頼んでほしいといふのであつた。

その話をきいた悦藏は其の場で一同に代つて悔悟の祈りを神に捧げた。暴行したのは悪い事では

た。どうぞ清い善良な學生として此の一團のものを改心させて下さい。と、いつて祈つた時、亂暴者の一同はみな肅然として聲を呑んでゐた。

悦藏はメレルに事情を打明けて頼んだ。メレルは校長以下に寛大な處置を願つたが、二十三日に保證人を學校に喚び出し、校長から理由を説明して、二名を退學に、三名を無期停學に一名を一箇月停學に、十六名を三日間停學に、二十三名を訓誡に、總計四十五名が處罰されたのであつた。

一月二十六日の近江新聞で此の事件は詳細に報道せられたが、そのついでに、商業學校内の耶蘇教派と非耶蘇教派と題して生徒中の受洗者氏名、職員中の受洗者氏名を仰仰しく書き立てた。それ以來此の事件に關する投書が新聞紙上に度度掲載されはじめた。その中には、この處分は厳しすぎた。それは基督教信者の誣言を校長が信じたからであるとか、暴行者中に基督信者があつたのを、基督教信者の教師が特に庇護して軽い處分にしたとか、學校内の職員にも生徒にも耶蘇派・非耶蘇派があつて互に軋轢してゐるとか、全然事實無根の事まで仰仰しく書き立てた。はては、商業學校は宗教學校たらんとす須く雇教師メレル・ヴォーリスを解雇すべし。などといふ投書もあつた。出る投書も出る投書も悉く真相を得てゐないので、村田幸一郎は匿名で一篇の論文を滋賀新報に投じて、基督教攻撃派の投書家鶴鳴山人の説を思ひきり攻撃した。その筆者が商業學校の一學生であると知つてか知らずか、その論文は堂堂と第一面に二號活字の見出しで掲載された。

悦藏はそれを讀んで溜飲を下げた。何となれば鶴鳴山人の投書は全然事實無根の捏造記事だつたからである。つまり此の時の騒ぎは單なる三年級一部の鬱さ晴しであつて、校内から基督教を驅逐する爲ではなかつた。然るに社會では此の騒動を利用して基督教攻撃にその鋒を向けしめたのであつた。

近江八幡では、こんな小さい事件を近江新聞とか滋賀新報とかいふ新聞紙が、さも大事件らしく取り上げて書き立ててゐる時、東北の地山形・福島・宮城の三縣下には悲惨極まる飢饉があつた。前年十一月頃から東北地方の大凶作。とか、農民饑餓に頻して其の慘狀目を蔽はしむ。とかいふ標題の記事がしばしば新聞紙上に現れてゐたが、その窮狀がますます甚だしいと聞いた大橋五男は教會員千貫久次郎や藤居俊藏と相談して、東北飢饉救済のために活躍しはじめ、同情袋を有志者に配布して金・米の寄附を募ることにして、先づ彦根町から運動を開始したが、一箇月かかつて米二石七斗・金五拾圓しか集まらなかつた。それだけの物を三縣下へ送つたところで何の足しにもなるまいといふので、更に策を練り直してゐるうちに大橋五男は考へついた。それは當時の蒲生郡長遠藤宗義が福島縣二本松の生れで、師範學校長から郡長に轉任した人であるといふことであつた。そこで八幡町の郡衙に行つて遠藤宗義に面會して東北三縣下の飢饉救済の事を語ると、遠藤郡長は非常に喜んで出来る限りの助力を與ふる約束をしてくれた。そこで大橋五男・千貫久次郎・藤居俊藏の發起で趣意書を印刷して配布した後、教會員總出で同情袋を八幡町の戸毎に配布して大活動を始めた。商業學校生徒の山本治

三郎・古長清丸・村田幸一郎・吉田悦藏等を始として受洗者全體が制服制帽で陣頭に立ち、がらんがらんと鈴を鳴らしながら同情袋を集めた。その時いつも鈴を振つて活躍の先頭となつたのが悦藏であつた。

忽にして金七百餘圓と米七十六俵が集つた。教會員の此の活動を見た近郊宇津呂村の青年團員は無償で米の俵装を引受けようと申込んで來、蒲生倉庫ではその米を無償で東北まで輸送してくれる事になり、町長原田四郎左衛門はじめ、町内有志の森五郎兵衛・西川甚五郎らも皆協力してくれた。

一時基督教の勃興を心配して、町内からこれを掃蕩しようとして企てた人たちも、その基督教徒の活動を見て靜にその動靜を窺ふことにした。

とかくするうちに、學年試験を終つて三月の卒業式が舉行せられ、古長清丸・山本治三郎・村田幸一郎ら十四名の四年生はみな日本全國に其の名を知られてゐる滋賀縣立商業學校を卒業して、各自未來の大實業家たるべく滿ち溢れる希望を懷いて東に西に南に北に四散したので、今まで十九名の信者を有してゐた商業學校内には、悦藏と共に川崎寅太郎・河路寅三の三名の信者が残つただけであつた。しかのみならず日本人教諭の中の唯一人の信者であつた宮本文次郎は、此の月限り辭職して海外に去つたので、魚屋町組も俄に寂寞を感じ初めたのであつた。

その頃から悦藏はメレルの顔色がだんだん蒼薇色を失つて行くのを知つて心配しはじめた。

果してメレルは寢込んでしまつた。本國から持つて來た藥品はのみ盡した、と言つて町には信賴の出來る醫者はなし、思ひ切つて京都の同志社病院に入院しようと言ひ出したので、悦藏は梅雨晴れの或日を見定めて、二人乗の俵にメレルと一緒に乗つて京都へ行つた。京都には基督教青年會の主事をしてゐるフェルプスがゐて、メレルの世話をしてくれた。

悦藏がメレルに訣れる時、メレルは言つた。あなたは私の眞實の弟のやうに親切に介抱してくれて誠にうれしい。けれども今度は私も此の國の土になりさうです。

そんな事はないでせう。と、言ひながらも、悦藏は心の中で其の言葉が眞實になるのではないかと、思つて涙を流しながら祈つて別れた。

それから悦藏は暇さへあれば京都へ行つてメレルに會つた。行くたびにメレルは瘠せ細つて行く。ただ死期を待つやうに黙つて聖書を読んでゐるメレルを見ると胸が塞るのであつた。

もう梅雨期も過ぎて樹樹の若葉がその美しい緑を初夏の暖かな太陽に照されてゐる頃、悦藏はメレルをつれて神戸へ行つた。それは神戸の布引の瀧の近くに野間菊子の經營してゐる衛生病院で水治療法を受ける爲であつた。

その日悦藏は母の家に泊つてすぐ翌朝早く八幡町に歸つた。そして二週間ほど経つた時、魚屋町の家を表に二挺の俵が停つた。出て行つてみると、それはフェルプスとメレルで、メレルは赤毛布に身

を包んで苦しさを俾を降り立つた。

フェルブスは靴のまま畳の上に跳り上つて来て、料理人に寢臺の用意を命じた。そこへメレルは龜の歩みで静に静に入つて来て、寢臺に横りながら黙つて悦藏の顔を見詰めた。眼頭には白い露が光つてゐた。

フェルブスは押入の中にあるメレルの荷物を取り出して荷造りをはじめた。どうするんですかと、悦藏が訊くと、醫者の話では多分腸結核らしいから今のうちに故郷へ歸るがよいといふので、今晚の汽車で横濱につれて行つて、明後日出帆の汽船に乗せるつもりだ。と言つた。

悦藏は幾度か涙を拭ひながらフェルブスを助けて荷造りをした。そして運送屋を頼んで来て馬車に一杯積み込んだ荷物を停車場に送つたが、書物だけはそのままにしてあつた。

夕食をすませた所へ教會員が三四人駆けつけて来た。家の前には三挺の人力車が引かれて来た。メレルは其の中の一つの俵に乗る時悦藏に對つて言つた。私はフェルブスさんに頼んで往復切符を買つてもらひます。一度は日本の土になると思つたが、どうやら大丈夫よくなるといふ確信が出て来さうです。よくなつて歸つて来たなら、必ず昨年の秋から計畫してゐる學生青年會館を此の町の中央に建てませう。二十人ぐらゐる收容出来る寄宿舎と三百人ぐらゐる入れる集會所とを造りたいです。その爲にあなたも私も海を隔てて御互に祈りませう。

メレルは昨年の十月頃から學生基督教青年會館を建てる計畫を立て、見取圖を作つたり、寄附金の募集にとりかかつてたりしてゐたのであつた。

悦藏は堪らなく思ひながらメレルを俵に乗せ、三人は俵を連ねてあの長い暖を停車場の方へ急いだ。そして米原までの切符を買つて三人一緒に車室へ入つたが、朝九時すぎに米原で車を出た彼は、四十五分餘り待合の時間があつたので、メレルの片腕を抱へながら町に出て、アメリカに持つて歸る土産など買ひ求めた。

メレルを車内に送りこんだ彼は、その手を握りながら、早く歸つて来て下さい。私は祈つてゐます。と、言つたが、止めどなく涙が流れて兩の頬を傳つて落ちた。それを拭ひも敢へず車外に出ると間もなく汽車は動き出した。比良山の上空の星を見上げた時は、もう汽車は響だけを殘して其の姿を見せなかつた。

やりきれない寂しさを胸にいだきながら十一時すぎに汽車に乗つた彼は、がらんとした空家のやうな魚屋町の家に入つて、二階の六疊にある寢臺に身を投げたまま、羽枕に顔を埋めて泣きに泣いた。日本へ来てから十六箇月目に健康を害して此の八幡町を去つたメレルはもう二度と富士の靈峯も櫻の美しい花も見ることが出来ないのではないか。といふ不安がひしひしと胸にこみ上げて来る。

此の月の十八日に商業學校の校長安場禎次郎は學校を去つた。明治三十六年の二月に赴任して以來

良校長として尊敬せられてゐたのであるが、その最後に一つの疑問符を學校に残し置いたのは、一時に十九名の基督信者を生徒の中から出したといふ事であつた。そのあとへ赴任して來たのが伊香賀矢六で佛教の熱心なる信者であつた。

翌七月五日に兵庫で母と二人で暮してゐた悦藏の妹まつ子が母の看護を受けながら亡くなつた。彼にとつては唯一人の妹である。徳藏といふ育ちを異にした弟はあるが、母が掌中の珠と愛してゐたまつ子の死は、母の嘆きを察するに餘があつた。

此の月、今まで彦根と八幡と兩教會の兼任であつた大橋五男は、八幡教會の専任傳道師となつて大字小幡町の教會に定住するやうになつた。

八月になると學校は暑中休暇中滿鮮へ修學旅行をするので悦藏も其の一行に加つて一緒に出かけたのであつた。

八月九日に奉天府へ着いた一行は、翌朝馬車に乗つて愛親覺羅の居城であつた金鑾殿を見に行つた。皇族下乗の古碑の近くに歩哨が二人立つてゐた。中央の大清門をくぐつて文徳坊・武功坊を左右に眺めながら大廣場に出ると、東に飛龍閣西に翔鳳閣の高樓がある。正面の大理石階段を登ると、清の太祖・太宗二世が文武百官に調を賜うた崇政殿がある。そこを出て右翊門から日華樓・露綺樓・獅善齋・協中齋などの建物を見て、賜宴場らしい三層の鳳凰樓に登つて外廓の諸門を眺めたあとで、清

國第二世乾隆皇帝の北陵を見に行つた。彼等は碑閣の奥の院にある大聖精眼神功聖德碑に敬意を表して外に出て、清國初代の所領を象徴する石像の駱駝・象・馬・獅子などの立並んでゐる側の石に腰を下して休んだ。そして悦藏は太平洋の彼方にゐる精神の兄、靈魂の友であるメレルに涙ぐみながらそこで一通の手紙を書いた。それから彼は堀熈次郎・大橋藤藏・と肩を並べて紅糧畑の一筋道を、海のやうな果しなき平野の向ふに紅く照されてゐる夕熾雲と、今までに見たことのない大きな夕陽とを眺めながら奉天府の北門に歸つて來たのである。

ぐつたり疲れて何にも知らずに眠つた彼等は、翌朝宿の番頭から馬賊の首斬があることを教へられた。恐ろしいもの見たさの興味に唆られた彼等はその處刑場に行つて、七つの首を斬る青龍刀の唸りを夢中になつて見た。それから身の毛のよだつやうな恐ろしい首塚などを見た時、支那と日本との文化の甚だしい相違を知つて誇らしいやうな氣になつた。仁義道徳を日本に傳へた儒教國の末路がこれであると思ふと、日本に愛の道を傳へに來る西洋諸國の末路を考へざるを得なかつた。

愉快な旅行の終つたあとで兵庫の家に歸つて見ると、一人娘を亡くした嘆きのまだ消えやらぬ母は、慈愛の涙を眼に泛べながら彼を迎へてくれた。そして彼に手渡した一枚の繪端書には、病氣が全快したので、近いうちに再び日本へ行つて美しい日本の土地を踏むから横濱まで迎へに來てくれ。といふメレルのたよりであつた。

彼は其の日から英文聖書のイザヤ書と詩篇とを讀むことにしてメレルの來るのを待つてゐた。そして性の覺醒期である十七歳の夏を清く正しく過し得たことを信仰の徳として感謝した。

九月中旬に彼は横濱の岸壁に、その顔に薔薇色を取返した元氣なメレルを迎へたのであつた。そして二人が將來の計畫を語りながら八幡の町に歸ると間もなく、彼の母りうは兵庫から出て來て、メレルの健康恢復を祝つた。りうは娘に死なれた寂しさを醫すために息子の彼を見に來たのである。

それは西日のかんかんと教會の障子を照しつけてゐる或日の午後四時頃であつた。りうは小幡町の教會に大橋五男を訪問した。恐らくこれが彼女の基督教會訪問の最初であつたらう。

ちやうど其の時大橋五男は教會内にゐて、體格の頑丈さうな四十四五歳とも見える彼女を迎へたのである。彼女を伴れて來た悦藏は、これが僕の母です。と、大橋に紹介した。りうは八疊の室に上り込んで、私は兵庫の藤の寺の尼講のお世話をさせていただいて居りますが、今度越前の永平寺へ尼講の團參をいたしますので、私は一足お先へ失禮してこちらへまゐりまして、一方ならぬお世話になつて居ります悦藏のお禮を申しのべにお伺ひいたしました。と、堅固な佛教信者であることを表看板に堂堂たる挨拶をしたあとで、汗など拭いていろいろな話をしたのであつた。

りうが歸つたあとで、大橋五男は、あの井上悦藏の母親は、忤の悦藏は基督信者になつたが、私の母は佛教信者であるから、一口だつて私に傳道してくれるな。と、言はんが爲にわざわざ自分を

訪ねて來たのだと思つた。

ここで少しく八幡基督教會のことを語つて置く必要がある。

時は明治三十九年九月十二日であつた。坂田郡長濱町に長濱基督教會の献堂式が舉行せられ、八幡教會員の藤居俊藏・千貫久次郎の兩人と傳道師大橋五男の三人は招待されて其の式に列した。藤居俊藏の兄太一郎は長濱町の名門家で早くから基督信者となつてゐた。だから俊藏も小學時代から日曜學校に通つてゐたので、小學校で脊中へ算盤の十字架をこしらへられ、ヤソ・ハリツケと言つて、いちめられたものである。家は醬油製造業であつたが、その工場から火事を起した時、燃えさかる火焰の中から佛像が見えたと町内の人たちは誠にやかに言ひふらした。それは耶蘇を信じるやうな家は穢らほしいと言つて、佛様が家を焼拂つて逃げ出したのだといふのである。それだけ古い基督信者である藤居太一郎は當時の執事であつた。此の太一郎の友人に林幾太郎といふ牧場經營者があつた。

林幾太郎は實に忠實な信者であつた。けれども佛教の盛な近江の土地で傳道することは容易でないと思つて、先づ自分の家から固めて行くことにして、牧師伊藤勝義を自宅に招聘して聖書講義を聴いた。外への傳道はむづかしい。私共一家族の者に徹底的に教へて下さい。と、常に彼は言つてゐた。そして一家族が悉く信者となり、二人の娘には信者の養子をもらひ、京都で二箇所の牧場を經營さ

せ、自分は葡萄園を造つたり、牧場を經營したり、寫眞屋を開いたりして、一家に出入する者を一人一人信者にして行つたが、いよいよ教會堂の必要を認めるやうになつたので、彼は藤居太一郎らと相談して、長濱町内目貫の場所である南吳服町に堂堂たる會堂を建築したのである。金は自分一人で引受ける。しかし教會堂は一人一己のものであつてはならぬから、信者全體が協力して建つべきであるといつて教會債といふのを募集したのであつた。

獻堂式の日には滋賀縣下各教會の牧師傳道師及び有志者が招待されて、會堂は來賓で満たされた。その時林幾太郎のなした事業報告は、誠心誠意に溢れた大説教であつた。今までの多くの教會は外國傳道會社から建築費を出してもらつたものである。外國人の宣教師の力に頼つて建てた教會が十中の八九であつた。然るに林幾太郎はそんな金は一圓も受けないで、會員各自の獻金のみで此の大きな教會堂を、しかも町内目貫の場所に建てたのである。

林幾太郎の報告を聞いてゐた大橋五男は、心から感激してしまつた。よし、自分も其の意氣で八幡町に堂堂たる教會堂を建てて見せよう。と、決心した彼は、その歸途同行の藤居俊藏・千貫久次郎の兩人に話したところ、同じく林幾太郎の報告に感激してゐた兩人は即座に賛成した。

二日の後九月十四日の午前、大橋五男は藤居俊藏を訪問して教會堂建築の話をする、藤居俊藏は、取敢へず金壹百圓だけ出さうと言つた。當時の百圓は大金である。大橋五男は幸先宜しと感謝の

祈をして藤居家を出た。そして、その歸途醫師の山本小太郎を訪ねた。その頃大橋五男は山本夫妻に聖書を講義するため毎週一回づつ訪問してゐたのであつた。そこで會堂建築の話をする、山本小太郎は一言の下に金壹百圓出させようと言つてくれた。これで二百圓出来たのである。

それから千貫久次郎の家を訪ねたのは午前十一時頃であつた。千貫久次郎は滿二箇年前の明治三十七年の十一月に洗禮を受けた比較的新しい信者であつた。兄の西幸次郎はいつも洋服を着て鬚を蓄へてゐるといふ紳士風の男であつたが、弟の千貫久次郎は極めて淳朴な性質でいつも和服を着てゐた。兄から洗禮を受けよと言はれても、信仰するのよいが煙草やめよは困る。と、言つて永らく受洗を躊躇してゐたのであつたが、一旦信仰すると實に忠實であつた。此の日大橋が訪問すると千貫久次郎は上り框かまどの所で火鉢を前にして眼鏡をかけて大字の聖書を読んでゐた。彼は話は上手でなかつたが、話の聞き上手であつた。大橋が長濱教會で受けた感激談を、うなづきながら聞いてゐたが、話が終ると同時に、一世一度のことぢや、二百圓出させよう。と、言つた。

大橋五男 非常に喜んで、そこを出ようとする、夫人がごもく御飯を作つたから。と言つて彼を引止め、食事中にも教會堂の話などして教會に歸り、午後三時半に魚屋町のメレルを訪問した。故國まで死に行つて死ねずに歸つて來たメレルは健康さうな顔色で大橋五男を迎へて來意を問うた。そこで教會堂建設の話をする、さすがは半専門家だけあつて、先づ豫算はいかほどかと訊いたので、

大橋五男は凡そ千圓と答へた。するとメレルは其の四分一を出さうと言つた。

合計六百五十圓出來たので、詳細を京都の西幸次郎に通知すると、今は多忙だが來月早中にはそちらへ行くから、その節精しく話さう、といふ返事が來た。待つてゐると、十月一日の午前十時頃西幸次郎は小幡町の教會を訪ねて、教會堂を建てるからには町内目貫の地に建てなければなりません。私は豫てからさう思つて爲心町に三百坪の屋敷を買つてあります。あの土地を教會へ寄附しますからその西の半分に教會堂を建てて下さい。東の半分は青年會館の敷地としてメレルさんに貸して上げて下さい。と、言つたので、大橋五男は手を拍つて喜んだ。ところが西幸次郎はその敷地と共に金五百圓の提供を申し出た。合計壹千壹百五十圓の約束ができたのである。

その頃町内の新町に野間りゆうといふ六十歳の産婆がゐた。八日市で洗禮を受けた古い信者で、五十錢の家賃だといふ見すばらしい家に娘と二人で裁縫をしたり産婆をしたりして、ほそぼそ生活をしてゐたが、教會堂を建てる話をきいて、金十圓を持つて來て大橋五男に渡した。實に貴い貧者の一燈として大橋五男はそれを受けたのであつた。

會堂建築費として金壹千壹百六十圓の約束が出來たので、大橋五男は手紙を木曾田梶之助に送つて八幡町へ來てもらふことにした。

木曾田梶之助は岡山縣和氣郡沓登^{すだて}生れで、同志社の傭大工をしてゐたが建築の才能があるので佐伯

理一郎・大澤善助らに認められ、京都市同志社前に建築事務所を設け、盛に事業をやつてゐた。滋賀縣大津の小學校を建築したので、八幡町の人たちにも其の名を知られてゐたのである。

間もなく木曾田から間口四間奥行七間の設計圖を送つて來たが、造作・附屬品・外圍を除いて豫算壹千六百圓であつた。そこで大橋五男は會議を開いて相談した結果、千貫久次郎の發議で總て五割増といふことになり、野間りゆうも更に五圓を提供した。これで全額壹千七百五十圓となつたので、いよいよ建築を木曾田梶之助に請負はせることにした。

教會堂の建築設計がこんなに進捗してゐる時、メレルは頻りに青年會館の設計圖を描き直してゐた。メレルは前年の十月十日に京都の西幸次郎を訪ねて青年會館建設の話をした時、西幸次郎は其の敷地を寄附する約束をしたのであつたが、それが果してどの地所であるかを確實に知らなかつたのである。ところがその西幸次郎が八幡教會の日曜禮拜に出席したのを見た悦藏は、集會が果てた時、メレルが青年會館建設の計畫をしてゐる事を西幸次郎に話すと、西は爲心町の地所半分を青年會館の爲に提供するから一日も早く建築にかかると傳へてくれ。と、言つて、多年の夢がいよいよ現實になることを感謝した。それを聞いた悦藏はすぐに西幸次郎とメレルとを伴れて爲心町の地所を見に行つた。大橋五男も一緒に行つて地形を見た上、青年會館と教會堂との位置を決定した。そして京都の木曾田梶之助を呼んで青年會館建築工事を三千六百圓で請負はせることにしたのである。

悦藏は吉田家に生れながら、今まで井上悦藏といふ戸籍面であつたが、明治三十九年九月二十六日に井上家を廢家にして叔父吉田金之介の甥として吉田家へ入籍を届け出たので、母りうも共に入籍して吉田りうとなつたが、翌二十七日りうは神戸市兵庫下澤通五丁目七番地へ分家して悦藏と共に別に吉田の一家を立てたので、始めて彼は學籍簿を吉田悦藏と改められたのである。

十一月になると、もう青年會館の基礎工事が出来て勇ましい手斧の音が響きはじめた。

クリスマスがすんで、悦藏が兵庫へ歸るのでメレルも一緒に兵庫へ行つて、悦藏の家に逗留することになつた。りうがメレルに日本料理が食べられるかときくと、京都で抹茶も飲んだ。前年の五月二十六日に牧野虎次・古木虎三郎の兩人と彦根の樂樂園へ行つた時、鯛のさしみも食べた。と答へた。夕食のあとで悦藏の母りうは不思議さうな顔付で問うた。このあひだ兵庫教會からクリスマスプレゼントといふものが來た。あれは何でせうか。

悦藏は母の間に答へてキリスト降誕の事を精しく説明した。りうは黙つてうなづきながら聞いていたが、悦藏あんたは八幡の商業を卒業しても、まだ續けて耶蘇教を信仰するつもりですか。と、問うたので、彼はまたキリスト教の事を少しく母に説明した。

間もなく二人は兵庫の家で皇紀二千五百六十七年の明治四十年の春を迎へた。悦藏は十八歳にな

り、りうは四十二歳になつたのである。

その一月三日に悦藏とメレルの二人は兵庫教會を訪問して、屋上から四方の景色を見たあとで、金之介の家を訪ねた。金之介は非常に喜んで二人を一室に通して、近頃買った書畫數幅を見せて、そのうちの一幅をメレルに贈つた。そして三人が食卓を圍んで晝食を食べる時、兄さん、私に感謝の祈をさして下さい。と、言つて悦藏は祈りはじめた。祈りかけたが感慨が胸に迫つて聲が出ない。やつと聲を出して祈つたが涙は引つきりなく頬を傳うて流れた。彼は亡き父の事を憶ひ出して、今の自分の心に溢れてゐる宗教を父に説き聽かせることの出来ないのが悲しく思はれたのであらう。兄の酒癖に困りぬいてゐた金之介も眼に涙を泛べてその祈を聞いてゐた。

一月七日に悦藏はメレルと一緒に大阪へ行つて、今大倉商業學校の校長となつてゐる先の滋賀縣立商業學校長であつた安場禎次郎に會つた時、安場禎次郎はメレルにこんな事を言つた。八幡町では近頃あなたの基督教運動について、非難の聲が高い。いつそ今うちで辭職して都會の學校へ出てはどうです。及ばずながらお世話いたします。

悦藏は何となく不安に思ひながら其の會話に耳を傾けた。翌八日に學校の授業が始まるのでその晩二人は魚屋町の家へ歸つたが、八日の午後教諭の雨田仲左衛門が訪ねて來て、メレルと話してゐるのを聞くと、メレルが基督教青年會館を建築しつつあるので、あれが竣工すると、どんな活動をし始め

るかも知れないといふので、町の有志たちも不安に思つてゐると言つてゐた。この危懼の念は町の有志達よりも寧ろ縣當局と學校の職員間にあると悦藏は考へた。で、その晩もその翌朝もどうぞ自分達の純潔運動が妨げられないやうにと、二人で熱心に祈つた。

八時前に學校へ行かうとして戸を開けると、入口に卒業生の榎澤謙吉が立つてゐて、青年會館が建設せられると聞いたので、これを寄附するからメレルに渡してくれといつて金四十圓を悦藏に手渡した。

その翌月十日に二人の來訪者があつた。一人は早稻田大學の英語教師のウオウタア、一人は大阪高等工業の英語教師某であつた。この二人は今日悦藏らの四年級の參觀をしてメレルの授業ぶりを祝たのであつた。

二人は頻りに八幣の商業學校生徒が英語に巧みなことを褒めてゐた。早稻田の大学生にも、大阪高工の學生にも、八幡商業の四年生程度に會話の出来る者は稀だといつてゐるのを聞いた悦藏はひとりでほくほく喜んでゐた。

一月十四日に教諭の雨田仲左衛門が來て、今度縣知事が轉任したから、メレルを勤績せしめるかも知れないが、伊香賀校長は排斥に傾いてゐるといふ話をメレルにしてゐた。

一月十七日にメレルは生徒に書かせた英文の感想文を悦藏に見せて、もうこれだけ生徒の中に基督

たが浸み込んで來たから、自分は排斥せられるかも知れないと言つた。見ると其の文章の中に、二人は信仰問題を論じ、一人はクリスマススの感想を書き、一人はニコデモの話を書いてあつた。

一月二十五日の夜、悦藏は母から手紙を受取つた。それにはあなたは商業學校卒業後しばらくメレルと同居してゐたいといふ話だが、それは今から謝絶して置け。是非同居したいならば兵隊検査がすんだあとにせよ。と、書いてあつた。悦藏には母の意志がわからなかつたので、自分の考を精しく書いて叔父金之介の所へ送つて置いた。

明治四十年二月二日、それはメレルが八幡町へ來た滿二周年の日である。その日メレルは風邪氣味で寢臺に横つて、悦藏から中江藤樹傳を英譯してもらつて聞いてゐた。そこへ兵庫から吉田金之介が入つて來て、メレルといろいろ話した末、四十年の十二月まで悦藏を預けて置く約束をした。

二月四日に悦藏は學校の歸途爲心町の青年會館建築場に行つてみると、ちやうど窓硝子を嵌めてゐるところであつた。今日はメレルが商業學校で教鞭を執りはじめた滿二周年だなどと思ひながら魚屋町に歸つた。それから三日後の二月七日に石炭一噸を八圓五十錢で買つたメレルは、これは青年會館で使ふのだと言つて喜んでゐた。

二月十日にいよいよ青年會館献堂式を舉行することになつた。これは商業學校内の青年會ではなく、萬國基督教青年會に屬して、體育・智育・靈育の正三角形の徽章を會員章とする世界的團體の一

部なのである。

前日から悦藏ら六人の學生たちは、一所懸命に献堂式の準備をしたが、その前夜（九日晚）メレルが寢室に入つて祈りの準備をしてゐる所へ突然悦藏が入つて來たので、何の爲に來たかと訊くと、とうとう願が叶つて天の父と楽しい會話するあなたの顔を見たいのだ。と、言つた。けれども悦藏は遂にメレルの顔を見ないで、二人は眼を閉じて熱心に祈つたのであつた。

朝早く東京から平澤辯護士、陸軍大佐宇野重喜、京都から佐伯理一郎が來た。そのうちの宇野大佐は献堂の祈禱を捧げるだけの使命を帯びて來たのであつた。

晝の献堂式には百二十五人が集り、夜の集會には三百人以上入つたので、遂に入り切れないで歸る者もあつた。その夜の辯士は鶴崎庚午郎・日野眞澄・佐島啓助の三人であつた。

献堂式は盛大であつたが、當時の魚屋町の家には、悦藏一人が同居してゐるだけで、聖書研究會にもほとんど來る者はなかつた。

二月二十一日に石井學務部長からメレルへ手紙が來た。讀んでみると三月限りで辭職してほしいと書いてあつた。これより前に石井はメレルに日本刀一口、二百圓で買つてくれと言つて送つて來てあつたのを返すために、その日すぐ縣廳に行つて辭職しなければならぬ理由をきくと、メレルが基督信者であるからだと言つたので、それならば已むを得ない。自分はその信仰を捨てることは絶対に

來ないから。と、答へて八幡町へ歸つてみると、待ちかねてゐた悦藏は、今日雨田教諭に會ふと、石井學務部長は伊香賀校長に一言の挨拶も相談もなくメレルを首にしたと憤慨してゐた。と、語つた。どちらにしても、メレルはもう商業學校で教鞭を執ることは不可能だと悦藏は思つた。

三月二日に町の西の別院本堂で滋賀縣立商業學校佛教青年會の發會式があつて、學生二百人町民百人の來會者があり、新作の歌が讚美歌の曲で歌はれた。會長は四年生の岡田彦治郎であつた。基督教側から悦藏も出席したが、岡田彦治郎は悦藏に對つて公言した。自分は佛教青年會長になつたが佛教を信じたい爲ではない。ただ基督教を排斥したいためだ。

悦藏は岡田彦治郎の性格から推して其の言葉は偽らざる告白だと思つた。

三月三日に青年會の集會があつて、大橋五男の説教があつた。そのあとで悦藏は會館の會計係に選ばれてそれを引受けた。そして此の會合でメレルは始めて校長の聲明書を示して、商業學校を引退することを發表した。校長伊香賀矢八の聲明書を翻譯すると、

ウキリヤム・メレル・ヴォウリス氏は西曆一千九百五年二月から滋賀縣立商業學校に於いて英語科の教師として勤務した。その教授法と學生薰育の方法は全く満足すべきものであつた。然れども生徒に聖書を教へて基督教の感化を與ふるので、縣民の大部分たる佛教徒諸君の反對意志により已むなく解職したのである。

と、いふのであつた。

翌日大橋五男は一文を基督教世界誌上に投じて此の顛末を評論した最後に、しかもヴォーリズ氏は一言の怨聲を發せず飽まで基督者紳士の體面を保ち従容として善後の謀をなす其の高風誠に羨慕すべきなり余此の席に列して感慨禁する能はず敢て事の概略を記して我黨の士に告ぐる事然りと、書いてあつた。

此の一文が發表せられると、四方から慰めの手紙が魚屋町のメレルの宅へ舞ひ込んだ。

同志社からメレルを招聘に來た。前の商業學校長からは是非自分の學校へ來いと言つて來た。大阪の基督教青年會から傭ひに來た。東京の基督教青年會から來いと言つて來た。早稻田大學の教師になれと勧めに來た。けれどもメレルはみんなそれを謝絶した。その手紙の封筒はみな悦藏が書いたのであつた。

三月四日の夜メレルは故郷へ一通の手紙を書いて其の内容の一部を悦藏に話した。それは大橋五男と相談した結果メレルの故國の教會籍を日本の八幡教會に移すといふ事であつた。故國の名簿から除籍してもらひ、日本の教會の一員となつた以上、メレルはもう米國の教會員ではないのである。これはメレルが後に日本人となつた一つ手前の準備だつたのである。

三月九日は悦藏の誕生日だといふので、メレルは祝意を表する爲に夕食の皿を一つ多くした。悦藏

は満十七歳になつたのである。

三月十日に悦藏とメレルと二人は、八日市まで歩いて、そこから乗物で水口まで行つた。水口教會はその頃無牧で、富森といふ婦人傳道師がゐた。その夜悦藏の通譯でメレルの説教があつた。會合のあとで毎月二回づつ應援する約束をした。

水口から歸つた十一日の夕方、二人は大阪へ行つた。それはメレルが青年會の夜學校で毎週三回づつ英語を教へる事になつたからである。一箇月二十圓で一回一圓七十錢の謝禮では汽車賃だけしか無い。けれども商業學校卒業生の蘆田隆三・野崎貞次郎が大阪基督教青年會の會員だつたので御互ひに喜び合つた。

三月二十一日は晴天であつた。悦藏はメレルと二人で新築の青年會館へ荷物を運んだ。移つてみるに敷物も窓掛も家具も何にもない、がらんとした家で田舎の村役場のやうだと思つた。けれども三千六百圓といふ大金を支拂つたあとなので、メレルの貯金通帳は大きな穴が明けられてゐるので、電燈を取りつけるだけの金もないから、小さいランプを買つて來て間に合せた。風呂に浴りたいが風呂桶がない。千貫久次郎の所から擔ひ桶を借りて來て水を汲んで來た。冷水浴は寒さうなので、それで少しく湯を沸してスポンヂ・バスをやつた。その時メレルは悦藏の身體があまり華奢なのを見て、スリイピングボウチで寝て、肺部を健全にするやう忠告した。

メレルの貯金通帳が反古になつたと知つてか、料理人の神谷は轉居の翌日無理やりに暇を取つて出て行つてしまつた。だから悦藏が炊事番といふことになり、足りないものや無いものは千貫久次郎の所へもらひに行つた。

三月二十三日に婦人を二人傭うて拭掃除をしてゐる所へ魚屋町の家主から至急来てくれと言つて來たので、悦藏とメレルが行つてみると、家主はいろんな文句を言つた。悦藏はメレルを怒らせないやうに加減をしながら通譯した結果、メレルの造つた階段と二階の新しい畳とを家主に無代譲といふことで話は纏つた。この交渉は何でもない小さい事のやうではあつたが、それでも人間の物慾に對する執着心の強さを見せつけられて悲しくなつたので、その晩は長い祈りをして、智慧と力とを與へられんことを求めた。

三月二十四日は日曜であつた。小幡町の教會で大橋五男の娘が生れたので、青年會館で合同禮拜を行ひ商業學校生徒の福室は受洗して信者になつた。明日は商業學校の卒業式でメレルと學校との關係は今日一日で全く斷絶といふ日、教へ子の受洗を見たのである。これでメレルが八幡の町に來てから滿二年と三週間に三十一名の生徒が基督信者となつたのである。

いよいよ悦藏もメレルも、なつかしい商業學校に別れを告げる日が來た。

卒業證書

兵庫縣平民

吉田悦藏

明治廿三年三月生

本校制定ノ本科課程ヲ履修シ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ此證書ヲ授與ス

明治四十年三月廿五日

滋賀縣立商業學校長 正七位 伊香賀矢 六

第五五二號

こんな卒業證書が授與せられた。校長は十二代目で悦藏は五百五十二人目の卒業生なのである。その時悦藏は流暢な英語で答辭を述べた。彼はこの時から E. V. Yoshida といふサインを用ゐるようになった。前の晩始めて新築の青年會館に一人の泊り客があつた。それは當時改悔者として名高かつた藤井捨吉といふ聖書賣であつた。

此の日悦藏が學校から歸つてみると、メレルの姿が見えない。二階の應接室に行つてみると、メレルは沈痛な顔をして椅子に掛けてゐた。入つて來た悦藏を見るとメレルは言つた。吉田さん、私は今

日あなたと一緒に學校を卒業したのです。私は今日から一錢の収入も無くなりました。此の八幡町を去るならばあちらこちらから私を高い月給で傭つてくれます。けれども私は此の八幡町で初めて日本人の美しい心を知つたのです。私が故郷の教會に除籍を願つて此の地の教會員の一人にしてもらふ決心をしたのは、此の町が世界中で最も善い地だと信じたからです。私はこの土地で死にたい。私は福音宣傳のために此の町で生命を捨てます。私は決心しました。若き友よ私のために祈つておくれ。その言葉を聞いた彼は悲壯な感慨に打たれた。涙が兩の頬を傳つて流れた。そして二人は腕を抱き合つて長く長く祈つた。祈りの後でメレルは問うた。吉田さん、學校の寄宿生は毎月どれだけの食費を拂つてゐますか。

四圓五十錢ですと彼は答へた。するとメレルは追ひかけて訊いた。飯と鹽とだけ食べてゐれば一箇月どれだけで済まされますか。

三圓五十錢ぐらゐでせう。と、彼は言つた。と、メレルはゐすまひを直して祈つた。それは毎月三圓五十錢の金錢を與へてくれるならば、この一身を此の地のために捧げるといふ祈りであつた。

メレルの祈りは誠實そのものであつた。言言句句、聞いてゐる悦藏の魂をゆすぶり動かした。

その頃悦藏の身には二つの望があつた。一つは進んで高等商業學校へ入るといふ事である。それには自信があつた。他の一つはすぐデンマアクに行つて、コウベンハアゲンの商科大學に入學すること

であつた。その學資の出所もきまつてゐた。けれども彼は今眼の前に眞の基督教徒を見たのである。今まで窺ひ知ることの出来なかつた基督魂をまさまじ見たのである。

彼は、はふり落る涙をそのままに叫んだ。私は決心しました。私は最後の血の一滴までも福音宣傳のために、利他主義の實行のために、純潔運動のために捧げます。そして私は私の將來を捨てます。私は母から受けてゐる今までの學資を今後も其のまま續けて送つてもらひます。それを二人の食費にあてます。……

メレルの眼には熱い涙が漲つた。二人は抱き合つて泣きながら祈りに祈つた。

二十七日の午前、兵庫から悦藏の弟で叔父である徳藏が母のりうをつれて八幡町へ来て、新築の青年會館を訪問した。悦藏が二年間世話になつたお禮をメレルに言ふ爲であつた。そこで四人は牛鍋を共にして、いろいろの話をしたが、りうも我が子の熱心にほだされた見え、時時兵庫教會へ行つてみようと言つて歸つて行つた。悦藏は喜びに溢れながら母と弟とを停車場まで見送つたのであつた。

メレルも京都に用事があるので、二人と一緒に汽車に乗つた。その晩悦藏がさみしい會館の中でひとり書物を読んでゐる所へ、郵便局から電話だと言つて來た。何事だらうと思つて駈けつけてみると、メレルの聲で、京都の青年會館へ来てみると、これから毎月吾吾の生活の爲に五十圓づつ寄附しようといふ無名の篤志家が現れた。あまりうれしので十錢の電話料を齎發してベビイに此の喜びの

音づれを送るのだ……と、言つた。

三月三十日に神戸の叔父金之介から手紙が来た。読んでみると、自分の家は佛教に深い因縁があるから基督教になるわけに行かないが、お前はそのままの信者で、どうぞ一生酒と煙草とから離れて純潔を守つてくれ。と、書いてあつた。

四、放蕩息子

明治三十六年より明治四十年頃まで

皇紀二千五百六十三年の明治三十六年九月の初であつた。當時京都西陣教會で傳道してゐた大橋五男は播州姫路から但馬の豊岡へ巡回傳道に行つて見大橋覺三の家に泊つてゐると、そこへ一人の聖書賣が来た。話してみると滋賀縣の野洲郡兵主村の野田生れの浦谷貞吉といふ男であつた。浦谷は郷里でさんざん放蕩をした末、大阪で放浪生活を續けてゐるうちに、或日の事の中島公園で救世軍の路傍説教を聞いて今までのぐうたらな生活を清算して、聖書販賣人になつたのであつた。

それから京都に歸つた大橋五男は、間もなく東京神田教會牧師島貫兵太夫の訪問を受けた。島貫兵太夫は日本力行會といふのを組織して海外移住者の世話をしてゐたが、その資金募集のために来たのであつた。

島貫兵太夫は時の京都府知事大森鐘一を知つてゐたので、大橋五男といつしよに府廳へ行つて資金募集について協力を請うた。すると大森鐘一は奇抜な案を島貫兵太夫に授けた。それは神戸大阪にゐる各國領事の娘達を招待して市會議事堂で舞踊會を催すといふのであつた。そこで島貫兵太夫は阪神間を往復して各國領事に交渉したところ、みな承諾してくれた。

十月の初にその舞踊會が開かれることになつて、阪神から外國の小娘が二十數人出演するといふことが日の出新聞始め各新聞の特種として掲載された。いよいよ其の當日になると京都府知事大森鐘一はシルクハットにフロックコウトの禮装で馬車を京都驛に駐つた。娘達を伴れた各國領事たちと大森知事とが、京都驛構内で握手してゐるのを見た旅客達は何事であらうと驚き、目を見張つたものである。

そんな噂が市中に廣がつたものか、その日の舞踊會は非常な盛會であつた。島貫兵太夫に頼まれて司會者となつてゐた大橋五男が、閉會を宣言して壇を降りて來ると、そこに立つてゐた一人の男が、大橋先生。と、呼んだ。誰かと思ふと但馬の豊岡で出會つた聖書賣の浦谷貞吉であつた。用事を聞いてゐる暇がないので明朝教會まで來いと言つて別れたが、翌朝訪ねて來た彼は、京都にゐて苦學したと言つた。同志社にでも入學して牧師にでもなりたいといふやうな甘い考へらしかつたので、その不心得を諭して歸らせようとしたが、どんな事でもするから何所かへ就職の世話をしてくれといふの

で、某宣教師の所へ月五圓の月給で庭掃除に入れて置いたが、二年後の明治三十八年の秋、メレル・悦藏・大橋五男の三人は彦根中學の聖書研究会へ行つた。メレルの講義を悦藏が通譯したのである。そこへ、ひよつこりと訪ねて來たのが浦谷貞吉であつた。何の用かと訊くと、近いうちに救世軍のプウス大將が來るといふから歓迎に行くのだと言ふ。プウス大將の來るのはいつの事だかわからないから、そんな事は思ひ止つて、兵主村の野田に歸つて百姓でもせよ。と、言ふと、郷里では信用が無いから居られないといふ。大橋五男は叱りつけながら五十錢銀貨一個を與へて置いたが、翌年の春浦谷貞吉は八幡町の教會へ東京辯の女を連れて訪ねて來た。聞けば、あれから東京へ行つて救世軍に出入してゐるうちに、婦人ホウムに收容してゐた女と結婚して歸つて來たのだ。と、いふ。歸つて來て何を目的か。と、尋ねると、目的がないから其の目的を教へてもらひに來たのだ。と、いふ。

何故東京に踏止らなかつたか。と、詰問すると、故郷の母親の事が心配でたまらないから歸つて來た。と、神妙なことをいふ。八幡町には豆腐屋が少いから豆腐屋をやつてみないか。と、言ふと、經驗がないから出來ない。と、いふ。車夫になれ。と、言ふと、走ることは御免だ。と、いふ。そこで千貫久次郎の所へつれて行つて相談すると、熱心な千貫久次郎はわざわざ大阪まで行つて浦谷貞吉のために職業をあさつてくれたが、その頃大阪神戸で流行した電氣菓子を賣らせることにして、大橋五男と千貫久次郎との肝煎りで三十圓の道具を買つてやつた。

四月の十五・十六兩日は近江八幡の祭日なので、浦谷貞吉夫婦は八幡神社の境内に其の電氣菓子の機械を据ゑつけて製造に取りかかつたが、菓子は思ふ通りに出來ないので失敗してしまつた。それから彼はその機械をもつて八幡町を去つたが、またしても一箇年の後に大橋五男を教會に訪ねて身のふりかたを頼んだ。

捨てても置けないので、青年會館へ伴れて行くと、ちやうど悦藏が瀟洒な背廣服を着て炊事をしてゐる所であつた。

大橋五男はメレルに會つて浦谷のことを話すと、その人は鹽と砂糖との區別を知つてゐるでせうと、突飛なことをメレルは言つた。わけを聞いてみると、前に傭つた神谷といふ料理人は鹽と砂糖とを間違へて料理をするので、途方もなく甘かつたり、減法からかつたりする料理を食べさせられたが、其の區別さへつくならば傭つてもよいと言ふのであつた。

そこで大橋五男は浦谷貞吉夫婦をメレルに紹介して月給なしで當分働くことを約束させた。實際メレルも悦藏も一人の料理人も小使も傭ひ入れる力はなかつたのである。

この放蕩者の浦谷貞吉を通じて野田の地に福音の種を蒔くことが出來たといふ不思議な話がある。それは後に語ることにする。

五、涙の祈

明治四十年

九四

明治四十年四月三日から八日まで、東京神田美土代町の基督教青年會館で第七回萬國學生基督教青年會大會が催された。これは日本に於ける萬國の二字を冠した會合の最初であつて、世界各國の基督教青年會の代表者が集つて來た。悦藏とメルルは八幡基督教青年會を代表して出席することになつた。三月三十一日の晩二人は三等車の片隅に席を取つて、一時間交代に御互の膝枕を貸し合つて、一時間づつの安眠を守りながら東京に着いた。會合での役目はメルルはオルガンを弾くことであり、悦藏は地下室で外人に日本に關する英文著書を賣ることであつた。

六日間の會合は悦藏に取つて實に有益であつた。井深梶之助の英語の巧みなことにも感心したが、海老名彈正が五十歳過ぎて始めて方言を語るのだと言つて英語演説をしたのを聞いてうれしく思つた。英米崇拜熱の高かつた當時、世界二十五箇國の代表者六百二十七名を前にして、英語を方言だと言つた其の意氣に感心せざるを得なかつたのである。

四月三日の午前八時三十分、UNUM IN CHRISTO と云ふ水色の絹に縫ひつけた文字鮮かなる下に檜と棕櫚の植木鉢を置いた簡素極る壇上に席を占めた四人、それは本多庸一・鶴崎庚午郎・ジョン・アール・モット・カアル・フリースであつた。やがてメルルの弾くオルガンとピアノとコルネットの

合奏で聖なる聖なるの讚美歌は日英佛獨清韓の六箇國語で異語同曲に聲高らかに歌つた。彼は此の日の集會に始めて本多庸一・井深梶之助・ジョン・アール・モット・鶴崎庚午郎・カアル・フリース・元田作之進・出村悌三郎・笹尾条太郎・尾崎行雄・江原素六・笹森宇一郎・渡邊暢・千家尊福の顔を知り、文部大臣牧野伸顯・外務大臣林權助・伊藤博文・ノルウェー王ハアコン・ルウズベルト大統領らの祝辭を井深梶之助の流暢なる朗讀によつて聞いた、殊にメルルを感化したジョン・アール・モットの沈毅な態度に感心した。

二日目には内ヶ崎騰次郎・小畑久五郎・植村正久・星野光多・中瀬古六郎・小林彦五郎・原田助・浦口文治・福田令壽・シンブソン等の顔を知り、三日目には丹羽清次郎・芦田慶治・小崎弘道・日野眞澄・ニコライ大主教鶴澤聰明・内ヶ崎作三郎・新渡戸稻造・留岡幸助らの顔を知り、四日目には吉崎彦一・ニコライ男爵の顔を知り、特にニコライ男爵には面會してその名刺をもらつて置いた。此の日始めて彼は大隈重信を其の邸内で見その演説をきいた。通譯は新渡戸稻造であつた。

五日目には釘宮辰生・王正廷二人の顔を知り、王正廷とは五分間ばかり英語の會話を試みたのであつた。最後の日四月八日には明治維新當時まで水戸侯の庭園であつた小石川後樂園で滿鐵總裁後藤新平の歡迎會があつた。後藤新平の歡迎の辭の中に此の後樂園は我が國藝術の模範場で水石山林の美を極めた所である。そこへ萬國の名流を招待したる予の意を諒とせられたいといつたのを聞いた時、彼

は後藤新平の月並でない挨拶に感心した。これに對してジョン・アール・モットは、從來此の學生基督教青年大會が歐米各地に開かれたれど、未だ日本に於けるが如き歡待を受けたことはない。今や散じて各目の國に歸らんとするに當つて、此の幽雅なる庭園に於いて此の歡迎を受けた事を深く感謝す。と、言つたのも彼には立派な答辭だと思はれた。自分がいつか世界各國を廻ることがあつたならば、此の會合で出會つた人たちを片つ端から訪問しようと思つた彼は出来るだけ多くの名刺をもらつて置いた。

悦藏は開會前の四月二日から會場入口の左手の階下の一室インフォウメション・ビューロウで徽章・プログラム・讚美歌・ハンドブック・書籍・雜誌・郵便切手・繪葉書などを賣る手傳ひをしたのである。

十八歳の少年悦藏が此の會合に出たことは彼の眼を世界的に開かしめ、我が日本國が決して世界のどこにも劣つてゐないといふ事を其の參列者によつて知らしめたのであつた。

四月九日に二人は八幡の町に歸つて來たが、メレルは此の會合後ますます日本語研究の必要を感じたので悦藏を教師として毎日勉強をした。廣い會館の中にたつた二人の寂しい生活はメレルを日本語に悦藏を英語に追ひ込まざるを得なかつたのである。

四月十二日の祈禱會に、悦藏は教會で萬國基督教青年會大會の模様を精しく報告した。

四月十三日は土曜であつた。その晩二人は机の中にそれからそれへと、いろいろの話をしてゐるうちに、悦藏は叔父の金之介から外國へ行つて製油の研究をして來るなら、その費用を出してやらうと言つて來た話をすると、メレルは其の不可を主張した。

翌十四日の朝教會へ日曜禮拜に行つた。その翌日十五日十二時前に歸つてみると、青年會館の前に大きな荷車が引きこまれて、一人の人夫が二人の歸りを待つてゐた。メレルに救はれたアンドルウスの父から、メレルが青年會館を建てたときいて、鐵脚の椅子大小二脚と集會用の折疊みの椅子二十四脚とを送つて來たのである。此の運賃六十三圓七十二錢也をくれよといふので、二人は財布の底をばたいて、それを支拂つた。神戸からの運賃と税金とである。

四月十八日に風呂桶が出來た。悦藏は大喜びで早速薪をこしらへて風呂をわかしした。

四月二十一日は日曜であつた。午後メレルが悦藏の室を覗くと、悦藏は頻りに涙を拭ひながら何だか書いてゐた。どうしたのかと問ふと、黙つて英文の原稿を見せた。讀んでみると、悦藏自身の少年時代の追憶で、自分が今酒と煙草と女から全く救はれて純潔な生活をなし得るやうになつた神の恵みを感じた熱誠溢るる文章であつた。翌日水口教會へ行つて、メレルが其の文章について説教すると悦藏は涙ながらにその通譯をした。

それから四日目の四月二十五日に、大橋五男から頼み込まれた放蕩息子浦谷貞吉が、月給十圓で料理番に傭はれることになつたので、悦藏は始めて火を焚きつける苦心から免れることが出来たのである。

四月二十九日に、悦藏とメレルが教師となつて英語夜學校を開くことにしたので、青年たちがまたちらほらと顔を見せるやうになつて來た。此の夜學校は實に前後三十箇年繼續したものである。

四月三十日に青年會館開館以後の會計を整理してみると、二人の財布の中には金三圓が残つてゐるだけであつた。

悦藏の祖父金介は倅久介を相続人としなかつたので、悦藏のために財産を分けて、金之介に保管を命じてあつた。その財産から月月七十圓の収入があつたので、その中から十五圓を悦藏の學費として四年間金之介から送つてもらつたのであるが、メレルと二人で湖畔傳道の爲に青年會館の樓上へ立籠る決心をしたので、金之介と母とが相談の上、月額二圓を増して十七圓送金してくれる事になつたのであるが、そこへ無名の篤志家から月月金五十圓を送つてくれるやうになつたので、四月以後は合計六十七圓で二人の生活を支へるやうになつたのである。

一時は誰も寄りつかなかつた青年會館も、五月になつて六人の學生を迎へて寄宿させるやうになつた。

その頃爲心町に建築中の八幡教會の會堂はもう棟上げを終つてゐた。悦藏はその建築場に毎日のやうに來る大橋五男とよく立話をしたものである。時に大橋五男は二十六歳の青年で活氣横溢能く談じ能く語つた。

或日大橋五男はメレルに相談したい事があるといつて青年會館に入つて來た。悦藏は二人の會話の介錯をした。大橋五男は新築する壁の色をどんなにすればよいかといふのである。メレルはミニスタア・アペエのクリスチャン・チャアチの壁色がよからうと言つた。それはキリストの血の色だといふ。悦藏はえらい壁の色だと思つたが、あとで建築師の木曾田棍之助に其の話をすると、それは印度の辨柄を混ぜればよいと苦もない返辭であつた。悦藏はこれまで辨柄は紅殻で紅の使ひ滓だとばかり思つてゐたが、此の時初めて辨柄といふのは印度のベンガル地方に生じる樹皮から採つた染料だといふことを知つたのであつた。しばらくして大橋五男はまた窓框の色を何色にすればよいかと相談に來た。メレルは緑色がよからうと言つた。

會堂がほとんど出来上つた時、運送屋が大きな荷物を擔ぎ込んで來た。大橋五男が高聲で笑ひながら人夫を指揮してゐるので、悦藏は何事かと思ひながら行つてみると、實に頑丈な腰掛を二十六脚運び込んでゐる。どうしたのかと訊くと大橋五男は言つた。建築費は豫算以上の支出になる。腰掛を造る金がないのでどうしようかと苦心してゐる所へ、聖書賣の藤井捨吉が來て大橋五男のうちへ宿つ

た。そして腰掛の話をすると、藤井捨吉は即座に、それは浪花教會に適當な物があるから世話をしようと言つた。どんな腰掛かといふと、澤山保羅が浪花教會を創立した當時、二十六脚の腰掛を造つた。それを三十何年間使つてゐたが、あまりに頑強なので教會員の船橋福松が新しいのを造つて寄附したので、其の古いのが不用になつてゐるから安く賣つてもらふやうに交渉してみるといつて、これを一脚五十錢で買つてくれたのだ。

一脚五十錢とはあまりに安いと思ひながら、其の腰掛を眺めてゐると大橋五男は、腰掛の一つを掌で撫でながら、澤山保羅の説教が此の堅い木に浸み込んでゐるから、此の腰掛だけ並べて置けば、吾吾風情の傳道者の説教はなくともよい……と、言つて笑つた。まことに澤山保羅の説教が浸みこんでゐるやうな古い腰掛であつた。

五月六日から前に記した東京の萬國學生基督教青年會大會に出席した印度人カールマルカル氏を迎へて各地に傳道説教を願つたが通譯は悦藏が當つた。その當時各地巡回に費した會計報告の記録がメレルの日記に今でも残つてゐる。その時集つた聴集にカードを渡してキリスト信者になる決心者三十一名、又、聖書研究志願の決心をただした處、水口に於ても膳所に於ても八幡に於ても相當の決心者があり、合計七十一人の多數にのぼつた。カールマルカル氏は九日に京都に歸り、メレルと悦藏は彼を京都まで送つて行つた。其處で又來朝中の救世軍のブリス大將にも會つた。十四日には神戸でブー

ス大將の講演會が開催されたのであるが、その時、悦藏に同伴されて出席した悦藏の母りうは初めて基督信者になりたい決心を披瀝して會後ブリス大將と握手を交した。悦藏の喜悅は又格別であつた。

それから間もなく九月十七日に八幡教會の献堂式が舉行せられた。百五十人の會衆は澤山保羅の説教の浸み込んでゐる腰掛に神妙に坐つてゐた。壇の正面には悦藏がメダルを賣つて寄附した説教臺が調和よく据ゑられてある。來賓中には嘗て同志社で牧野虎次と同級であつた今の縣會議長西川嘉右衛門も居た。彼は金一封を祝儀として大橋五男に手渡してゐた。献堂式のすんだあとで、大橋五男は悦藏に、あの説教臺は運賃共に十二圓五十錢であつたから残額二圓五十錢は教會へ寄附したと話した。

その夜の特別傳道會では大阪教會の宮川輝輝が張り切つた講演をして滿堂の會衆を感激せしめた。それから爲心町中一番地には、新築の基督教青年會館と八幡教會の會堂とが並び建つて、青年達も足繁く出入するやうになり、教勢の振興が眼に見えて來た。

十一月の末に叔父金之介から悦藏の祖父金介が病氣だと言つて來たので、取るものも取りあへず兵庫に歸つてみると、もう餘程重態であつた。金介は飲んだくれの久介がもう此世に居ないので、後の事は温順な金之介にすつかり任せこんで十一月二十八日の午後八時三十分安心して永眠したのである。彼は天保十年生れの六十九歳であつた。

その頃から悦藏の心中には多少の變動が起つて來た。それは基督教の傳道といふことは單に青年會

館や教會堂に立籠つてゐて出来るものではないといふ考が萌し初めたのである。彼は祖父の葬式をすまして八幡町に歸つた後、一旦實業界に身を投じて一定の職業を得た上、メレルの片腕となつて福音の宣傳者にならうといふ決心をメレルに打明け、二人はその事について何十回か祈つたものであつた。

十二月二十四日に長濱教會でクリスマス祝會が行はれるので、彼は青年會を代表して出席したのを最後に、當分メレルと別れて活動することになり、明治四十一年の一月一日に彼はなつかしい青年會館を出て兵庫に歸つたのである。別れる時のメレルの祈、彼の涙ながらの祈は、彼が此の世を去るまで忘れようとして忘れることの出来ない涙の祈であつた。

六、再び八幡町へ

明治四十一年—四十二年

明治四十一年の一月一日、彼は十九歳の春を迎へるとすぐ兵庫の家に歸つた。母のりうと三井物産株式會社の兵庫支店長遠藤大三郎の細君とは以前から懇意だつたので、彼を其の網濱倉庫の穀肥部へ傭つてもらふことにした。

年は十九であるが、人柄もよし才物である上に英語がよく出来るので、將來は支那の支店へでも派遣するつもりで遠藤大三郎は特に彼に目をかけて使つてくれた。けれども彼はどうしても八幡町が忘れられない。そこにある青年會館がなつかしい。兄のやうに思つてゐるメレルに會ひたくなる。で、暇さへあれば八幡町へ来て、メレルと一緒に使道に出かけて其の通譯をしたりした。メレルも機を見ては神戸に行つて彼に會ひ共に祈つた。

その頃悦藏の先輩である村田幸一郎は一年志願兵として大津聯隊に入營してゐた。彼は悦藏よりも一年前の明治三十九年に商業學校を卒業して暫くメレルの魚屋町の家に行つて其の書記のやうな事をしてゐたが、或日のこと一日出勤しなかつたので、どうして昨日は出て來なかつたか。と、メレルは詰問した。家内が留守になつたので、留守居をしたのだ。と、答へると、青年が唯ひとりで家に居るのは宜しくない。と、メレルは叱つた。自分の家で留守番をして悪いといふやうな、わからず屋の所には居てやらぬ。と、村田幸一郎は腹を立てた。その頃料理番の男も近く暇を取らうとしてゐた場合だつたので、村田幸一郎を頻りに唆かした。

一旦決心すると思ひ切りよく酒をやめ煙草を捨てて基督教會へ躍り込んだ程の果斷な彼は、こんな事にも思ひ切りよくメレルの所を飛び出したが、其の年の十二月に一年志願兵として軍隊に入り明治四十年の暮に下士官となつて出て來たが、翌年の春大阪に行つて江ノ子島にある大阪警察本部の細菌検査助手になつたり心齋橋の合名會社橋本清商店に勤務してゐたが、明治四十一年十月から十二月ま

で三箇月間勤務演習に行つて、陸軍歩兵少尉として出て来たのであつた。

明治四十二年の一月、悦藏は二十歳の春を迎へ其の二日にメレルを八幡町に訪うた。そこへ千貫久次郎も來合せていろいろの話をしてゐるうちに、村田幸一郎が立派な軍人になつて歸つて來たといふ話が出て、誰が言ひ出したか、その村田幸一郎を中心に寫眞を撮ることになり、軍服姿で來てくれと言ひやると、間もなく村田幸一郎は佩劍鏘鏘たる軍服姿で颯爽としてやつて來た。その時悦藏は商人風に髪を角刈にしてゐた。

この時メレルは村田幸一郎に今一度元のやうに共同生活をしないかと話したが、村田幸一郎は即答しないで別れたが、たうとうその月の二十七日に大阪を引揚げてメレルの所に歸つて來た。それは文學士半分工學士半分のメレルが、その半分の工學士を復活して建築事業を始めたからである。

その年の春から京都基督教青年會館の建築が始まつた。それはドイツ人のデルランといふ建築家が東京で設計したものであるが、専門家の監督が必要なので、メレルを毎週三日間の勤務といふ條件で月百圓で其の監督に頼んだのである。で、メレルは村田幸一郎と二人で一週三日間京都に出張することにし、青年會館の一室に建築事務所を設けて村田幸一郎に事務を執らせてゐた。

秋の末頃三井物産株式會社神戸支店は店員の慰勞會を京都嵐山に開いた。悦藏も招待されて來たが、その歸り途に基督教青年會館の建築工場を訪問すると、メレルはセメントの粉末や壁土や木屑や

煉瓦の破片の中を縦横にとび廻つて土工達と愉快さうに片言まじりの日本語で戯言を言つてゐた。三條堺町の青年會館假事務室に行くと村田幸一郎が漆のやうな八字鬚を生やして事務を執つてゐたが、どうぢや、いい加減に神戸を切り上げてこつちへ來ないか。と、勧めたので彼はその友情に尠からず動かされたのであつた。

その以前から悦藏は神戸の基督教青年會館の夜學校で英語を教へてゐたが、或日メレルが訪ねて來たので、自分の考へてゐることを率直に話した。それは基督教の傳道には平信徒の傳道者が必要だと思ふから、自分はその方面に進みたい。それについては一通り神學を學びたい。と、いふのであつた。メレルも其の説に賛成した。

その頃大橋五男は東京靈南坂教會の副牧師をやめて、郷里但馬の豊岡で病を養つてゐると聞いたので、そこへ長文の手紙を書いて、自分は今三井物産株式會社で優遇されてゐる。近き將來に支那の支店詰にしてくれるかも知れないが、他人に使はれてゐては、自分の思ふ通りに傳道ができないから、いつそ思ひ切つて元の八幡基督教青年會に歸つて傳道したいと思ふが、まだ其の決心がつかかねてゐる。どうすればよいだらう。と、問ひ合せると、間もなく大橋五男から、近江傳道の事は貴い事業である。若い君がその任に當らうとするのは唯敬意を表する外なし。しかし事の成る成らぬは神の御心にあるから、君の信實なる祈禱によつてのみこれを決すべきである。といふ返事が來た。

祈禱によつてのみ決すべきだといふ大橋の言葉は悦藏の肺腑を衝いた。そして祈りに祈つて、三井物産株式會社を辭職して八幡町へ歸る事を母に相談すると、母もそれがよからう。と、言つた。叔父の金之介も快く承諾してくれたので、再び手荷物をまとめて八幡町へ歸つて來たのは明治四十二年の十二月十八日であつた。

その頃メルルは常に言つてゐた。世界中で一番美しい風景と人情をもつ國は此の日本である。その日本の中の近江は自分の骨を埋める地である。その近江の八幡町は世界の中心だ。自分は此所から一直線に天國へ昇るのだ。

その世界の中心へ悦藏も戻つて來たのである。そして如何なる困難が襲つて來ようとも二度と此の地を離れないといふ決心をしたのであつた。

七、留 守 居

明治四十三年

明治四十三年に悦藏は二十一歳の一月を迎へた。その十七日に嘗て商業學校で英語を教へてもらつた宮本文次郎は遊學を終へて外國から歸つて來た。そして彼は文部省の檢定試験を受けて中等教員の英語科教員の免許狀を得て、先に滋賀縣立商業學校長であつた安場禎次郎の奉職してゐる大阪の大倉

商業學校の英語科教諭となつたのである。

一月二十三日に悦藏はメルルと二人で神戸に行つて領事館でメルルの米國へ行く旅行免狀の下附を願ひ、翌二十四日の朝から二人は小山吉三郎の故郷滋賀縣坂田郡島居本に行つてその兩親に面談した。それは小山吉三郎と其の兩親との間に起つた或る問題の解決の爲であつた。小山吉三郎は頭腦もよく殊に英語に上手であつたから、よくメルルの通譯をした。

明治三十八年四月一日にメルルの説教を通譯するため一緒に彦根教會に行つた時、禁酒禁煙の決心を告白した上、四月二十三日に古長清丸と一緒に受洗する筈であつたが、兩親が承諾しないので洗禮を中止したが、とうとう六月四日に願が叶つて受洗したのであつた。彼は魚屋町の七人組の一人で、悦藏と共に最初から天井裏の二階に住んでゐたのである。

けれども、どうしたものか、其の後間もなく學校を中途退學して北海道の方へ行つてゐたが、悦藏が八幡町を去つて神戸へ行つたあとへ來てメルルの通譯をしたり、後には村田幸一郎と一緒に建築事務を手傳つてゐたりしたが、いつのまにか信仰を失つて酒に近寄つたので、自責の念からメルルの事務所を離れて船員となつてゐたのであるが、やつぱり元の純潔生活が戀しくなつて、メルルの許へ歸らうと決心したが、そこにゐる悦藏や村田幸一郎に會はせる顔がないので、自殺しようと思つてその別れの電報をメルルに打つたところ、メルルの返信を見て悟る所があつたと見え、悦藏とメルルに

是非會ひたいと言つて來たので、二人は早速面會に行き、兩親を説いて其の勘當を免してもらつたのである。

悦藏は小山吉三郎の兩親と語つてゐるうちに、人間が他人の爲に憂ひ悲み苦しむことの貴い使命であることをつくづく感じて、その事をメレルに語ると、メレルは言つた。社會を清くし人を純潔に健康にしようと思へば三つの事を實行しなければならぬ。第一は人間の魂を救ふ宗教の傳道である。第二は農業を盛にして食糧の増産を計ることである。第三は病院を建てて病氣の蔓延を防ぐことである。自分はその三つを此の近江の湖畔で實行したい。それは大きな夢ではあらうが、その夢は必ず實現する。と。その話をきいた悦藏もその夢の實現に協力することをメレルに誓つたのであつた。

一月二十七日に悦藏はメレルと一緒に兵庫に行つた。そしてメレルは露國通過でベルリンまで行く旅行券をもらひ、その晩は悦藏の家に宿つたのである。

一月二十九日は、メレルが滿五年前に始めて日本の地を踏んだ日である。その記念すべき日に彼は青年會員や教會員たち三十餘人に見送られて八幡驛から敦賀港に向つた。郷里の兩親を見舞ひ大學時代の同窓生達を訪問する爲である。メレルにいろいろの厄介をかけた小山吉三郎はメレルを彦根まで見送り、悦藏は敦賀までついて行つた。

約束の船はロシアの義勇艦隊の一であるベンサ號であつた。行つてみると二等船客はメレルたつた

一人である、二人はあてがはれた船室に入つて、そこで自分達の夢の實現を心から祈つて別れた。

それから約一年間悦藏は青年會館でたつた一人留守番をしてゐたのであるが、その留守居中にいろんな事件が突發した。生活費としてメレルが残して置いてくれた金が無くなつたので、兵庫の母に相談して月月の生活費を送つてもらふことにした。

三月十八日に西幸次郎は京都花園村で永眠したが、その葬儀は八幡教會で執行した。長い間八幡教會の執事として困難時代を乗り切つて來た篤信な會員を失つたことは教會の大きな打撃であつた。

五月三十日に大津聯隊區徴兵署から徴兵検査の結果悦藏は兵役を免ぜられた。當時の彼は體格が虚弱であつたらしい。

十一月廿三日にメレルが横濱へ着くといふので、悦藏が迎へに行つてみるとコルネル大學出のチェーピンといふ若い工學士を一人建築技師としてつれて來たのだといつて彼に紹介した。そこで三人は一旦東京へ行つて日本宿に泊り、市内見物をして二十五日の夕方八幡へ歸つて來た。

メレルは自分の留守中に西幸次郎の亡くなつた事を聞いて非常に悲しんだ。今の青年會館も西幸次郎の助力がなかつたならば、まだ建設の運びに至らなかつたかも知れないからである。

その時西幸次郎の弟千貫久次郎が病氣だつたので、悦藏とメレルの二人が見舞ひに行つてみると、總てを神に一任して安らかに病を養つてゐた。しかし十二月十九日に彼は實に立派な信仰を懐いて天

國に旅立つた。廿一日葬式の時その棺を覆うてゐた黒絹に白十字を抜いた棺覆は此、春實兄西幸次郎の棺を覆うたものであつた。一年間に八幡教會は忠信なる二人の兄弟を失つたのである。

この時悦藏は今までの教會が歩んでゐた途以外の傳道法を考へて、先づ合名會社を組織することに、母から金九百圓をもらつて來て、之れを資本金にしてメレルとチエーピンは勞力出資で、合計二千六百圓の合名會社を設立して建築事業をはじめたのである。

そこへ村田幸一郎が入つて來たので、悦藏・メレル・幸一郎の三人が中心となつて近江基督教傳道團といふのを設立してゐた。其の綱領は、近江で教派に關係なく基督教傳道をなすこと。他の傳道區域を侵さぬ。農村・漁村の傳道。傳道者の養成。禁酒禁煙の實行。などであつた。

村田幸一郎はメレルが故國へ歸つたあとで、同志社の教授ダニング博士に日本語を教へたり、關工務店で建築設計と製圖に従事してゐたり、伊勢の津市に聖公會の教會堂その他四棟の建築をするので、其の現場主任として働いてゐたが、工事が終ると間もなくメレルが歸つて來たので、また八幡へ歸つて來て、悦藏らと事業を共にするやうになつたのである。

八、野田傳道

大橋五男の斡旋で青年會館の料理番にしてもらつた浦谷貞吉は、その後眞面目になつて働いたので、十圓の月給が十二圓になり十五圓になつた。そして生來始めて四十圓の貯金が出来たと言つて、大橋五男夫妻を會館の一室に招いて手料理の御馳走をした上感謝の祈りを捧げてもらつた。

その後彼は時時郷里の野田へ歸つたが、どこへ行つても誰も相手になつてくれない。豫言者なら故郷では容れられないのだ。ましてや放蕩者の彼が故郷で歓迎せられる筈はない。そこで彼は従弟の浦谷泰次郎の所へ行つて、わしは今八幡町の爲心町中一番地にゐるから遊びに來てくれ。と、言つたので、その後浦谷泰次郎はあの放蕩者が八幡町で何をしてゐるのだらうといふ好奇心に驅られて尋ねてみると、基督教青年會といふ看板のかかつた家に住んでゐる。是非あがれといふので座敷へ通ると、晝飯をこしらへて食べよと言ふ。何だか様子が違ふやうに思ひながら箸を取らうとすると、感謝をするといふ。何の事やらわからないが黙つて聞いたあとで食事をすまずと、近いうち海老名彈正といふえらい人が來るから、是非その話を聞きに來いといふので、浦谷泰次郎は其の後友人と三人づれで話をききに來て、これは宗教ぢや、あの海老名といふ人は坊さんだらうか。と、いふやうな噂をしながら歸つたが、またしばらくして浦谷貞吉からえらい先生の話があるから來いといふ端書が來たので行つてみて、はじめてそれがヤソだといふ事がわかつた。ヤソの話が聞かされたのかといつて、逃げるやうにして歸つて、二度と浦谷貞吉の所へは行くまいと思つてゐる所へ、明治四十三年の五月の末に

その浦谷貞吉が、悦藏・高畑爲次郎・宮森武次郎ら六人づれで野田へやつて来た。そして浦谷泰次郎の所へ泊めてくれと言つた。わけをきくと、京都四塚の醬油屋の息子で米原の青年會館で働いてゐる高畑爲次郎が結婚式をあげたので、其の祝ひのために六人が鯛で魚をとりに行つて歸らうとする時俄に暴風に會つて二十町ばかり向ふの佐波江の濱へ流れ着いたのだが、もう日暮に近いから一同を泊めてほしいといふのである。その高畑爲次郎は馬場の基督教青年會で、藤原鐵長らと熱心に傳道してゐた青年であり、宮森武次郎は大橋五男が東京へ去つたあとへ來てゐる八幡教會の傳道師であつたのである。

浦谷泰次郎は貞吉に對つて、お前が心を改めて賢くなつたから、あんな立派な人達が交際してくれるのだ。よし、泊めてやらう。と、言つて六人を泊めることにした。すると浦谷貞吉は、ええ話を聞かせてもらふのぢや。と、言つて近所隣の人たち二十人程つれて來たので、宮森武次郎は一場の精神講話をした。それが、お寺の坊さんの説教しか聞いた事の無い聽衆に非常に清新な感じを與へたと見え、みんな感激して、容易に歸らうとしなかつた。それを見た浦谷貞吉は今一晩泊めてもらつて話を聞かせてもらへ。と、言つたが、さういふわけには行かない。言つた浦谷泰次郎は、その翌日自分で船を漕いで六人を八幡町へ送り歸したが、六人ともヤツだと聞いて驚いたのであつた。

家に歸つて父に、昨晚の話はヤツの話であつたといふと、あの放蕩者の貞吉が賢くなつた教なら

ば、ヤツでも何でもよいと、浦谷泰次郎の父は言つた。甥の放蕩には餘程懲り懲りしてゐたらしい。

六月廿四日から二六日まで三日間は舊曆五月の田植休みだったので、廿三日に浦谷貞吉が野田へ歸つて來て従弟の浦谷泰次郎に、八幡から吉田悦藏さんと宮森武次郎さんをつれて來て、耶穌教をはつきりさせて話してもらふつもりだが、宿と講演會場を頼む。と、言つた。

浦谷泰次郎は、あのやさしい吉田さんといふのが耶穌で美しい鬚のあるのが坊さんか。と、きいた。すると浦谷貞吉は、いや二人とも耶穌ぢや。その耶穌を今度はむき出しにして話してもらふんぢや。と、りきんだ。浦谷泰次郎は何となく心配になつて、貞吉お前きつと眞人間になつてゐるのか。と、念を押した。浦谷貞吉は眞顔になつて、わしは今まで親類の家へ來る度に羽織や縮緬の兵兒帶を引つかけて行つたり、阿彌陀さまを引き出して豌豆畑へ隠したり、とんでもない事ばかりしてゐたんぢやが、今度といふ今度は耶穌教に救つてもらはるとるんぢや。安心してくれ。と、いふので、では、家を會場に貸さう。先生方も泊めて上げよう。と、いつて、その翌晩から三日間續けて講演會をすることにして、悦藏・高畑爲次郎・宮森武次郎三人を野田に迎へることにした。

六月二十四日の朝から浦谷貞吉は村の要所要所へびらを二十枚貼り、浦谷泰次郎の家の表に戸びらの大看板を立てるといふ大騒ぎ。貞さんといふことかい。何といふ事をしやはるんぢやい……と、近所隣の人たちは不思議がつて見てゐた。

八幡町から繰りこんで来た一行は蓄音機をもつて来た。まだ發音機といふ時代であつたから、村の人たちは先づそれを聞くために集つて来た。家の表は人で埋められた。二日目には昨晩外に立つてゐた連中が座敷へ上り込んだ。二日目の晩に蓄音機をかけたが、針がいたんだので、悦藏は三里の路を自轉車で八幡まで四十分で往復して針を取つて来た。三日目の晩は屋内も表庭も聴衆で一杯であつた。この時の三日間の説教で悦藏は實に善い印象を野田の村民に與へたのであつた。

三日目の説教がすんで歸る時、悦藏は浦谷泰次郎にむかつて、吾吾はこの野田に基督教を廣める決心をしたか、これから時時来る。そして、やり切るが宜しいか。と、言つたので、浦谷泰次郎も、やつてもらひませう。と、答へて置いた。

間もなく孟蘭盆會が来た。佛教の盛な近江の地である。野田近村一帯は七月の十三日に家毎で法事をして、十四日から十七日までは總休みである。その時先の八幡教會傳道師大橋五男は富山縣滑川教會に赴任してゐたが、休暇を得て八幡町へ遊びに来て浦谷貞吉を訪問すると、浦谷貞吉は、亡父彌左衛門の二十七回忌の法事をしたいが、自分は今基督教を信じてゐる。どうすればよからうか。と、問うた。すると大橋五男は、それは基督教でやれ。わしがその法事をして上げよう。と、言つたので、浦谷貞吉は野田へとんで行つて従弟の浦谷泰次郎に相談すると、彌左衛門の二十七回忌を基督教でやつては、一里向ふの小濱の和尚さんに工合が悪い。今年だけは寺でやつてはどうだ。と言つた。けれ

ども相談の結果とうとう決行することになつて、大橋五男は依頼すると、大橋五男は悦藏と高畑爲次郎と宮森武次郎との三人をつれて野田へ乗り込んで行つた。

耶穌教で年忌をするといふので、親戚は言ふまでもなく村の人達は第一夜に二百人以上集つた。四人の話は悉く村人を感じせしめたと見え、翌晩は更に多くの聴衆があつて、會場の前の豆畑がめちやめちやに踏みじられた。三晩目には更に多數の聴衆が来たので、浦谷貞吉は會衆に向つて、自分の不注意から他人様の豆畑を踏荒したことを陳謝しようとする、佐々木重吉が起つて、そんな言ひわけをする必要はない。あんな有りがたい話を聞かせてもらふ爲に、豆畑の一畝や二畝どうなつてもよいではないか。と、言つた。

佐々木重吉は此の村の俠客ともいふべき傳法肌の男なのであつた。

四晩目の十七日の夜は四百人も詰めかけて来て熱心に聞いた。中には、ヤソ教の説教やなあ、あの八幡の先生達があんまり男美人やでな、その顔を見せてもらふのがありがたい。と、言つて毎晩缺かさず来た老人もあつた。一人の金持の老婆の如きは、八幡からござる人たちは何とあんなに奇麗な人たちばかりぢやらう。と、言つて悦藏を娘婿に欲しいから世話をしてくれないか。と、浦谷泰次郎に頼んだのであつた。男美人と言はれたのは外國歸りの宮森武次郎と悦藏とを指したのである。

九月十六日は兵主神社の秋祭りである。大橋五男・武田猪平・宮森武次郎・金子卯吉・吉田悦藏の

五人で路傍説教に出かけて行つた。神社の近くに競馬場があつて、やがて競馬が始まらうといふ時、その傍の小高い山の上に登つた五人は聲張り上げて、さまよへる者よ立返りて……の讃美歌を歌つたので、數百の群集は五人を圍んで不思議さうに其の行動を注視しはじめた。小高い山は日露戦争の終つた祝に二百三高地に擬して造つた山である。

讃美歌の終つたあとで、白夢金子卯吉は讃美歌の書物を手にして聴衆をさしまねきながら、さまよへる者よ、ああさまよへる者よ、よくお聴きなさい……と叫んだ。群衆は呆れ顔で聽いてゐた。

その日淨土宗の兵主部會があつて、村の寺院に數名の僧侶が集つてゐたが、兵主神社の境内で基督教の説教が始つたときいて、望月といふ僧侶が掛合に来ることになつた。神主が來ないで僧侶が來るといふのである。

その噂をきいた悦藏は非常に心配して、掛合に來た僧侶に、野田の浦谷泰次郎の宅まで来てくれ、どんな質問にでも應答するからと言つて歸らせた。そして五人は野田に歸つて待つてゐたが、とうとう望月は來なかつた。望月は俠客肌の生命知らずの僧侶だといふ噂を聞いてゐたから悦藏は心配したのである。

かうした放蕩息子の浦谷貞吉によつて、野田に基督教の種は蒔かれたが、その種は礮地にばかり落ちなかつた。

その晩悦藏らは浦谷泰次郎の家で説教會を開いたあとで、これから月に二三回傳道に來るが、この家の表の二室續きの離れ座敷を貸さないか。と、浦谷泰次郎に話すと、私は異存ないが、父は檀那寺に對して體裁が悪いとか在所の者がやかましく言ふとか言つて困ると言つた。けれども悦藏は強く談判した結果、遂に表の離座敷を借りることにして、度々傳道に出かけて行つたが、もう村の人たちも、また基督教だと言つて聽きに來るやうになつた。

十二月の中頃に悦藏はメレルをつれて野田へ説教に行つた。メレルが英語で話し、悦藏が流暢な辯舌で通譯するのを聞いた村人たちは、悦藏のやうな若い者にあんな英語がわかる筈はない。多分あれはよい加減に自分の思惑を話すのであらう。などと囁き合つてゐた程であつた。

説教のあとで、悦藏は浦谷泰次郎を捉へて言つた。このくらゐ話してもまだ基督教がわからんか。わかりました誠にありがたい教だと思ひます。それなら洗禮を受けて信者になつたらどうぢや。洗禮を受けたなら私の好きな淨瑠璃が語られないでせう。僕の父も淨瑠璃を語つた、朝顔日記の深雪は思ひ迫つて小石を袂に入れて死なうとしたではないか、信仰といふものもそこまで行かなければ本當ではない、淨瑠璃をやめるくらゐは何でもないぢやないか。それでもこれだけはやめられませんか。神様を信仰する第一の條件はこれだけはやめられぬといふ悪い癖をきつぱり捨ててしまふことぢや。一日も早く淨瑠璃をやめ酒をやめ煙草をやめて立派な有用な人間にならうではないか。しかし、洗禮を受

けるといふ事は佐々木重吉と木村重吉に相談しなければ返答が出来ません。では、その二人を呼んで来てくれ。

そんな問答の末、佐々木重吉と木村重吉を連れて来たので、悦藏はその二人にも洗禮を受けて生れ變つた人になるやうに勧めたが、佐々木重吉は博奕はやめられないと言ひ、木村重吉は鶏の喧嘩で勝負事をするのがやめられんと言つたので、悦藏は強く二人に改心を説きつけた。そして、わしは君達の胸倉をとらへたが最後、信者にするまで離さんぞ、正月の十日に来て諮問會といふのをやるから、それまでよく考へて居てくれ。と、言つて八幡町へ歸つて来た。そして翌明治四十四年の一月十日に野田へ行くと、木村重吉は来たが浦谷泰次郎の顔が見えないので浦谷貞吉に案内させて、あちらこちらを探し廻ると、泰次郎は友人の家に頼母子講があるので、その客の中に交つて隠れてゐた。悦藏はそれを見つけて引つ張つて来て、また説教すると、二人ともいよいよ決心して洗禮を受ける約束をした。一月十七日に悦藏・宮森武次郎らが野田へ行つて、野田教會最初の信者として洗禮を授けたのが、浦谷泰次郎・木村重吉の二人であつた。洗禮のあとで木村重吉は、清く正しい人にして下さつて有りがたうございます……と、言つて涙ぐんで頭をさげた。おめでたう。と、言つた悦藏も涙ぐんでゐた。

其の後野田で引續いて第二回三回の洗禮式があつて佐々木重吉も洗禮を受け、小森祐吉外數名の受

洗者が出たのであつた。

九、第一回世界一周旅行

明治四十五年より大正三年まで

明治四十四年は悦藏二十二歳の年であつた。故郷から再び世界の中心だといふ八幡町へ歸つて来たメレルは、京都の基督教青年會館・廣島女學校・東京基督教女子青年會館などを設計監督したので建築家としての名が知れ渡り、悦藏らの設立した合名會社の事業がそろそろ忙しくなつて来た。

笛を吹きオルガンを弾き繪を描く悦藏は、萬事が器用でメレルの設計製圖の手傳ひをしたが、此の頃から建築は村田幸一郎、傳道は悦藏といふやうに自ら受持を異にする風に見えてゐた。

六月になつて建築事務所も新しく建て手の廻りかねる程の仕事を引受けるやうになつたので、悦藏は兵庫にゐる母の所へ、しばらく八幡町に来て住んでみないかと言ひやつた。それは建築事務所の側に八疊・三疊・臺所の小じんまりした家を一軒建てたからであつた。

悦藏の手紙を見た母のりうは間もなく女中をつれて八幡町に來た。それは二三箇月遊びに來たので定住の心算はなかつたらしい。それでも床の間の横にある押入の中に小さい佛壇を据ゑて、毎朝鉦を

敲いて念佛を唱へ茶や花を供へてゐた。建築設計部では村田幸一郎はじめ、メレルや悦藏たちが、朝の八時に集つて先づ讚美祈禱の後に各自の仕事に従事したのであるが、りうの念佛の鉦はいつもそれよりも一時間程早かつた。

これより以前にメレルは度度、りうに八幡町へ来て悦藏と共に暮すやう勸告したが、煙草をやめられないのと、佛前で唱名する習慣を守りたいのとで、容易にうんと言はなかつたが、娘の松子に死なれて寂しく暮してゐた彼女は、悦藏から、煙草と佛様のことは一切干渉しないといふ言質を取つて八幡町へ来たのである。その頃弟の徳藏は京都の同志社中學に通つてゐた。

悦藏が二十三歳になつた明治四十五年の三月にりうは佛壇を兵庫の本宅に送り返し、位牌を寺に納めてしまつた。そして三月十五日の左義長祭の日青年會館の二階の一室で武田猪平牧師から洗禮を受けたのであつた。

お前が基督教を研究して其の奥の院まで行つたなら、きつと佛教に歸つて来る。お母さんが法然上人の教が本當にわかつたなら、きつと基督教を信じるやうになる。そんな會話をしてから七年目に彼女は洗禮を受けたのである。悦藏は本當に嬉しかつたことであらう。

それから間もなく、降り続く雨に青年會館の屋根が漏れはじめた。バケツよ金盞よと騒いでゐる所へ浦谷貞吉が一通の電報を受取つて持つて來た。披いてみると深い同情者から青年會のために金二千

圓を贈ると書いてあつた。

悦藏はその二千圓で地所を買はうと發議したが、さて八幡町では基督教徒に土地を賣つて呉れまいといふ心配が先に立つ。けれども血氣盛んな悦藏は言つた。新工夫で買ひませう。東西屋を頼んで町の辻辻で、土地買ひまあす、土地を賣る人はありませんか。と、言はせて見ようぢやありませんか。

村田幸一郎もメレルも不賛成を唱へなかつたので、悦藏はその口上の文案を作つて、海老平といふ廣告屋に渡した。

空前絶後ともいふべき口上が狭い町の辻辻から町中に響き渡つた結果、池田町の自轉車練習場の廣場一千坪を手に入れたのであつた。

七月三日に安土に基督教青年會が出來て、その發會式があるので、悦藏は村田幸一郎・武田猪平・メレルの四人づれで出席し、メレルの講演を通譯した。

此の集會に建築會社に働いてゐた深尾清三郎が岡田金一郎を引つ張つて來た。岡田金一郎はこれまで基督教の話の一度も聞いたことがなかつた。しかし此の日の講演を聽いて、織田信長以來の出來事だと驚いて、遂に熱心な信者となり、後には佛教の本山へ離壇届を出し、佛壇を賣つて自轉車と蓄音機とを買ひ、安土を中心に十二箇町村を巡廻傳道したのであつた。

七月十五日付で雑誌湖畔之聲第一號を出した。その發刊の辭の中に、我は聲である。湖畔に叫ぶ聲

である、我は我が同胞の不安なる生涯に大なる福音を宣傳せんとする者であつて、愛國の熱情に驅られ、愛神愛人の旗幟を立て世の總ての暗黒と戦はんとするものである……云云の文句があつた。同人はメレル・默雷武田猪平・紫電村田幸一郎・吉田悦藏の四人で、悦藏は靈峰の筆名で想林と題する隨筆と、フランスのドウデエの小さき賣國奴と題す小説の翻譯を掲げた。これは近江基督傳道團の機關紙として發行されたもので、爾來三十年間彼は此の雜誌によつて自己の意志表示をなしたのであつた。

此の雜誌の出た七月十五日に、村田幸一郎は淺間山へ登つた。輕井澤でメレルが、死にたいなら登れ。と、言つて止めたのを振りきつて、死にたいから登るのだ。と廣言を吐いて登山したが、雨の爲に中腹から引き返し、も一度引返して昇つてみたが、とうとう頂上へ登り切れず失敗したのであつた。

七月二十五日に悦藏は國府津から湯本まで電車で行つて、そこから三里半の山路を箱根まで歩いて、翌日は蘆の湖に舟を浮べて遊んだが、舟の中で數百年に此の湖水を沼津附近に導く爲に疎水を成就した無名の兄弟の話をきいて、自分も此の兄弟のやうに名利を超越して社會の爲に後世に遺すべき事を成し遂げたいと思つて、其の感想を書いて湖聲社に送つた。

それ以前から彼は世界一周の旅行をしたいと願つてゐたが、今のうちにこれを決行したいと思つて母りうに相談すると、旅費はどれくらゐ必要か。と、問はれ、千五六百圓もあればよいだらうと答へると、それくらゐなら。と、いつて調達してくれた。

皇紀二千五百七十二年七月三十日以後を大正元年といふ。その大正元年九月三十日に悦藏は敦賀港にゐた。それは三年前にメレルを送つて來た時と同じ目的でロシアの義勇艦隊ポルタワ號に乗つて歐洲に行かんが爲であつた。彼は母からもらつた千六百圓のうちで、ベルリンまでの船車賃六百圓を支拂つた残りの千圓を神戸の支那人錢莊で各國の金貨に兩替してもらひ、防彈チヨツキのやうなものを造つてその中に縫ひ込んだのを着てゐた。

幸に日本海の浪は靜であつた。九月三十日に敦賀の港を離れたポルタワ號は十月二日に浦鹽港に着き、ハルビンで先頃近江八幡を訪ねた三人の外國婦人と落合つて、ニューヨークまで同行したのであつた。その時彼は萬國寢臺急行列車に乗つて果しもなく廣いシベリヤの平原を三晝夜走つて、英本土をそつくり其のまま認めることの出來るといふ大きなバイカル湖を見て、始めて琵琶湖が世界一の湖水でないことを知り、北海道十勝の平原がシベリヤ平原よりも遙に狭いことを痛感した。

車内には、イギリス・アメリカ・ドイツ・ロシア・イタリア・スイス・ポウランド・支那・オランダ・ハンガリー・印度などの各國人がゐて、旅は道づれ世は情の俚言の如く、いつしか知つてゐる限りの國語で話し合ふ。

或日のこと彼は退屈しのぎに廊下を漫歩してゐると、車窓から廣原の寫生をしてゐる婦人の後姿を見て近づいて行くと、婦人はふと後を振向いて驚いたやうな顔付をした。彼は思はず、あ。と、いつ

て其の顔を覗き込んだ。考へてみれば三箇月前に日光を見に行つて陽明門の前で門を寫生してゐた婦人の繪を見たことがある。繪の好きな彼は畫家の顔よりも繪の方をよく見たのであつた。今日の前に見る繪は陽明門を描いてゐた畫家の繪に相違ない。そこで話しかけてみると果してさうであつた。モスコウでクレムリン宮を見、トレチコフ繪畫陳列場で悽慘極りなき戰爭畫を見たりした後その婦人畫家と別れて、彼女は南歐の遊覽者となり彼は北歐の旅行者となつたのであつた。

間もなく彼はベテルスブルグに入つた。ネヴァ河の濘にある人口百五十萬の此の都で五日間滞在した彼は、遂に日の光を仰がないで、室數七百八十二の冬宮を見、博物館になつてゐるモナストリイ宮を見、カザン寺を見、帝室劇場に行つて、時の陸軍大臣スホムリイノフの偉容を見たりして、ニコライ男爵を訪問した。男爵は明治四十年に東京で開會せられた萬國學生基督教青年會大會に出席した青年紳士である。彼はその時ニコライ男爵が、罪に大小はない。罪は悉く大きい。大きな石は人を殺すに十分であるが、小さい石は人に害を與へないかといふと、決してさうではない。目に見えないやうな小さい砂は人の眼をつぶすに十分である。と、いふ講演をしたのを聞いて非常に感じたので、すぐ面會して名刺をもらつてゐたのであつた。

皇紀二千五百七十二年の大正元年十一月五日、彼はベテルスブルグを離れてベルリンさして旅立つた。

ベルリンに着いてみると、街路樹のリンデンの葉が黄ばんで、ばさり・ばさりと靜かな音を立てながら舗道に落ちつつあつた。彼は唯あるベンジオンを見つけてそこに宿り込み翌日有名なウンテル・デン・リンデンを見に行くと向ふから來た一隊の行列、それは皇帝ウイヘルム二世の通過であつた。凱旋門を見、美術館を見、六年前に建てたのだといふ世界一の百貨店ウエルトハイムを見たりしたあとで、公園の中に入つて休んでゐると、立並ぶ大理石像があまり美しいので、それを見に行かうとすると、後から聲をかけた者がある。ふり返つてみるとモスコウで別れた婦人畫家であつた。世間は廣いやうで狭いものである。

それから彼はドレスデン、コロンを經てパリに行きロンドンに行つて一通りの見物をすませ、サザンプトンからホワイトスタア會社の四萬トンの巨船オセアニツク號に乗つて、大西洋を横ぎつてニューヨークに着いたのはクリスマス前であつた。彼は上陸すると直ぐレキシントン街の聖書學校八階の一室に入つた。學校の校長はホワイト博士で前年輕井澤で其の聖書講義を聴いて、是非此の博士の經營する學校へ入學したいと思つてゐた其の希望が今叶つたのである。

やがてクリスマスの日が巡つて來た。彼が基督教の空氣に觸れ初めてから八回目のクリスマスである。しかもそのクリスマスが故國を遙か海の彼方にした英國で迎へるのである。彼にはまだ所屬の教會がない。で、近くの大きなホテルで催される祝會に行くことにした。

行つてみると食堂一杯の人であつた。彼は何気なく一つの椅子を選んで掛けると、おう。と、いふ聲がすぐ前の椅子から聞えて来た。氣づいてみると例の婦人畫家であつた。日光陽明門・シペリヤ鐵道・ベルリンのウンテル・デン・リンデン・そしてニュウヨウク、本當に旅は道づれである。耻をかきずてにすべきでないことを彼はしみじみ感じたものである。

大正二年の一月になつて學校の授業が始まつた。出席して勉強してゐるうちに、海外旅行者の必ず一度は経験する神經衰弱症に襲はれ、ハドリン川の上流にあるキヤアツキルのスタンホウドに行つて三箇月間異國の春を存分楽しんで健康を恢復した上、大正二年の夏の初めにニュウイングランド州のノウス・フィールドの基督教青年會の夏期學校に出席すると、青年會本部から在米日本人留學生會を組織したいから其の幹事になつてほしいと申込まれたので、會長モット博士に面會して其の事情を聞き、その要求を容れた。そこで彼は萬國基督教青年會旅行幹事といふ肩書付の名刺を作つて米國中の各大學を巡回の上總長たちに面會して、日本へ歸つた後、日本の有力なる位置に就く日本の留學生を特に尊重して教育するやうに談判することになつたのである。青年會と言へば直にジョン・アール・モットを想ひ出す程有名なモット博士の紹介状には、日本の青年吉田悦藏君を紹介します。彼の言はんとする所は私の言はんとする所であり、彼に親切なるは私に親切にして下さることである。と、書いてあつた。

そこで彼は米國中三十八の有力な大學を歴訪し總長に會ひ理事會・幹事會・教授會に出席して、日本及び日本留學生に對する米國人の認識を深める爲に滿腔の努力を拂つたのであつた。

これより先彼は湖畔の聲を編輯してゐる同人からメレルは又た病氣になつて、故郷に歸つて養生することになつた。といふ手紙を受取つた。程なくコロラド州のグレンウッド・スプリングスといふ溫泉場から發送したメレルの手紙を受取つた。

大正二年五月の或日であつた。彼はベンシルベニア・ステーションに古ぼけた外套に田舎者らしい洋服を着て麥藁帽子を被つたメレルを迎へて涙ながらの握手をした。メレルはニュウヨウクの名醫に診察を受ける爲に出て来たのである。ところが診察の結果郷里に歸つて養生するがよいといふので、悦藏もいつしよにコロラドの溫泉地へ行つて、湖水になつてゐる溫泉の中で泳いだり、馬に跨つて遠乗を試みたり、釣竿肩げて深緑の淵に鱒を釣りに行つたり、獵銃を提げて林の中で實彈射撃をしたりして楽しい初夏の日を過した。

八月にはカンザスシティに學生義勇團の大會があるので、悦藏はメレルに別れてひとり其の大會に出席してみると、四千人の各國の學生が集つて、十日間の大集會が続けられた。後に滋賀縣で農民傳道をした矢部喜好も此の會合に来てゐて始めて悦藏に會つたのである。その時この集會に出席してゐた日本人學生の六人のために非常な好意を示した老人があつた。その名をエ・エ・ハイドといふ。

悦藏は内地に居る時からこの篤信な老人のことに就いて詳しく聞いてゐたし、この老人もメレルやその同志達の近江に於ける働きに特別の興味を持つてゐたのであるが、悦藏はメレルの紹介状を持つて今日初めて會つたのであつた。ハイド老人は早速メレルは近頃どうしてゐるか。と、聞かれたので、今病氣保養のために故郷へ歸つてゐる。と、言ふと、では私の別荘へ二人で遊びに来ないか。と、言つた。

で、大會の果てたあとで海拔一萬尺のエステスパークの別荘に行き、その丸木小屋の應接室で毎日毎晩老人からいろいろ面白い話をきいた。その話の中にこんな話があつた。

明治十七八年頃、彼は財界不況の爲に悉く財産を失つてしまつた。彼は十人の家族を抱へて恐慌の颯風に追はれながら住みなれた家を出て、田舎の袖小屋に入つたのであつた。屋根は柿葺、壁は荒削の板張、間仕切りは馬糞紙といふ粗末な家に住み、明治二十二年には友人二人と協同して設立した小資本のユツカ(Yucca)（石鹼）會社に投資して、一家十人が僅に露命を繋いでゐた。後この石鹼會社は彼自身が經營することになつたが家族全體を養ふに足る収益を擧げることが出来なかつた。その頃このユツカ會社は副業として咳止め薬を製造してゐたが、その主要成分は薄荷であつた。彼はここから思ひついて家庭用外傷藥製造に着手した。そのため多數の醫師、藥劑師、化學者等の意見を徴し、自ら熱心に種々の實驗を行つた。この藥品の成分の配合、色合や、皮膚に與へる刺激が快適であ

るやうに特別な考慮が運らされた。そこで明治三十九年にユツカ會社はメンソレータム會社と改名され彼とその六人の息子が最初の社員となつた。その藥の材料として特に日本特産の薄荷と樟腦を用ひ又ベンシルヴェニア産のワセリンを使用した。そこで其の藥の名をメンソレータム（メンソール薄荷とベトローレタム、即ちワセリンの合成語）と名付けて賣り出すと、羽が生えて飛ぶやうに賣れる。實によく賣れる。そこで彼は初め此の天與の藥品の賣上純益の十分の一を、後にはその十分の九を社會事業と福音宣傳費に寄附して來たのであつた。

滞在中、彼等は近江に於ける傳道に就いていろいろ語り合つた。傳道のみではなく、彼らが傳道のため始めた建築設計の事業や又、湖畔傳道のために發動機船の必要なことなどに就いて。……

數日の後二人はエステスパークを去らうとする時、ハイド老人は言つた。私は日本の材料でメンソレータムを造つて、それを賣つてゐるのだから、この販賣權を讓つて上げよう。その純益金を社會事業と福音宣傳費に使つておくれ。それから未だ見ぬ美しい琵琶湖に浮べる十五六噸の發動機船を一艘寄附しよう。その船に乗つて湖畔の傳道をしておくれ。……

ハイド老人に別れた二人は十月の差入りにニュウヨウクへ來た。町に着いた時メレルは咽喉部が痛いと言つた。すぐ醫者に來て診察してもらふと入院せよといふので翌朝悦藏につれられて病院へ行く。院長はメレルを診察して、肺結核の初期であり盲腸炎の疑もあるから一年ばかり養生せよ。と、

言つた。一年の養生どころか二人の財布を倒にしても、日本へ歸る旅費があるかないかといふ程である。二人は途方にくれて唯祈るより外に方法を知らなかつた。祈りの結果二人は思ひ切つてニュウウク第一と言はれるニュウウク病院に入つて外科科長リイ博士の手術を受けることにした。そして悦藏は瘦せて蒼黒くなつたメレルを抱へるやうにしてニュウウク病院に行つて入院を頼んだ。

入院が許されると八幡町の同志に、メレル大手術祈禱のむ。と、電報を打つた。手術は一刻を争ふのでメレルはすぐ外科室に運ばれた。メレルはいつの間にか一通の遺言状を厚い封筒に入れて悦藏に手渡して置いて手術室へ行かうとしてゐる所へ、悦藏と一緒にニュウウクまで旅行を共にした婦人が来てメレルの入院費全部は私が引受けるから安心なさい。と、悦藏に囁いてくれた。

四十分ほど経つと手押車の護謨輪の音が聞えて、メレルは病室に歸つて來た。悦藏は戸の外に立つてゐたりイ博士に様子をきくと、切開してよかつた、生命は大丈夫だ、と、言つてくれた。

入院料は寄附してくれる人があつた。しかし手術料は入院料の外である。その手術料は五百ドル以上一萬ドル以下がりイ博士に支拂ふべき相場である。しかし、二人には最底の五百ドルすら無いのである。けれども黙つてゐるわけに行かないので、恐る恐る會計課に行つてきいてみると、リイ博士が直接悦藏に會ひたいと言つてゐたことを傳言してくれた。で、博士の室へ行つてみると、博士は言つた。メレルは日本で無報酬で福音を宣傳してゐるんださうだから、私も無報酬で手術をして上げまし

た。

その言葉をきいた悦藏は言葉を口にする勇氣もなく、黙つて堅く博士の手を握つて、全身を以つて感謝の意を表したのであつた。

悦藏はりイ博士にどうして謝禮をしようかと考へた結果、トランクの中にある日本刀を取り出して、これをリイ博士に贈つてはどうであらう。と、メレルに言つた。メレルは眼を圓くして其の日本刀を見てゐたが、枕もとのペンを取り上げて四スタンザの詩を書いた。刀は彦根の城下で買った刃渡り三尺一寸、朱鞘・鐵鍔、一點の曇りもない無反(むざり)の業物であつた。

メレルの病氣が全快して退院した時、リイ博士は二人を自分の家に招いて食事を共にした、その時博士の應接室には、朱鞘の日本刀が厳めしく飾られてあつた。

長い間苦しんだ病源を取去つたメレルは退院後故郷に歸つて両親の許で養生することになり、悦藏は彼と別れて各地の大學に日本の留學生を訪問し、總長に面會して日本の事情を説明しつつ其の年を送り、皇紀二千五百七十四年の大正三年といふ彼が二十五歳の春を異國に迎へたのである。

悦藏が再びロツキイ山脈のグレンウッド・スプリングスにメレルを訪問した時は温泉の傍の大噴水が三十尺も高く空中に雪白の氷柱となつてゐる頃であつた。その時メレルはもうすっかり健康になつて世界の中心である近江八幡に歸る準備をしてゐた。

日本へ行つて八年間に二度まで病氣のために故郷へ歸つて來るほど弱體なメレルが、また日本へ出かけるといふことについて、彼の兩親には異論もあつたらう。けれどもメレルはもう日本人のつもりで却つて兩親に日本行を勧めたのである。もう六十二歳になつた父のジョン、五十八歳になつたその母は、住み馴れた故郷を去るに忍びなかつたであらうが、富士山のある日本・琵琶湖のある日本・みんな兄弟姉妹のやうに親切にしてくれる日本人、世界中稀に見る立派な國である日本及日本人の話をメレルから聞かされてゐた兩親は遂にその日本に行つて愛するメレルと共に日本の土にならうといふ決心をして、急に屋財家財を整理して、悦藏・メレルと共に日本へ行くことにしたのは二月の半であつた。

四人はサンフランシスコに出て、そこから日本船の天洋丸に乗り込んで、三月十二日に横濱へ入港したのである。基督教青年會のこと、建築事務所のこと、雜誌湖畔の聲のこと、片時も早く其の實狀を知りたい悦藏は、三人と共に其の日に汽車に乗つて、三月十四日に八幡町へ歸つてみると、建築の方は村田幸一郎を主任として、コネル大學出の工學士チェーピン、オハヨウ州出身のヴォウゲルといふ若い工學士、此の三人が事務員を指圖して盛に建築をやつてゐ、傳道の方は悦藏が外國旅行に立する一箇月前に辭任した宮森武次郎のあとを受けて田中金造が傳道師として定住して居り、彦根教會の牧師武田猪平が時時應援に來、元早稻田大學の英語教師であつた文學士のウオウターハウスはメ

レルの傳道を應援する爲に、一旦故郷に歸り神學教育三年の課程を了へ、更に神學士の稱號を得て渡來し、青年會館の事業を必死に應援してゐてくれつつあつた。殊に悦藏とメレルのうれしかつたのは、悦藏が成立する二月前の七月三日に、村田幸一郎らと一緒に出席した安土基督教青年會の發會式に、生來始めて基督教の話聴きに來た岡田金一郎が、彼の歸つて來た二日後の三月十七日に八幡教會で洗禮を受けて基督教者となつたことであつた。

第二號の編輯を終つて出發したあとの湖畔の聲は、もう第十七號を發行して武田猪平・村田幸一郎・殘骸富永亨・醫學士富永孟・藤原鐵長・清水安三・座古愛子らが執筆してゐた。のみならず廣告屋の海老平を傭つて、地所買ひまあ……すと、觸れあるかせて買入れた池田町の一千坪の屋敷には二軒の洋館が新築されて、其の一棟が悦藏の住宅にあてられ彼の歸國を待つてゐたのであつた。

十八箇月の間外國に行つて來た悦藏は非常な精力で活動しはじめたが、ハイド老人から土産として貰つて來たメンソレータムは、まだ何所の賣藥店へ持つて行つても願みられなかつた。けれども蒲生郡船木村に造船所が出來て、やがて琵琶湖上を快走すべき長三丈五尺幅九尺速力十二ノットのモウタアボウトは新造に取かかられた。

四月十七日には村田幸一郎と原友枝との結婚式があげられた。近江基督教傳道團員の最初の結婚式で換言すれば近江基督教傳道團の花嫁花嫁が始めて現れたのである。

原友枝の父は京都河原町の浸禮教會牧師原三千之助で、友枝は姫路の日の本女學校を卒業後更に京都の精華女學校を卒業したのである。

二人が婚約したのは大正元年で村田幸一郎二十六歳の時であつたが、此の年彼は二十八歳で結婚したのである。

六月になつて多年懸案であつた近江療養院の最初の建物が出来た。

顧みれば明治三十八年三月十九日のことである。悦藏はメレルを長命寺につれて行つた。長命寺は西國三十三番の札所の一で、八千年や柳に長きいのち寺運ぶあゆみのかざしなるらん。と、いふ御詠歌を歌ひつつ順禮の訪れる有名な寺である。その歸途蒲生郡北の庄の山裾でメレルは一疋のばつたを捕へた。去年の秋の末に死んでゐるべき筈のばつたが、まだ雪の残つてゐる此の山裾に生きてゐるのである。地形を見ると北と西とに山があつて、東と南が光線を十分に恵んでゐる。けれども追剝の出さうな淋しい藪である。段段畑があつて芋でも作つたらしい。

その後合名會社が盛になつて來たので、此の地を四千坪手に入れた。通稱森さんといふ林喜平次が買入の世話をしたのである。小さい番小屋を建て、その近くに養鶏場を作つて、レグホンを七八十羽も飼ひ七面鳥も五六羽飼つた。牛小屋も建てたが牛は飼はなかつた。畑も耕してトマトを少し作つて

みた。

養雞がうまく行かなかつたので、その番小屋を養命館と名づけてメレルの斷食療養場にあててゐたが、その下の路傍に一軒の小さい無料休憩所を設けて湯水の飲めるやうにし、その壁に雜誌湖畔の聲を毎月取り替へて吊して置き、基督教について聞きたい人は、八幡町の基督教青年會館へ尋ねて來るやうに。と、書いた紙を貼つて置いた。すると、或日のこと一人の青年僧侶が青年會館をたづねて來た。居合せた武田猪平と村田幸一郎が、話をきいてみると、その男は遠藤觀隆といふ天台宗の學林にゐる僧侶であつた。遠藤觀隆は跡切れ跡切れに語つた。自分は思ふ所あつて比叡山を見切つた。そして今少し生命を打込んでする仕事を見つけないと思つて、どこといふあてもなく、堅田まで歩き、そこから舟で長命寺に渡り、伊崎の寺に詣で、空腹をかかへて此の八幡さしてとぼとぼ歩いてゐるうちに、あの休み所を見つげ中に入つて休んでゐるうちに湖畔の聲を見せていただき、貼紙を見てお訪ねする氣になつたのです。

その夜は折よく聞かれた聖書研究會に出席し、後親切にすすめられるまま、青年會館に一泊したのであるが、會後彼は佛教と基督教の優劣に就いて激しい論議を交した。議論は夜半になつてもつきないので、遂にメレルが此後一切宗教に就いての議論を中止し、半年の間黙つて我等と一緒に生活してみないかと提案すると、彼は何か仕事と與へられるならそうしませうと答へた。

ちやうど其の時製圖の心得ある一人の人を要求してゐた時だったので、建築事務所製圖の見習をさせることにして、一つの空と蒲團と蚊帳と着物とを與へ出勤させてみると、非常に頭がよくて暫くするうちにゴシック風の製圖に拔群の技倆を示しはじめた。彼自身もその仕事に非常な興味を感じ、毎朝出勤して就業前の禮拜に列席してゐるうちに基督教の眞理がわかり、とうとう洗禮まで受けたのであつたが、可愛さうに程なく胸を病むやうになつたので、北の庄の地所へ小さい病舎を建てて、そこへ遠藤觀隆を收容したのである。これが後の近江療養院の濫觴である。

七月の末から八月にかけて神奈川縣大津浦で基督教夏期學校が開かれるので、悦藏は藤原職長と共に出席して、内村鑑三・日野眞澄・笹尾条太郎・柏井園らの講演をきいた。此の會期中悦藏は音楽部長となつて讚美歌の指導をした。彼は音聲が裕で勉強すれば聲樂家として立つに足る程の素質をもつてゐたのである。

八幡町で清水安三が十一回の路傍説教をして求道決心者二百餘名を得たのも此の八月のことであつた。

九月一日から三週間、村田幸一郎は大津の歩兵第九聯隊へ勤務復習の爲に入營した。いよいよ陸軍歩兵少尉として指揮刀を揮ふのである。

ガリラヤ丸は竣工して九月二十六日にその進水式をあげた。機關士は九月一日に備ひ入れた免狀持

の西澤正治であつた。悦藏は初航海の祝儀として西澤正治に聖書一卷を贈つたのであつた。

十、家督相續

大正四年

皇紀二千五百七十六年の大正四年は、悦藏に取つて記憶すべき年であつた。

新しい年を迎へた一月二日、嚴密に言へば一月一日の午後十二時すぎに祖母ひでは、神戸市荊藻通一丁目二十六番屋敷で永眠した。ひでは弘化二年九月十二日生れの七十一歳であつた。二十一歳の時二代目金介と結婚して以來五十年間、酒癖のある夫金介に事へ、更に激しい酒癖の持主倅久介の亂暴と放埒とを氣にしなから其の改悛を見なかつたのである。けれども次弟金之介が酒を嗜まず温厚な性質であつたのと、久介の妻りうがしつかり者であり、その子悦藏が全然酒を飲まず放蕩しないと聞いて、その宗旨が自分の宗教とはかけはなれた基督教であるにせよ、安心して此の世を去つたのである。

八幡町に来てゐる母りうは洗禮を受けて熱心に教會通ひをするやうになり、悦藏も最早獨立してもよい頃だと思つたものか、急に隱居したいと言ひ出し二月五日に其の手續を取つて、悦藏を戸主にした。二男の徳藏はそのまま金之介の弟として本家の戸籍に残して置いた。この時悦藏は二十六歳で、

りうは五十歳であつた。

北の庄の小さい病室で養生してゐる遠藤觀隆の病氣はどうもはかばかしくない。日に日に衰へが見えて自炊の力もないので、りうは毎日辨當を作つて持つて行つた。遠藤觀隆は出来るだけ自炊をして、睡眠を十分に取り、服薬を少量に新鮮なる空氣を主なる治療薬として讚美と祈りの生活をしながら病と戦つてゐたが、三月の中頃から危険状態になつたので病室から近くの百姓小屋へ一條の鐵線を引いて、若し身に危険の迫つた時は、それを引いて急を知らせるやうにしてあつたが、四月八日の夜、彼はその鐵線を引かずに、小さい病室の中で靜に永眠したのである。

知らせを得た悦藏はすぐ自轉車で駆けつけたが、もう遠藤觀隆は冷くなつてゐた。彼は明治二十五年に會津城下に生れ、十二歳の時天台宗の寺院に入つて小僧となり、一通りの修業をした上比叡山の學林に進んだのであつたが、どうしても佛教の僧侶として生命を打込むことが出来ないで、遂に八幡で基督教徒となつたのである。遠藤觀隆がここで死んだといふ一事は、此の小さい病室が遂に肺結核療養所となり近江療養院にまゝ發展する原因となつたのである。

十一、結

婚

〓大正五年〓

大正五年に悦藏は二十七歳の春を迎へた。その一月二十九日に、宙返り飛行家のナイルスが八日市飛行場に來るので彼は其筋の依頼で通譯に行き、その夜は十一時すぎまゝ其の經驗談をきいた。

前年九月二十六日に進水式をしたガリラヤ丸は、毎週日曜には湖上に浮んで沿岸の村々に訪問傳道をした。そして水曜の夜の一時あるひは二時頃に八幡の町へ歸つて來たのであつた。機關士は西澤正治で發動機船のガリラヤ丸は勢のよい音を立てながら浦浦を訪ねて村長や郵便局長に面會した。それから村の辻辻で廣告をして、どこでもよい適宜な場所ですべあればそこへ人を集めて傳道説教をしたものである。

第一回の初航海の際は先づ堅田に行つて、郵便局長や町長を訪問して毎週一回傳道に來る旨を話し其の夜は船内に三十人あまりを招待し話したのであつた。翌晩は今津に泊つて傳道し三日目の夜大浦から八幡に歸つたのであつたが、大正五年二月の日記を見ると、一日には西近江大物の岡本方で百餘人を集め、二日には北小松の青年團で講話をし、二月十五日には伊香立小學校で村民大會を開いて三百五十人、夜は南庄小學校で四百名の村民を集めて講演してゐる。悦藏は毎月一回その傳道を受持つことになり、他は武田猪平牧師が傳道主任となつてゐる。

悦藏が斯うして熱心に傳道してゐる時、母のりうは初夏四月の半頃茨城縣水戸市備前町にゐるピインフォールドを訪問した。それはそこに同居して保育事業に携はつてゐる渡邊きよのに面會する

爲であつた。きよのは羽州上山三萬石の城主松平家の勘定奉行渡邊九十郎の孫で父を光太といふ。光太は若い時官吏となつて宮城縣の土木課に勤務中、明治二十一年七月四日に妻しまの生んだ長女がきよのである。宮城野原の清い野を聯想するために、清野の意味で命けた名である。きよのは仙臺市東二番町の日本基督教會にゐた丹羽金十郎牧師の紹介で東京芝區の聖坂にあるフレンド女學校に入學して、そこを卒業後保育事業に興味をもち、女學校五年の課程を終つた後も尙四年間學校に残つてその學問に没頭してゐたのを、ピインフォウルドが水戸に招聘してゐたのであつた。

悦藏はもう二十七歳である。しかも一家の戸主である。一日も早く結婚させたいとは、母りうの希望である。しかし、結婚後數多くの苦い經驗を経てゐるりうとしては、どうしても悦藏に圓滿な家庭を作らせない。それについては悦藏と性格のよく合つた女を娶らなければならぬ。これまで度縁談もあつたが、りうは其の何れにも乗氣がしなかつた。ところが某某の噂をきくと、水戸にゐる渡邊きよのの性格は悦藏と終世を共にするにふさはしいと思つたので、自分で會つて見ようと思ひ立つて、はるばる水戸まで訪ねて行つたのであつた。

親類の家に行つても三日と滞在したこと無いらうは、はるばる水戸まで嫁選びに出かけて行つて四十五日間滞在してゐたのであつた。

りうが何の用件で水戸へ來たのか知らないきよのは、來客としてのりうを待遇してゐたが、

りうが八幡町へ歸る日の朝、あなたは近いうちに外國へ勉強に行くといふ話だが、それはおやめなさい。外國へ行けば外國かぶれをする。あなたは其のままの日本娘であるが宜しい。と、きよのに説教するやうに言つた。そして停車場まで見送つた時、あのしつかり者のりうが、涙を流して別れを悲しんだ。

それから間もなくピインフォウルド夫妻が八幡町にメレルを訪問するから、きよのにも一緒に行かないかと言つて六月八日に三人は八幡町に來たのであつた。

六月十五日の朝、七人づれで醒ヶ井の養魚場を見に行くことになつたが、七人に對して備つた俵は五挺しかなかつた。で、悦藏ときよのは徒歩で行くことになつたが、途中で悦藏はきよのに問うた。みんなが俵で先に行つたわけを話し、禮儀正しい言葉で結婚を申込んだ。きよのは驚いたが、三四日間考へさせてほしいと言つて置いた。そのうちに悦藏は明治二十三年生れの二十七歳だが、自分は明治二十一年生れの二十九歳であるから、此の縁談はことわるがよいと思つて、その事を直接悦藏に語ると、悦藏は眞剣な顔附をして、僕は早熟だ、二十七歳であつても三十七歳ぐらゐの考をもつてゐます。僕は自分よりも年下の女と結婚する氣になれない。僕は僕の友となり姉となり母となつて僕の事業を助けてくれる婦人と結婚したい。僕の母も父より一つ年上であつた。年上であつたから父の亂

暴な生活を堪へ忍んで僕たちを一人前にしてくれたのである。若い女であつたなら、あの辛抱は出来なかつたに相違ない。氣楽なやうに見えるが、僕の心に描いてゐる理想は大きい。幾多の困難を突破しなければならぬ。誤解を受ける事もあらう。迫害される事もあらう。その場合に僕はしつかりした相談相手をほしい。年齢の差など少しも意に介することはない。と、言つた。

二人の意志は其の時から相近づいて行つた。その翌日悦藏は自分に婚約者のあつたことを打明け、その手紙全部をきよのに見せて、その婚約が取消されてゐる證據を知らしめた。

十月十五日に二人は八幡町の基督教會で、武田猪平牧師の司會田中金造の司式で結婚の式を挙げ、先づ出雲へ新婚旅行をしてあの壯大な出雲大社に参拜し、それから天の橋立・城の崎温泉を巡つて歸つて來た。

母りうが三月四日付で水戸から悦藏に送つた手紙にはこんな事が書いてあつたのである。けれども彼は此の手紙のあつた事は、きよのに秘めてゐたらしい。

悦藏私は二日に梅見に行つて來ました。私は此度ビンフォールド様の御親切やいろいろこまかい所まで行き届いた事に感心しました。渡邊様といふ方もそれはそれは心のやさしい事は筆には書けません。第一まことにシツポクな方故私は心より愛のでける方と思ひますから、できればこのかたをむかへたいです。第一徳藏のため私のため家の爲傳道の爲八幡にてきとうと思ひますから、

よくヴォーリズ様に相談してみして下さい。私の目でよく心の中が見えました方ですからよく考へてみて下さい。

十二、愛母と愛兒

|| 大正六年 ||

時は満てり・神の國は近けり・汝等悔改めて神の國を信ぜよ。と、いふ聖語が悦藏の全身全靈を揺り動かしたのは彼が二十八歳の 大正六年であつた。

悦藏は此の年毎月一回ガリラヤ丸に乗つて三日間湖畔の村町を巡つて福音を傳へ、安土・大原・八日市・大津・水口・膳所・彦根・日野・野田・馬場・米原の十一箇所に出張傳道をした。そのうちで八日市へは十八回も行つてゐる。八日市には前の年飛行家ナイルスが來た時其の通譯をしたのが縁故となつて將校たちに實用英語を教へてゐたので、毎週二回づつ出教授をした爲に、町の子供達を集めて日曜學校を開いて毎回百名以上の盛なる集會を營んだのであるが、安土で開いた毎週の集會には五名を超えたことは少かつたが、岡田金一郎の熱誠に感じた彼は此の地の傳道に最も力を入れた。

大正六年一月一日の朝五時半から彼は教會の早天祈禱會に行き、午後二時からメレルと共に安土へ出張して、日曜學校生徒を集めて拜賀式を挙げ、夜は大人の爲に集會を開くと甚だしき寒氣にも拘ら

す三十餘名の聴衆があり、酔つばらつた一人の男は彼が説教中に南無阿彌陀佛を唱へながら賽錢を投げたりしたが、それは大した妨げにもならず無事に集りを終つたのであつた。彼は此の夜の集會の事を日記に記して、氣持よき集會なりき。と書いた。

其の頃クオ・ヴァチス・ドミニネの映畫が渡つて來て基督教關係の團體に歓迎せられてゐた。嘗て京都基督教青年會館で此の映畫の大會を催して組合教會牧師高橋應藏が其の司會をしたが、一廣告屋を儲つて辻辻に俵を停めて廣告演説をさせた所、その演説中に、クオ・ヴァチス、クオ・ヴァチス……原名いづこへ往く。と、言つても誰も怪まなかつた程、クオ・ヴァチスの名は一般に知れ渡つてゐなかつたが、もう此の頃は松本雲舟譯の、何處へ往くが讀者から熱狂的歓迎を受けてゐたので、基督教徒以外の讀書家も此の映畫の渡來を歓迎したのであつた。そこに氣づいた悦藏は、その寫眞を携へて大津・八日市・日野・水口等に出かけて行き、大津では三百七十人、八日市では六百名の入場者を得たのであつた。二月中彼は此の寫眞傳道に忙殺されたが十三回の出張傳道は一回も怠らなかつた。

三月五日の朝一人の青年が訪ねて來た。會つてみると東北辯の質朴な男らしいので、來意をきくと、其の青年は身の上話をした。青年の姓名を鎌田漢三といつて、秋田縣南秋田郡外旭川村の産である。大曲の農學校を卒業した後、政治家志望で早稻田大學の政治科入學が目的であつたが、父が一市三箇村の耕地整理を引受けて大失敗の結果學資が出なくなつたので、南米に行つて一働きして早稻田

大學へ行く學資を作るつもりで神戸まで出て來て、渡航の機會を待つてゐるうちに、一人の親切な男に出あつて、近江八幡に不思議な團體があることを聞いて、とにかくそこへ行つて身の上の相談をしてみようで來たのであつた。

基督教を信じてゐるかと思つと、松野菊太郎・江原素六の説教を一回づつ聞いたことがあると言ふ。そこで悦藏は鎌田漢三をメレルの所につれて行つた。村田幸一郎にも相談したが、眞面目な青年だから入團せしめようではないかといふ事になり、三月八日に鎌田漢三に入團の許可を與へると、どんな仕事をするのかと訊いた。

農學校出身だから北の庄の畑を拓かせようといふ事になり、鋏をもたせて北の庄へ行かせたが、建築部の青寫眞を手傳ふ人が一人必要だといふので、鎌田漢三を途中から呼び返して建築部で仕事をさせる事にしたのであつた。

此の頃悦藏は通信傳道部を開いて、宗教上の質問に應じたり宗教に關する書籍の無料貸附をしたりしてゐた。その他に日曜學校の生徒を毎週教へ、日曜學校教師の爲に兒童心理學の講義をしたり、社員に建築史の講義をしたりして非常に多忙であつたが、いつも張り切つて働いてゐた。

五月六日は日曜であつた。彼はその朝日曜學校でダニエルの話をし、日曜學校教師會で創世記の緒論を試みた後、午後八日市の日曜學校へ教へに行つて猛雨を衝いて夜の九時過に歸つたが、翌朝少し

頭痛がするので診察してもらふと咽喉加答兒であるといはれ、歸宅後吸入を數回行つたが、その後氣分がすぐれないので十日の朝上京中の妻きよのに電報を打つて十二日までに歸るやうに言ひやつたが、きよのは用件が片づかないので十四日に歸つて來た。その時彼は病床中にあつて母のりうが昨日丹毒だといふ診断を受けた事を語つたので、きよのは驚いたが、平生健康な母の事であるから、すぐに全快するであらうと思ひながら介抱してゐるうちに、十五日になつて、りうの丹毒は手にまで擴がつて發熱が甚しくなつた。

十六日に彼は富永孟醫師から氣管支加答兒と診断され濕布法を行つてもらつたが、一方母のりうは、ますます苦痛を訴へるので二回の注射をしてもらつたが、重態と知つて京都の大學病院へ送る相談までしたのであつた。

二十日になると悦藏も全快し、母のりうも輕快の氣味なので、二人は互に祈つて將來の事など語り合つたが、りうは死んだまつ子の爲に祈れと彼に言つた。基督教を信じないで死んだ松子の靈魂の事を心配したのであらう。

ところが翌廿一日の朝一時半に、りうは悦藏を枕邊に呼んで祈れと言つた。彼は母の枕邊に跪いて涙ながらに祈つた。母のりうも祈つた。しかし、これが母の最後の祈であらうとは夢にも知らない彼は、平生から健康であつた母の全快を信じて疑はなかつたが、十一時すぎに心臟があまり苦しさ

うなので、富永孟・山本小太郎の二人を招いて診察してもらふと心臟麻痺の恐れがあるといつた。けれどもまだ五十二歳の母が、今頃ぼつくりと死ならうなどは少しも思はれなかつたが、果して醫者の豫斷した如く午後三時二十分に、遂に永久の眠に就いたのであつた。

急報を得て弟の徳藏が兵庫から駆けつけて來た。叔父の金之介が來た。彼は徳藏の姿を見た時母の死が急に堪へ切れない悲しさとなつたので、徳藏と二人で三階の狭い一室に入つて、戸を閉めて中から鏡を卸して置いて、二人は抱き合つて飽くまで泣いた。幼い時から酒癖をもつ父にさんさん苦しめられた母の苦勞を眼の前に見て來た彼は、父の亡くなつた時、まだ獨力で母をどうする力は無かつたが、今はやつと自分の力で母を慰めることが出来るやうになつてゐる。まだ母は人間の定命にも達してゐない。これから二十年或は三十年を氣樂に暮らせてあげようと思つてゐる時、丹毒と診断されてから、たつた九日のわづらひで此の世を去つたのは、彼に取つてあまりにも惜しい事であり残念な事であつたのであらう。生れ落ちると同時に家本吉太郎に預けられて、眞の母を母と知らなかつた徳藏は、實の母は吉田りうだと言ひ聞かされても、やつぱり家本夫妻を眞の兩親だと思つてゐただけに、これが眞の母だと知つて吉田家に歸つて來て以來、一緒に暮す日の少なかつただけに、母と子との愛情を、もつと永く味ひたかつた徳藏の心には、兄悦藏とは異なつた残念さ悲しさが強かつたに相違ない。悦藏はその日の日記に、嗚呼嗚呼悲しい哉、終夜泣く。と、書いてある。

翌二十二日の朝、彼が悲みに浸つてゐる所へ驚くべき知らせがあつた。それは嘗て遠藤觀隆に入信の動機を與へた北の庄の休憩所に縊死人があつた事である。彼は早く駆けつけた。警官も來警察醫も來て検死をする時、彼は勇敢に其の縊死人を抱きおろした。縊死者は可なりひどい癩病患者で、自分で自分の業病を持てあまし、休憩所にある惱みあるものは相談に應ずる。と、いふ廣告を見て、此の世に望みのない自分は、此所を借りて死ぬるから、死後の葬式をよろしく頼むといふ遺言を認めて懐に入れてゐた。

母の死、それは實に悲しいことではあつたが、醫師の手厚い治療を受け、親しい人人に祈られ、人間としてのあらん限りの看護を受けて死んだのである。然るに其の同じ日に、世の人人から見放され、家を捨て愛する者から離れて放浪の身となつたが、遂に分厘の光明を見出す事が出来ない。僅に死後の遺骸だけでも親切に取扱つて貰ひたいといふ憐れな希望のもとに、此所で縊死した。所も知らず名をも知らざる此の業病患者の事を思ふと、彼は言ひ知れない感激に打たれたのであつた。

彼は傳道團の人達と相談して、自分の母を葬る前日、武田猪平牧師と共に此の無名の敗殘者を丁寧に葬つたのであつた。この小さい休憩所の建物に、青年僧の苦悶を救ひ、このあはれた癩病患者に最後の家を貸し與へたことは、大きな意義を齎したものであると言ひ得るであらう。けれども彼は悲しかつた。彼はその日一日祈つては泣き、泣いては祈り通した。

廿三日の午後一時半、家の庭の芝生の上で母りうの出棺式をして、二時から教會堂で嚴肅なる葬式をしたが、葬式人夫は一人も備はず、教會の青年たち十六名が棺を擔いで西山の火葬場に行つて、火葬場に棺を預けて歸つた。彼はその夜自宅には歸らないでメレルの家に行つて枕を並べて寝た。メレルも眞の母を失つたやうだと言つて涙ながらに祈つた。

廿四日の朝八時半に武田猪平らと共に火葬場へ收骨に行つて、武田猪平の司式で鐵爐を開いた。午後一時に吉田金之介と弟の徳藏が兵庫へ歸るのを見送つた彼は急に寂寞を感じたので廿五日の教會の總會が終り次第兵庫へ歸る約束をした。そして二十六日午前十時三十分八幡驛發の汽車で兵庫に歸り、翌二十七日の午後二時に兵庫教會で母の記念會を営んだ。

六月一日に母の遺品分をすませ、三日から八日までに安土・八日市・彦根を巡回した後、十二日の夜は鹿兒島市の山城屋に旅の疲れを休めた。急に思ひ立つて琉球へ旅行することになつたからである。十五日に那覇へ着いて會社で引受けた教會堂の監督をして、十六日に宮古丸で鹿兒島へ引返したが、母の死に因つて受けた心の痛手を癒すために、耶馬溪の風景を見たり中津の寺院で大雅堂の繪を見たり、別府温泉の不老泉に浴びたりして、廿三日午後三時に八幡驛できよのくに迎へられて母なき家に入つたが、その夜すぐ聖書研究會の講義に出たのであつた。翌日はまた八日市に行き、それから安土・日野・馬場・大原・市場・米原を巡回してみると、八日市では八十人、米原では百三十人の子

供たちが、彼の巧みな話を喜んで聞いた。馬場の鐵道青年會では、夜學生二十七人、運動部員十七人、聖書研究會員十五人、少年會員六十人、日曜學校生徒七十人といふ有様を見て感謝の祈禱を捧げた。

馬場の鐵道青年會は此の時から八年前の明治四十二年三月に創設したもので、高畑爲次郎や藤原鐵長らが熱心に傳道した結果、明治四十四年の十月二十四日には新しく堂堂三階だての會館が建てられたのであつた。

大正六年の馬場鐵道青年會には山田寅之助が幹事をしてゐた。山田寅之助は滋賀縣栗田郡下笠生の産であるが、幼少の時家庭の事情で七歳になつても小學校に通ふことが出来ず、父と共に村から町へ町から村へと轉轉旅行を續けてゐるのを見るに、見かねた祖父が援助して小學校に入れてくれたのは九つの年であつたが、家計上思ふやうに行かず、一年生二年生は、やつと修業できたが、たうとう彼が十一歳の時小學三年生で退學して、大津の中町通の魚類卸賣商へ丁稚奉公に入つて、そこで三年半ほど働いてゐるうちに、爲にならぬことばかり教へられるので、これではならないと思つて京都三條の牛乳屋に入つて配達を試みたが、これも一年でやめてしまひ、舟乗にならうとして太湖汽船會社に入つたが、一箇月半で飛び出し大津の製麻會社の職工になつて三年半勤務してゐるうちに、一週間二錢の貸本で講談本を読みはじめ、その面白さに釣られて唐犬權兵衛だの幡崎院長兵衛だのに心酔

してしまひ、よく若い者達と喧嘩口論をするやうになつたが、どうした機みであつたか、俄に鐵道人になりたくなり、馬場の機關庫へ日給三十錢で臨時傭として出勤するやうになつたのである。主任が試験を受けよと言ふので、米原まで試験を受けに行つたが頭から問題が讀めない。二度まで受けてみたが答案には○を書くより外に方法がなかつた。そこで十九歳の秋から大津の淡海義塾に入つて算術・國語の二科目を勉強することになり、半年ばかり勉強して三度目の試験を受けて、かま掃除から火夫に進級して通勤してゐるうちに、友人から勧められて大津の武徳殿に行つて柔道の稽古をしてみると、堪らなく面白くなり、三度の飯よりも柔道が好きになり、一年半後に一級になつて、滋賀縣立師範學校で催された柔道大會に出席した時、滋賀縣唯一人の有段者木村初段を征服したので、武徳會滋賀縣支部から初段の免許を得たのである。

或時藤原鐵長に誘はれて馬場の鐵道青年會に行つた。武田猪平の精神講話を聞いてゐるうちに、鐵道青年會は此の世の爲に働いてくれる鐵道人の爲に學問を教へ慰安を與へる爲に設けてゐるのだと知つて、初めて青年會へ行つてみる氣になつて、次の日に藤原鐵長を訪ねてみると、従業員二十五人が寄宿してゐる大きな家で、一階には食堂と遊戯室があり、遊戯室には玉突臺があり將棋盤がありカルタの牌があり二階が講堂になつてゐるのだと知つた。

山田寅之助は此の青年會館で始めてアーメンの聲を聞き、それから藤原鐵長に誘はれて大津白玉町

の組合教會に通ふやうになり、そこで京都教會の牧師牧野虎次から洗禮を受けたのである。いよいよ洗禮を受けるといふ一時間前に、これが此の世の煙草の喫ひ納めだと思つて船着場の所へ行つて、持つてゐただけのあやめをすつかり喫つてふらふらしながら教會へ行つて洗禮を受けたが、その時彼は頭のでつべんから腹の底まで氷柱がさがつたやうに感じた。不思議にも其の翌日から煙草も吸へず酒も飲めなくなり、何等の努力なしに禁酒禁煙の斷行が出来、今まで足繁く通つた安芝居の看板を見るのも嫌になり、講談本が急に聖書に變り、浮れ節・安芝居が教會通ひに轉向し、基督教に關する書物を貪り讀むやうになり、後には飢を凌ぐだけの収入があればよいから日曜の朝夕基督教會に通つて説教の聞かれる職業に就きたいと念じてゐる折柄、青年會の幹事にならないかといふ相談を受けたのである。

さて幹事になつてみると、毎日曜に百人ばかりの子供が集つて来る。未だ嘗て一度もこんな大勢の人間に對つて話したことがない。集會の廣告をするのに、びらを書かなければならないが、そんな大宇を書くのは小學校の習字時代だけで筆かとれない。子供達に讚美歌を教へなければならぬが、音樂の素養が少しもない。けれども武徳會で其の少年時代を知つてゐた西村關一が來、柔道を教へた吉田政治郎が來て片腕となつて應援してくれたので、二十五歳の彼は俄に習字・音樂・話術の稽古に取りかかつたのであつた。

七月九日には悦藏の母りうの永眠五十日目に當るので、八幡教會で記念會を開き、自轉車一臺を教會用として献納することにした。

斯うして彼は大きな愛の對象である生みの母の死去を悼んでゐるうちに、十月四日に至つて彼は死の悲みを抹消すべき大きな喜びを得た。それは彼ときよのとの間に希夫といふ愛らしい男の子を得たことである。

十月二日に彼は路傍説教をしてゐた。そこへ妻のきよのが産氣づいたと知らせて來た。彼はきよのの初産が氣になるので、五月の廿四日に大津の赤十字社病院につれて行つて診察してもらつたところ、満五箇月で赤ん坊は胎内で異常なく育つてゐるといふ診斷であつたから、出産は此の病院でと心で決めてゐたのであつたから、すぐ大津へつれて行く用意をしたが、きよのの容態は大津まで行けさうになかつた。三日は終日陣痛前の苦悶を訴へたので大津から醫者を迎へるやら産婆が來るやら大騒ぎをしてゐるうち、十月四日午前二時四十分に玉のやうな男の子が生れた。彼は日記帳に、十三時間の産苦の後希夫來る。と、書いた。産れたのでなく來たのである。生れた子を神に捧げるのではなく神の與へ給うた希夫といふ男の子が彼の所へ來たのである。酒を飲まず煙草を吸はず純潔な生活をしてゐる青年を父として此の世に現れて來た希夫は本當に幸福な子であつた。すぐ秤にかけてみると重量七百四十匁であつた。三日目に叔父の金之介が兵庫から希夫を見に來た。二十六日に希夫

の體重を量つてみると二百匁殖えて九百四十匁になつてゐた。

此の月に今一つ悦藏を喜ばせたことがあつた。それは十月二十二日に龜谷凌雲が八幡に来て傳道團に入團した事であつた。龜谷凌雲は東京帝國大學卒業の文學士で富山市外の正願寺といふ眞宗寺の住職であつた。その龜谷凌雲は大學の哲學科で宗教學を専攻しながら近角常觀の求道學舎で四年間も薫育を受けたのであつたが、遂に佛教の信仰から基督教の信仰に轉じたのであつた。

悦藏が始めて彼と語つたのは七月の三十一日で、場所は輕井澤の近江園の別荘内であつた。それから毎朝二人は佛教に就いて基督教に就いて研究を續けてゐるうちに、暫く近江八幡に来て湖畔生活をしてみないか。してみよう。と、いふことになつたのである。悦藏は湖畔の聲九月號の第五十九號に、佛教より基督教へ。といふ龜谷凌雲の文章を掲載したところ非常な反響を喚び起し一人にて五百部の註文がある程であつた。で、同號は再版を出してその要求に應じたのであつた。

此の年村田幸一郎・清水安三の二人は陸軍歩兵少尉の軍服を纏ふ身となつたのである。

合名會社の建築部は札幌・仙臺・東京・金澤・名古屋・京都・大阪・神戸・福岡・長崎・琉球・京城まで其の事業區域を擴め、大正六年中の工事費概算百六十萬圓に上つた。

一方傳道團の方はますます隆盛になり、十二月一日から事務所を八幡町魚屋町元三十番地に移轉した。

十三、傳道團の葬式と復活

〓大正七年〓

大正七年は悦藏が二十九歳になつた年である。その一月に大津出身の實業家某が匿名で金四千三百二十五圓を神の命なりと稱して傳道團へ寄附を申込んで來た。

悦藏は安土傳道に非常な力を入れた。それは始めて彼の説教をきいて感激した岡田金一郎があつたからである。二月十七日にその岡田金一郎は天臺宗延曆寺管長不二門智光宛に離檀届を差出した。その文面は、

離 檀 届

小生儀祖先以來安土村大字下豊浦江藤山願王院稱名寺の檀徒として佛教を信仰致し居候處今回信仰の都合により八幡組合基督教會之信者と相成り候間此段離檀御届申上候也

大正七年二月十七日

安土村大字下豊浦

岡 田 金 一 郎

天臺宗延曆寺管長 不二門智光殿

と、いふのであつた。岡田金一郎は大正三年三月十五日に受洗して大正四年一月十九日に稱名寺住職明望義信に離檀届を差出したが、何等の沙汰もなく寺費の徴収に來るので、本山管長宛に此の届を提

出したのである。

四月六日にハアデエ老人が八幡町に來た。老人は嘉永六年七月八日に浦賀に來着したペルリ提督の旗艦サスクエハナ號の短艇係だつたといふのである。

老人は到る所で禁酒禁煙の必要を説いたが、その講演よりも彼が六十五年前に始めて日本へ來た米國軍艦の乗組員だつたといふので到るところ大歓迎を受けた。老人は海軍水兵服に海軍帽を被つてゐた。

午後悦藏はハアデエと共に宇津呂小學校・八幡小學校に行つて、ハアデエの演説を通譯したが、夜は八幡町の共同座で二時間半にわたる長講演の通譯をした。

翌四月七日の朝九時の上り列車でハアデエと共に米原に行き、そこから俾で長濱に行つて直ちに共濟會で講演の通譯をした。午後は二時から米原小學校、四時から彦根の銅像前、夜は彦根女學校講堂で合計四回の通譯をしたのであつた。ハアデエは其の後米國に歸つて、彼が十六歳の少年でサスクエハナ號の短艇係をしてゐたといふ記録がないと言はれて發狂したといふ噂が傳つて來た。しかし彼の説く所は單純で有益な話であつた。

五月五日發行の湖畔の聲第六十七號に、禁酒禁煙を宣誓實行して品性の修養をなす目的で近江禁酒會を組織して、其の會員を募集した。

五月廿一日は母りうの永眠一周年に當るので、貧民心理の研究家として稍名聲を馳せかけてゐる賀川豊彦を招いて講演會を開いた。これが近江基督教團と賀川豊彦との關係を生じた最初である。

五月二十五日に北の庄の近江療養院は患者二十五人を收容できる病室を建てて開院式を擧げた。此の療養院は明治三十八年に悦藏がメルルを伴れて長命寺に散歩した歸途、北の庄の畑でバッタを捕へたことに起因して、後に其の地所を買入れ養鶏場を設け、牛小屋を建て、畑を耕し、メルルの斷食療法として養命館と名くる小さい建物と、路傍に通行人の爲の休憩所を設け、その休憩所に足を停めた天臺宗の僧侶遠藤觀隆が遂に基督信者となり、養命館で療養中死亡したのが、此の療養院を造らしむる促進機となつたのである。

其の頃近江基督教傳道團に關係があり、湖畔の聲に殘骸の筆名でよく感想文を載せてゐた富永亨の一子富永孟が京都帝國大學の醫學部を卒業した。けれども富永孟は醫學士になると同時に咯血して肺を病む身となつた。彼は學生時代から悦藏を知つてゐ、湖畔の聲にも執筆してゐたので、悦藏はメルルと相談して北の庄に明星館といふ住宅をたてて、富永孟の住宅に宛て、そこで彼を療養せしむると共に、肺病は全快するといふ實證を示させる爲に、富永孟を院長として此の療養院を創めたのである。當時の日本にはまだ肺結核撲滅運動が盛でなかつた。空氣療法とか自然療法とかいふ療法もなかつた。神戸市の布引にサニタリウムがあつた。けれどもこれはセブンスデイ一派の基督教徒が主張する

水治療法で、熱湯に浸した毛布に全身を包んで發汗せしめる療法であつた。そしてそれは單に肺結核患者治療の目的ではなかつた。然るに近江療養院は完全なる病院組織で我が日本から肺結核病を驅逐する目的で建てられたのであるから、社會の注目を惹いた。

開院式の來賓は二百名を越えた。京都帝國大學からは醫學博士藤浪鑑が來て結核療養所設置の必要を陳べ、内務省高田屬官・滋賀縣内務部長・同衛生課長・同醫師會長・蒲生郡長・八幡町長などの祝詞や演説があつた。開院式後三日間に觀覽を許したので約二千名の來觀があつた。

開院式の日賀川豊彦も八幡町に來て、二十六日には教會で講演をなし、二十八日にはガリラヤ丸に同船して今津へ行つた。

此の日悅藏は今津の登記所に行き今津基督教青年會館設立地の買入登記をすました。

間もなく悅藏の妻 きよの の父渡邊光太が山形縣から八幡町に移住して、近江療養院の事務長となり、江龍一彦が副院長となつて富永孟と共に診療に從來するやうになつた。

斯くして近江基督教傳道團は漸次發展して來たが、リバイバルの起つた時は、惡魔が屋上に眠つてゐる時だといふ譬の如く、傳道團が前進傳道に全力を盡して、九月十八日から九日間にわたる説教會を開き、木村清松・清水安三の熱烈なる講演の結果四十六名の決心者を得たことを喜んでゐる時、團内から團則を顧みない者が五名現れて來た。これが爲に悅藏は非常なる苦心のうちに幹部たちと協議

の結果、涙と祈のうちに五名の團員と袂を分つことになつたが、罪の値は死なりとの聖句に基き、五名の退團者を出したる責任を負うて、近江基督教傳道團・ヴォーリス合名會社を解散することになり、十月十一日の例會で其の葬式をした。司會者は村田幸一郎で、メレルの感話、悅藏は近江基督教傳道團と合名會社の歴史を説き、後祈禱會に移り、武田猪平の祝禱で會を閉ぢたが、みな眼に涙を浮べて散會した。悅藏は此の日の有様を日記に認めて涙堂に滿つと、書いた。翌日から三日間團員全部休業して祈禱會を開き、事務所の樓上で社員幹部に個別的面會をして近江基督教傳道團の復活協議をした末、同團の福音宣傳各施設・近江療養院の事業を一切引纏めて、近江基督教慈善教化財團と改稱して傳道團の新しい第一歩を踏み出すことにした。

十一月十八日に彼は上京してブックマンの通譯をする爲に十二月上旬まで滞在して京濱間の各所で活躍したが、十一月二十八日の午前中、後の正則中學校長文學士今岡信一郎の紹介で沖野岩三郎を本郷追分町の西濃館に訪問した。それは沖野岩三郎の書いた小説宿命を大阪朝日新聞紙上で讀み、共鳴する所があつたからである。

十二月二十一日から二十九日まで、武佐・近江療養院・野田・八幡・彦根・安土・馬場・米原・今津の九箇所でクリスマス祝會を開いたが全部の會衆は二千名を遙に超えたのであつた。

十四、重なる喜び

|| 大正八年 ||

大正八年、悦藏三十歳の春を迎へたその日、例の如く早天祈禱會に出席後安土に行つて集會をした。一月五日發行の湖畔の聲七十四號で、年號の呼び方を紀元二千五百七十九年とすべしと叫んでゐる。皇紀をもつて年號を呼ぶべしとの議論は、其の後二十年を経て一般に唱道せられたものである。彼が基督信者でありながら日本精神に富んでゐた事は此の一事でも推して知られる。

一月七日に上京して本郷の今岡信一良方に落ちつき、直ぐに沖野岩三郎を訪問し、晝食を共にした後石田三治を訪問した。石田三治は帝大出の文學士で、トルストイ研究の權威者であり且つ熱心な基督信者であつた。

一月三十一日に彼は京都同志社に渡邊善太を訪問した。渡邊善太は日本有數の希伯來語學者で同志社神學部で舊約神學を講じてゐたのである。悦藏は此の頃から近江八幡の傳道團に聖書學校を設け、そこで傳道者を養成して各傳道地に派遣する計畫を樹ててゐたのである。彼がこの日渡邊善太を訪問したのは其の下準備の爲であつたらしい。後に渡邊善太を八幡に迎へる相談が可なり進んでゐたのであるが、遂に不調に終り渡邊善太は東京青山學院教授となつて同志社を去つた。

三月五日發行の湖畔の聲第七十六號に、岡田金一郎の自給傳道と余の使命と題する一文が發表さ

れ、同月九日安土教會が設立されたので、悦藏は鎌田漢三・武田猪牛・瀧川健次の四人連で出席した。彦根教會からも執事が一人出席した。七年前の明治四十五年七月三日に此の地に基督教青年會を開いた時、深尾清三郎につられて始めて基督教の話聞いた岡田金一郎が此の教會の傳道主任となつたのである。始めて基督教の話を書きしてから一年後に洗禮を受けた彼は自分の家を開放して傳道所にしたが、當時の信者は同地の出生で長濱教會にて受洗した田中龜太郎が唯一人あるだけで毎日曜に集會廣告を出しても殆ど來る人はなかつた。集會の際説教するのは同志社神學生の清水安三であつた。この清水安三がまた非常な熱心家で、降つても照つても、集會毎に彼のづんぐりした和服姿の見えない事はなかつた。二尺以上雪の降り積つた或夜彼は岡田金一郎一人を前にして一時間あまりの説教をしたことがあつた。

その後岡田金一郎自身が傳道するやうになり涙と汗で身を忘れて道を傳へた結果數名の信者も出來たが其の信者たちも結婚期になるとみな脱退してしまふ。それは基督信者の所へ嫁入つて來る娘がないからである。だからいつまで経つても集會者は二三人である。その二三人を相手に悦藏は根氣よく八幡から通つたものである。

四月四日に悦藏は京都東山病院の外科に入院してヘルニヤの截開手術を受けた。きよのは八幡から、徳藏・金之介は兵庫から、心配して駆けつけたが經過は案外良好で十三日には退院することにな

つた。

五月二十一日に母りうの永眠二周年の記念會を營んだが、その三日後二十三日の朝から、妊娠中のきよのは陣痛を訴へはじめた。初産の時は二日間にわたる陣痛だったので、どうかと心配してゐたが午後三時にのぶが生れ三時十五分にたかが生れた。のぶは六百二十兩、たかは五百九十兩であつたが、二人共元氣に育つた。それから三日目の廿五日に近江療養院設立一周年の祝賀會を開いた。その時の收容患者は十六名で、院長の富永孟は從來の經驗を綜合して、サナトリウムに就いて、といふ論文を醫學雜誌に發表して以來、全國から此の療養院の外氣療法の見學に来る者が多くなつて來た。

六月三日は近江基督教慈善教化財團に取つて忘るべからざる目出たい日であつた。それは貴族院議員一柳末徳子爵の一女満喜子と、メレルとの結婚式が東京芝白金今里町の明治學院で舉行せられたからである。

一柳家は本國美濃清和源氏の末流一柳監物事越智直盛を祖とする。直盛は關ヶ原の役に徳川家康に屬して戦功あり後伊豫西條の城主となり祿六萬八千五百石を食んだ。直盛に三子があつた。次男を直家と言つた。慶長十年江戸に行つて將軍秀忠に仕へたが、實は父直盛の爲に人質となつたのである。

けれども直盛に異心なきを知つた秀忠は、直家を薦めて従五位下美作守とし、後に播州小野に居らしめ祿二萬八千六百石を食ましめたが、死する際嗣子の届出をしてゐなかつたので、嗣子直次は封を削られて一萬石を食むことになり、その子末禮以後代代末の一字を名づけ、爵名は土佐守であつた。小野城は江戸から百四十七里廿一町の播磨國加東郡にあつて、江戸屋敷は芝愛宕下佐久間町にあつた。

一柳満喜子の父は一柳末徳で母は一柳榮子であつた。一柳榮子は明治十年に芝露月町の長老教會で洗禮を受け後に牛込拂方町の日本基督教會に轉會したのである。朝夕聖書を読み、教會への出席を樂みとしながら、家に在つては常に前垂掛で臺所に立働いてゐた。

満喜子は胎内から基督教の感化を受けゐたので、九歳の時母に別れたが、その時もう信仰に哺まれてゐたのである。満喜子は母が 皇后陛下に拜調を許された際白無垢を着て参内し聖書を献納したといふ話は其の頃からよく知つてゐたのであつた。

満喜子はお茶の水高等師範の附屬小學校から女學校まで卒業した上、女子學院に入學して音楽と英語を専修したが、更に神戸女學院の音楽部に學んで同部を卒業したので、日本女子大學校の創立せられた時半教師半學生の形で同校に教鞭を取つてゐたが、思ふ所あつて米國に渡り、高師附屬女學校時代に英語を習つたアリス・ベエコンを訪ね、夏間休暇を其の許で過した。其後ペンシルヴェニアのプリンマア大學に入學して洋服を着ず日本服で押通したといふ異り種であつた。その大學豫科に三年

大學に在學二年、思ふ所あつて退學、自給自足の經驗をなすため、父末徳宛に來月より御送金御斷り申上候といふ手紙を出した。そして、武士は食はねど高楊枝と貧しくとも、自ら働いて自ら生活しながら勉強を続けるを悦びとした。父末徳が老年になつたから歸れと言つて旅費を送つて來たので、やむを得ず留學八年にして日本へ歸つて來たが、歸朝の際滿喜子はアリス・ベエコンと再度來る約束をして別れたのであつた。七ヶ月日本に滞在した後、大正七年四月に再び米國へ行つてみると、アリス・ベエコンは一柳滿喜子の來るのを待ちに待つたが、其の到着の五日前に永遠の眠りに就いてゐたのであつた。

ベエコン家は明治四年に右大臣岩倉具視が全權大使となつて米歐に派遣せられた時、隨行した女性中の山川捨松事後の大山捨松を預つて教育したのであつた。だからアリスと捨松とは非常に懇意の仲であつたが、徳富蘆花が小説不如歸を書いて、大山捨松が先妻の子を虐待したといふ事を發表したと聞いて非常に心配し初め、若しそれが事實ならば直接忠告したいと思つたが、單なる噂を聞いただけで、はるばる日本まで渡つて行くのもどうかと思つてゐる時、日本の華族女學校で一人の英語女教師を備ひたいといふ申込が米國駐劄公使まであつたと聞き、早速志願して日本へ來たのであるが、實は大山捨松の實情を探るのが目的だつたのである。

アリスは日本へ來るとすぐ大山捨松を訪ね世間の噂をも聞いたが、米國で聞いた噂のやうな事實の

ない事を知り、安心して華族女學校女子高等師範學校に教鞭を取つてゐる時、一柳滿喜子の名を知つたのである。

滿喜子がアリスの家に着いた時は、五日前にアリスは死んで、もはや其の葬式の終つた後であつたが、アリスは死ぬ前に二、三人の親しい人と社會事業のために自分の遺産を寄附し、残つたものは全部を日本の華族の娘一柳滿喜子にその處分を一任するやう遺言したのであつた。故に滿喜子は數ヶ月滯米してその遺言に従ひ、跡始末をして日本へ歸つて來たのであつた。

滿喜子は一柳家の三女であるが、兄惠三は大阪加島銀行の頭取廣岡淺子の養子となつて其の跡を嗣いだ。その廣岡淺子は三井家の娘で三池炭礦を開發した有名な女丈夫であり、熱心な基督教信者であつたから、早くからメレルや悦藏と知つてゐた關係で、養子の廣岡惠三が東京へ住宅を建てる時、近江の基督教團と兄弟社であるヴォーリス合名會社に其の工事を一任したので、其の監督の爲にメレルも悦藏も度度廣岡家・一柳家に入出入してゐるうちに滿喜子と相知つたのである。

メレル・滿喜子の結婚式は六月三日の午後二時から東京明治學院の講堂で舉行されたが、定刻前から徳川頼貞を始め、三井家廣岡家の人達、被招待者三百名が式場に詰めかけた。メレルの附添人は悦藏で、司式は武田猪平とパアソン博士であつた。當日の滿喜子の服装は純白の禮装に眞白なヴェールを被てゐたと讀賣新聞は報じてゐる。

此の結婚はメレルを後の一柳米來留たらしめた第二の階段だったのである。

廿七日の夕、メレル・満喜子兩人の結婚披露音樂會を催して八幡基督教青年會館の講堂は満員であつた。けれども註文した菓子は間に合はず、来る筈であつた音樂家の青木兒は東京から來ず、多少の手違ひはあつたが、悦藏の吾れは主の生き給ふを知るの獨唱は、さすがに外國で聲樂家になれと勧められただけあつて會衆を満足せしめた。

三年前の大正六年十月二十二日に近江基督教傳道團に加入して湖畔の聲に毎號執筆してゐた龜谷凌雲は粉骨碎身不惜身命の行と題する長文を最後に郷里富山縣に歸つて直接傳道に従事する事になつたのは此の年の十月であつた。龜谷凌雲の來幡は滋賀縣・京都府の淨土眞宗僧侶間に多大の反響を喚び起し、彼らをして反省せしむる所が多かつたことは、その一部に於いて、

吾人ハ祖先以來淨土眞宗ノ流ヲ汲ム者ナレバ今後ニ於テモ眞俗二諦ノ宗義ヲ確守スル事

異教ヲ信ズル者アル時ハ如何ナル近親ノ間柄ト雖モ葬儀祝祭總テ何等ノ名義ヲ以テスルモ斷然絶交スル事

今後ハ名僧智識ヲ招聘シ法席ヲ開キ法雨ヲ潤ス事

と、いふ意味の規約書を發表した事に徴しても明である。一改宗者が琵琶湖上に投げた一石は其の沿岸に大きな波紋を描いたのであつた。

龜谷凌雲が去つたあとへ、雑誌靈潮を發行しつつ自給傳道をしてゐた高橋卯三郎が來て、湖畔の聲に執筆することとなり、同時に八幡教會の牧師となつたが、その招聘交渉は總て悦藏がしたのであつた。

十一月八日に藤原鐵長の爲に送別會を開いた。藤原鐵長は馬場鐵道青年會の生みの親とも言ふべき熱心なる傳道者であつたが、高松市の高松教會傳道者として赴任する事となり、八年間の長い團員生活から離れようとは夢想だもしなかつたが、これも神の命令であるから、自らも全責任を負うて信仰の途上を歩み続けるといふ意味の退團の辭を湖畔の聲第八十四號に掲げて其の意志を明にしたのであつた。

十五、二度目の世界的會合

〓大正九年〓

大正九年、悦藏三十一歳の一月一日を迎へたが、その翌二日の日記に最近讀んだ書物の名を書いてある。その中に福田徳三の資本經濟講話・徳富蘇峰の豊臣時代・沖野岩三郎の宿命・西村伊作の樂しき住家・賀川豊彦の貧民心理の研究などがある。

二月二日はメレルが八幡の地に來た滿十五周年である。その日最近閉鎖同様になつてゐた青年會館

を再興する事となり、メレル・満喜子の兩人は同館に引移り高橋卯三郎も事務擔當者として同館に住むこととなつた。そして同夜七時から青年會開館式講演會を開き京大助教授山本一清の太陽の構造について、と題する講演があり、八十名の聴衆を得た。

昨年十二月十七日に村田幸一郎の渡米送別會を開いたのであつたが、準備の都合があつて二月十七日に八幡町を出發し、十九日の午後三時乗船諏訪丸は横濱の岸壁を離れた。

此の月から悦藏は湖畔の聲誌上に湖畔の人を書きはじめた。輕快な文章で讀者から非常な歡迎を受けた。後に單行本として發行した近江の兄弟等は此の湖畔の人を再録補増したものである。

三月八日に村田幸一郎はシャアトル市に着いた。

山田寅之助が幹事として活動してゐた馬場の青年會館は同胞教會に賣り三月二十日に閉會式を挙げたが、そのあとには同胞教會牧師で農村傳道者である矢部喜好が活躍することとなつた。

四月十四日にメレルは渡米のために八幡町を出立し、満喜子の兄廣岡惠三夫妻と共に十七日解纜のエンブレツス・オブ・エイジア號に乗り込んだ。村田幸一郎去りメレルの去つた近江基督教慈善教化財團の事務は、當分の間悦藏一人が主として處理しなければならぬ大多忙であつた。

五月の或日メレルからの第一信が來た。それによると、メレルと同船したタカジャスタアゼの發明者高峯讓吉から近江基督教慈善教化財團の爲に金百弗を寄附されたのであつた。

六月二十日は悦藏の母りうの永眠第三周年に當るので其の記念講演會を教會堂に開いて、原田助の講演があつた。昨日のやうに思はれる母の臨終がもう三年を経過してゐる。二十五年間喫ひ續けた煙草をやめる事に成功して、悦藏とうとうやめました。と、うれしさうに握つた手の温かさが、まだ自分の掌に残つてゐるやうに感じられたことであらう。

此の月までに悦藏の書いた小冊子傳道叢書は、生か死か・神か金か・己が罪か人の罪か・受くるよと與ふるは幸也・祈る心・宇宙の人・信仰論・人としての責任・醒めよ。の九冊であつた。定價は一錢百部以上九厘といふので頻りに版を重ねた。

歸國中であつたメレルは八月十一日に横濱に上陸して十四日の午後五時彼は悦藏と共に八幡町へ歸つたのである。メレルの歸朝土産は近江療養院へピアノ一臺とエキス光線の機械一揃ひであつた。

近江療養院では肉體の治療と共に精神治療にも力を致してゐた結果、入院患者の多氣ユキ子が洗禮を受けたいと申し出たので、九月十六日に武田猪平の司式で多氣ユキの洗禮式と入院患者中の基督教徒の聖餐式を舉行した。

此の頃から悦藏の身には大きな責務と繁忙が襲つて來た。それは彼が近く開會せられる第八回世界日曜學校大會の準備委員に選舉せられたからである。

世界日曜學校大會の第一回は明治二十二年七月一日から六日までロンドンで開かれ、第二回大會は

明治二十六年に米國セントルイス市で、第三回大會は明治三十一年に再びロンドンで、第四回大會は明治三十七年にエルサレムで、第五回大會は明治四十年にイタリア國ロウマ市で、第六回大會は明治四十三年に米國ワシントン市で、第七回大會は大正二年にスイス國チューリヒ市で開かれたのである。此の時日本を代表して出席したのは明治學院總理井深梶之助であつた。會場は風光明媚を以つて有名なチューリヒ湖畔のトンハアレイ音楽堂で出席者は七十箇國の代員二千六百名が集り、七月八日の午後嘗て樂聖ワグネルが寓居して數曲の大作をなしたので有名な、リイテル・ホドメル夫人邸の歡迎會に始まり各國代表の精細な報告や討議があつて、集會は正に最高潮に達した時、日本の代表者井深梶之助は起つて第八回世界日曜學校大會を東京市に招待したき動議を提出すると直ちに賛成者があり、拍手のうちにその動議は成立可決されたのであつた。

明治四十年に始めて世界的集會萬國基督教青年大會を東京に開いた日本が第二回目の世界的大會を開くのである。曩の大會では十八歳の少年で青年會館の地下室で書籍を賣つた悦藏は、今度の大會では準備委員・庶務係長・通譯といふ大役を引き受け開會の數箇月前から東奔西走したのである。

來會者は總計千七百八十六人で、その中の五百十三人は北米合衆國から、七十四人はカナダから、十七人は支那から、八人はハワイから、六人は南米から、七人は濠洲から、五人はスコットランドから、九人はイングランドから、四人はオランダから、五人は印度から、臺灣・朝鮮から四十五人、そ

の他シヤム・アフリカから各一人であつた。日本内地の代表者は七百八十六人の多き上つた。

會場は東京驛前西側の空地に設ける事となり、メルと悦藏が其の設計の任に當り、大林組がこれを建築する事になつた。四千人を容るべき四階建である。僅に十日間しか用ひない假建築で、拾貳萬圓餘の豫算であつた。

此の大會に要する費用は約三十萬圓であつた。其の後援會長は大隈重信で副會長は澁澤榮一であり阪谷芳郎・田尻稻次郎・藤山雷太等が賛助者であつた。準備委員である悦藏は映畫會を開いたり有志者を訪問して寄附金の募集をしたり外來客の宿舍の割當を相談したり、觀光地圖・案内書・汽車時間表の印刷などの相談に預つたりした

長くも皇室より金貳萬圓の御下賜金があり、開催準備金も調つた。東京市内の有志者が争つて自宅を開放して、外人の旅舎に提供を申込んで來た、四階建の會場も出來上つて、開會準備は萬事出來上つた。

いよいよ十月五日の開會當日となつた。九月二十八日から八日間會場に來て終日立ち通して萬事の指圖をしてゐた悦藏は、午後七時開會の三時前に佐藤安太郎・林邦彦・婦人事務員某の四人で事務室の整理をしてゐた。會場からは一千人の大唱歌隊の合唱練習の聲がなごやかに流れて來つた。其の時、意外にも不思議な物音を聞いた。火事である。プラットフォームの裝飾の鳩の眼に豆電球を取

りつけてあつたのだが、まだ完全な電気工事が出来てゐないとは知らず、誰かがスイッチを入れたのである。すると壁の布ぎれに火がついたのを箒でたいたり手で揉み消さうとしてゐる。建物は土壁なしの燃料ばかりである。たちまちに火は二階三階と燃え広がつて行つた。火事はいつたん火氣が屋根裏に籠つて、それから大きく爆發して燃え出す事を知つてゐた彼は、こは一大事と庶務一切の書類、それこそ鉛筆一本も残さずカアド・プログラム一切を佐藤安太郎に託して、いの一に硝子の雨の中を必死になつて表へ駆け出したのであつた。

会場は僅に三十分間で跡方もなく焼けてしまつた。此の出火が今三四時間遅かつたならば多人數の負傷者が出たに相違ないが、入場者がまだ一人も無かつたので幸にも一人の負傷者を出さなかつた。

開會三時間前に会場を祝融氏に奪はれた此の世界日曜學校大會は、その世界各國から集り來つた代表者を餘焔の未だ収まらない燒跡に立たせるわけには行かない。此の時後援會副會長である澁澤榮一は自己の管理する帝國劇場の演劇を中止して直にその會場に宛てたことは各國代表者の意外とする所であつた。徽章を胸にした悦藏は電車に自動車に自由に飛び乗つて縦横に駆け巡つたが、間もなく新會場の事務室に自分の爲すべき持場を守つてゐた。

會議は遲滞なく豫定通り進行して十月十日には日比谷公園音楽堂前に約三萬人の日曜學校生徒が日の丸の國旗を手ん手に集り、各國代表者は彼等の在留人と共に各自自國の國旗を押し立てて日章旗の後

に跟いて、銀座から馬場先門に出で二重橋前に整列して君が代を合唱した後天にも響けよと萬歳を三唱した。彼は自分の眼前で世界各國の男女が一齊に歌つた君が代と、同音に叫んだ萬歳の聲を聞いた時、兩の頬を傳つて流れる涙をどうする事も出来なかつたと其の後友人の一人に語つたのであつた。翌十一日の午前九時には此の大會から皇室に献上する、兩陛下の油繪の御肖像の除幕式が行はれ、君が代の吹奏と共に一千八百の全員が起立、最敬禮のもとに其の式を嚴肅に終つた時、彼は更に日本の基督教が歩むべき途を暗示せられたのであつた。

十月十四日に世界日曜學校大會は無事に終了した。けれども彼はその跡始末の爲月末まで東京に留らざるを得なかつた。

十二月十五日に資本金十萬圓の近江セールズ株式會社を組織して其の登録を済し、悦藏は其の設立發起人・取締役となつた。此の會社は從來のヴォーリス台名會社を解散して設立したものであり、近江基督教慈善教化財團の産業部であることに異變はなかつた。

十二月二十二日に村田幸一郎は外遊見學の使命を果して無事に歸つて來た。

本年のクリスマス祝會は、武佐・野田・大原・療養院・八幡・多賀・米原・今津・堅田・日野・大津・膳所・長濱・水口の順序で行はれた。

十六、紫苑會館

〓 大正十年 〓

一七四

大正十年、悦藏は三十二歳になつた。此の年一月發行の湖畔の聲の謹賀新年廣告には、近江基督教傳道團・近江基督教慈善教化財團・近江療養院・ヴォーリス建築事務所・近江セールズ株式會社・福音傳道船ガリラヤ丸・湖聲社と七種の名が出てゐる。まだ内部の組織が完全に統一できないで發展しつつある證據であらう。

近江基督教傳道團は時として基督教近江傳道團とも言つた。それは普通近江ミツションと呼んでゐるからであつたらう。近江療養院は近江基督教慈善教化財團の事業であつて分離獨立してゐるのではない。ヴォーリス建築事務所は建築設計監督を引受ける所で、東京と大阪に出張所がある。近江セールズ株式會社は建築材料の直輸入販賣をするので、ペンキ・ステイン・モレスコ(壁塗材料)消火器・建具金物を販賣する目的で、ハイドに貰つて來たメンソレータムなどは、その頃はまだ問題ではなかつたのである。

一月二十二日の夜、昨年末に歸朝した村田幸一郎の歓迎會と共に一箇年の見學談を聞いた。村田幸一郎の話は船中の病狀から、シヤアトルの移民局で罪人扱ひを受けたこと、旅の空でメレルに會つた嬉しさ。議會を傍聽した時副大統領が古ぼけた紺サアジの洋服を着てゐた事。生れて始めて莫大な紙

幣を印刷局で見たが一枚も呉れなかつた事。三重苦のヘレンケラアの話を開くために五圓五十錢の木戸錢を奮發したこと。今はメレルの善半身となつてゐる一柳満喜子の學んでゐたブリモア大學を見に行つた話。某牧師が近來の紊れ行く避暑地廓清運動に一身を投じてゐる話など、それからそれへと盡くる所を知らなかつた。

此の頃政府當局は全国各地に青少年の爲に圖書館を設けることを奨励したので、到る所に圖書館が設立された。蒲生郡市邊村にも其の議が起り設計を頼みに來た。しかし設計料のかはりに青年の勞力を提供するといふので事務所の方では快くそれを引受けた。すると四月五日・六日・十五日の三回に筋骨逞しい青年達が三十人づつ八幡町に來てまめまめしく立働いた。高橋卯三郎は毎回一時間づつ精神講話をして青年達を慰めたのであつた。

四月七日・八日兩日間組合教會京都部會が八幡教會で開かれ、三家庭を開放して其の宿舍に宛てた。近江基督教傳道團の實力が公に認められて來た證據である。

四月廿四日には京都洛陽教會員十餘名が近江基督教傳道團の事業を視察に來たので、悦藏が案内役となつて各施設を縦覽せしめた。

五月十六日から五日間賀川豊彦の講演があつて求道者三十名を得た。

一七五

此の月までの近江療養院は大正七年六月から通計百九十一名の患者を收容した。延人員は八千四十七名で、外來患者延人員二千三百五十四名、目下の收容患者は二十五名であつた。此の間の經常費は六萬三千七百餘圓で、近江基督教慈善教化財團からの補助は壹萬參千餘圓であつた。六月四日午後二時から設立滿三年の記念會を開いた。

十二月十七日米原紫苑會館が落成したので、今まで八幡町の青年會で働いてゐた山田寅之助が主任として定住することになつた。米原紫苑會館は馬場鐵道青年會館の後身である。これまで馬場にあつた鐵道機關庫が他に移轉したので、自然鐵道青年會の使命も終を告げ、その會館を同胞教會に譲り渡し、新に此紫苑會館が設けられたのである。午後三時からの開館は悦藏の司會で浪川岩次郎の聖書朗讀・村田幸一郎の捧堂祈禱・武田猪平の開會の辭・メレルの報告があつた後、同志社總長海老名彈正の講演があつた。

本年のクリスマス祝會は、堅田・今津・野田・近江療養院・長命寺・八幡・能登川・安土・近江基督教傳道團・日野・水口・多賀・米原の十三箇所で開催された。

十七、メンソレータム時代

||大正十一年||

悦藏が三十三歳になつた年の大正十一年二月発行の湖はんのこゑ第百十號十六ページには、家庭常備藥メンソレータムの大きな廣告が出た。それはこれまで近江セールズ株式會社の直輸入販賣をしてゐた建築材料以外に更にメンソレータムといふ藥品を賣り始めたが爲である。

同誌第一號から百九號までの一頁大の廣告はいつも高田哢安の東洋内科醫院と仁丹とで占領せられてゐたのであつたが、一年前の大正十年十二月號の九分の一ページの近江セールズ株式會社の廣告に家庭常備藥。メンソレータム日本一手販賣特約店の細字二行が加つてゐた。然るに大正十一年の二月號から突如として高田哢安と仁丹が姿を消したのである。三月號にはメンソレータムの外に定價七百七十五圓のミーズナーピアノが加はり、後には天體望遠鏡だのオイル・ストーヴなどの廣告も出たが、ピアノも望遠鏡もストーヴも各戸に一つづつといふわけにも行かず、その販賣先が狭いに反して、メンソレータムは家庭常備藥として各戸に販賣先を求むる可能性があつた。否各個人に一個づつ賣れる見込もあつたのだが、當時の悦藏もメレルも村田幸一郎も、メンソレータムをそれほど重く見てゐなかつた。

大正三年三月十三日に悦藏とメレルが土産として持つて來た此のメンソレータムは、その後の六七年間極めて少數の個數しか賣れなかつたのである。折角もらつて來た此の藥を悦藏は自ら用ひてみた。團員にも勧めて用ひさせた。なるほど打傷・切傷・靴ずれ・蚊や蚤の口あと・鬚剃のあとによい

薬である、少少の風邪など鼻孔へ多量に詰めて置くと一夜にして癒る。けれども、さてこれを廣く賣り出すといふ方法がない。仁丹はよく賣れる。しかし、それは一朝一夕にして賣り出されたものではない。寶丹がまだ珍重がられる。それは數十年の歴史があるからである。

悅藏はどこへ行つてもメンソレータムをポケットに容れてゐて、會ふ人毎に其の效能を説いた。效能を聞いた人たちは、無料で呉れるなら義理にもらふが金を出して買はうとはしない。それでも事務所陳列窓へ並べて置くと、八幡町内の人達がよく利く薬だと言つて頻りに買ひに来る。けれどもそれは商賣にする程度のものではなかつた。ところが或日のこと滋賀縣廳からメンソレータムを分析してみるとこれは藥品である。藥品を賣るには賣藥の免許を受け一定の印紙を貼らなければならないが印紙を貼らずに賣るのは賣藥規則違反だといふので告發されたのであつたが、時の八幡警察署長は長濱教會牧師山田兵助・村田幸一郎等の知人で穩當な人であつたから、事情を知らずして化粧品として賣つて居たものとして譴責處分で解決してくれたのであつた。

そこで一應賣藥の届出はして置いたが別にそれを手廣く販賣しようといふ意志も無かつたので、自分たちの發行してゐる湖畔の聲誌上にすら一行の廣告もしなかつたのである。

南總里見八犬傳の著者瀧澤馬琴は江戸の九段中坂に住んでゐた。その屋敷には今に瀧澤家の子孫が

住んでゐる。瀧澤家の前に商會の看板を掲げた一軒の大きな家がある。その主人の名を佐藤安太郎といつた。此の佐藤家と瀧澤家とは代代非常に親密な間柄で、當主の瀧澤邦行は科學的藝術家で櫻花の研究者であり、其の寫生畫家として知名であつたが、佐藤安太郎とは特に懇意だつたのである。

佐藤安太郎は偶とした動機から赤坂靈南坂教會員の武田輪之助に導かれて其の教會に通つて小崎弘道の説教を聞いてゐるうちに基督教の教理がわかり遂に小崎弘道から洗禮を受けたのであつた。ところが大正九年の夏彼は盲腸炎の手術を受けた。其の豫後が思はしくないので信州野澤温泉に行つて養生してゐるうちに彼の信仰はだんだん深くなつて神の恩寵をしみじみと悟つた。今まで神の道知らなかつた自分に、神は盲腸炎といふ難病を與へ其の腹部を截開させて此の眞理を教へて下さつたのだと感謝しつつ東京九段の自宅に歸つたのは九月の半頃であつた。そこへ或日のこと小崎弘道夫人千代子・靈南坂教會副牧師三宅正彦・教會員武田輪之助の三人が訪ねて来て、東京驛前に建築中の世界日曜學校大會の會場を見に行つた。そして小崎千代子の紹介で始めて長尾半平に紹介されたのであつた。

それから二三日の後に小崎道雄が訪ねて來た。それは世界日曜學校大會の準備委員であり庶務係長である悅藏から、誰の前に出ても恥かしからぬ一人の紳士を此の大會の接待役として奉仕を頼んでくれないかと依頼されたので、誰彼と詮索の結果人品といひ年輩といひ佐藤安太郎が最適任だらうとい

ふので、其の相談に來たのであつた。當時の彼はまだ近江基督教傳道團のことも、そこにメレルや悦藏や村田幸一郎等のゐることも、少しも知らなかつたのである。けれども尊敬する小崎弘道の御曹子が使者になつて來て此の意義ある國際的の仕事に奉仕してくれないかと言つたので、彼はこれを神の命令と感じ、今は此の通り病後だから過激な仕事は出來ないが、といふ條件付で喜んで承諾すると、美土代町の基督教青年會館に近江八幡の吉田悦藏がゐるから會つてくれ。と、いふので、始めて悦藏に會つたのは九月の末であつた。

その時彼は三十九歳で悦藏よりも九年の年長であつたが、彼の眼に映じた悦藏は實に清楚な感じであつた。優しい關西辯に一種の魅力さへあつた。

彼は躊躇なく悦藏と事を共にする約束をして毎日會場へ出て行つた。そして開會三時間前の火事に彼は雨と降る硝子の危險を冒して會場から無事に逃げ出したのであつた。

帝國劇場を會場として開會した世界日曜學校大會に就いて、彼は始終驚嘆の仕續けであつた。先づ一千人の合唱隊には度膽を抜かれた。世界の各國旗が宮城前に集つて萬歳を唱へた時、兩陛下の御肖像の除幕式が行はれた時、舞臺一杯のベエジェントを見た時、言ひ知れない感激が彼の胸に溢れた。

彼は此の大會會場で遺失物係を勤めた。そして毎日のやうに悦藏と顔を合せてゐるうちに、近江基督教傳道團の内地留學生だといふ一人の青年に出會つた。名を鎌田漢三といふ東北辯の質朴な男であ

つた。彼は此の鎌田漢三から悦藏の事を精しく聞いた。随つて近江基督教傳道團の話も聞いた。聞いてゐるうちに鎌田漢三の話は話半分にした所で大したものだと思つたが、彼は事を誇張して言ふやうな男ではない。

世界日曜學校大會の跡始末もすんで、悦藏が近江八幡へ歸る時、一度八幡へ遊びに來いと言つてくれたので、つい行つて見る氣になつたのは大正九年十月の末であつた。

彼は八月に來てから傳道團の内容を知つた。それは精神的の内容であつた。團員の總てはみな質素で中には破れた着物をていねいに繕つて着てゐる人もある。武田猪平牧師の洋服の如きも随分古いものであつた。

彼は一日傳道團の集會に出た時、此の若き人人の群の中に燃え盛らんとしてゐる傳道精神に觸れてしみじみ感心した。そして、自分も斯ういふ團體の一員となつて働いてみたいと思つたが、東京の細君のます子から至急に歸京せよといふ電報が來た。幼い時本願寺の日曜學校に通ひお稚兒になつた事のある彼女は、まだ基督教の信仰に入つてゐなかつたので、占師に易を立ててもらふと、近江八幡の方面へ旅行してゐると、病氣に罹るか家に火事があるか、何れにしろ早く歸らせるがよいと言はれ、驚いて電報を打つたのであつた。

彼は其の電報を受取つた時一種の感受性で別に驚くほどの事は無いと思ひ、こんな電報を受取つた

のだが。と、言つて悦藏に見せると、今一度土曜の朝の集會に出席してから歸つたならどうだ。と、言つたので、彼は歸京を一日延ばして其の集會に列した時、いよいよ此の一團と行動を共にしようといふ決心が出来たのである。そこで彼は一旦東京に歸り直ぐ荷物を纏めて單身八幡町に来て取敢へず孫平治町に一戸を構へた。そして彼は團員の一人となつて浪川岩次郎らと共に雜貨部や家具部で手傳つてゐるうちに、まだ賣品として世間に知られてゐないメンソレータムのある事を知り、その製造元のハイドから近江基督教傳道團の手に渡つた由來を聞いてひどく感激し、これを此の近江基督教傳道團からの販賣品にしようと思ひつき、これを悦藏に相談すると、彼も適所に適材と思つたか、佐藤安太郎にこれを擔當してもらふことにした。

團員は大勢あるが、實際家の商賣人としての經驗を有する者は佐藤安太郎一人であつたので、彼はメンソレータム販賣を自分の事業のやうに思つて専心これに當ることにした。無論最初の頃は彼一人で傳票も小包も發送も受持つ程度であつたが、何とかして一包でも多く賣りたいと思つて大阪に行き京都に行つて藥問屋を訪問してメンソレータムの取次を頼んでみたが、相手になつてくれるのは小僧たちだけで、番頭は結果の中で算盤玉から目を離してさへくれない。しかも小僧からは賣れませんなあ。の、一語で突放されるのである。そこで彼は日本全國の基督教會へ呼びかける案を立て、その賣上金の幾分を做道の爲に使用することを説き廻つたので、先づ基督教會の婦人會がそれを引受けるや

うになり、メンソレータムの名は冷く基督教會員に知られ、翌十年には約一萬圓の賣上高を見るやうになつたので、さてこそ大正十一年二月の湖はんのこゑ誌上に一ペエジ大の廣告を出したのである。此の頃から悦藏はメンソレータムは將來きつとよく賣れるやうになるといふ見込をつけて、其の商才と文才と社交術とを以つて活動を始め、遂に近江基督教傳道團からメンソレータム時代を産み出したのであつた。

佐藤安太郎が入團した時の同勞者は、武田猪平・高橋卯三郎・メレル・満喜子・悦藏・村田幸一郎・山田寅之助・佐藤久勝・浪川岩次郎・西澤正治・林邦彦・板倉宗太郎・原泰敏・西川與三郎・西井義一・富永亨・富永孟・江龍一彦・渡邊光太・原仙太郎・豊田清次・若山小兵衛・笠井清一・柿元榮藏・片桐重次・河瀬忠一・片岡つる・神井つゆ・吉村清太郎・吉川信太郎・谷一東・瀧川健次・永原庄次郎・草間千滿枝・隈元周輔・山本庄之助・前田彦一・神品茂作・佐藤正夫・北村かね・宮川基一・廣瀬貞・菅繁彦・林徳洙・姜沆・ロビア・バンタ・ラアセン・ウオーターハウス等であつた。

二月九日の夕方、悦藏・きよのの兩人は團員の多勢に見送られて八幡驛から横濱行の汽車に乗つた。それはきよのが營養料理の研究をするために米國へ見學に行く爲であつた。

悦藏は少年の頃蒲柳の質であつた。父も強酒の結果瘠せ衰へて死に妹のまつ子も弱體であつた。け